
君の体を貸してくれ！

一天草莽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の体を貸してくれ！

【Nコード】

N9895T

【作者名】

一天草莽

【あらすじ】

見るからに軟弱者だけど、それでもたった一つだけ特殊な能力を持っている、とある男の奮闘記になる予定です。一応ファンタジーのつもりなのですが……。 (気分転換に勢いだけで執筆し始めてしまったので、設定や文章などが軽いと思われます。ご覧になる場合はご注意ください)

1・危機

……僕は、まだまだ生き延びたいんだ！

そう思いながら、僕は後ろを振り返る。いくら足元がアスファルトで舗装されているとはいえ、こうして追いかけて命の危機を前にすると、走らせる足も呼吸も精神状態も、とてもじゃないが逃げ続ける羽目になる僕は長続きしない。

足はくたくた、呼吸は乱れ、頭は軽いパニックだ。

「ま、まだ追ってきてやがるし！」

今一度自らに迫る命の危機を確認して、僕は自分のすべてを奮い立たせる。

動きの衰えてきた足の代わりに腕を大きく振り、過呼吸か酸欠かわからないくらいに呼吸のピッチを早めて、無駄な思考を削ぎ落としてただ逃げることを考える。

……だって、僕はやっとこの世界に来たばかりなんだから！

「畜生、本当は僕が追っかけまわす側の人間だったはずなのに！」

それなのに、まさかいきなり敵と遭遇してしまうなんて、いくらなんでもそりやないぜ！

自分の悪運を嘆きながら、それでも走るペースは落とさずに、僕は周囲を見渡した。

「ひとまず身を隠せそうところはないのでしょうかね！」

事前に勉強して蓄えた知識によれば、ここは日本という国にある地方都市の一つで、人口四万人くらいの母屋市という場所らしい。異世界旅行が一般化した僕の生まれ故郷とは比べ物にならないくらいの文明レベルみたいだけど、それでも二十一世紀を迎えたというこの世界は、僕らが生活するにも取り立てて不都合らしきものはない。

だから僕はこの地に派遣させられるとわかったとき、まあいいか、くらいにしか思っていなかったのだ。なのに、初っ端から窮地に立

たされてしまうなんて！

想定範囲外ですから。

「とわー！ とにかく、その辺の物陰にグイブツ！」

このまま舗装された道を一直線に走り続けるままでは、体力のない僕はそのうち力尽きてしまうことなどわかりきっているので、頃合を見計らって脇道へと飛び込んでみた。

我ながらナイス機転。そして思い切りのよさ。ただ一つ後悔するべくは、脇道にわき目もふらず飛び込んでしまったので、何かにぶつかってしまったことだった。

「きゃあ！」

しかも、それが女性ときたのだからさあ大変。ここまで来ると悪運は一周回って幸運にも様変わりしてしまうのだけど、果たして今回はどうかのか。

って、そんなことより、彼女はこんな路地裏みたいなところにしやがみこんで、一体何をしているのだろう？ 思わず出会いがしらで彼女の肩口に飛び膝蹴りを決めてしまったが、それも土下座で許していただけだろうか？

「申し訳ございません！」

まあ、聞く前に謝るのが常識。今まさに追いかけて窮地にある身とはいえ、礼儀と常識を忘れてはいかんです。

僕は地面に額を擦り付けながら、荒い呼吸とともに謝罪を繰り返した。

その間、ものの数秒。

「あ、大丈夫ですから顔を上げてください。私もびつくりしただけ……じゃなく、とても肩が痛いんですけど」

「そうですか、ありがとう！ それじゃ僕は急いでいるので、では！」

彼女の言葉を最後まで聞き終わる前に、僕は慌てて逃走劇を再開した。

さすがに罪悪感が後ろ髪を引いたけど、関係のないことに彼女を

巻き込むわけにはいかない。僕は心の中で彼女に詫びつつ、この場から一刻も早く離れるべきだと考えたのだ。

「きゃあ！」

ところが、再び聞こえてきた彼女の悲鳴。数歩進んでいた僕は急ブレーキをかけ、逃げ出すのを一旦停止。

「どうしたんですか！」

そう言っただけ振り返った僕の目に飛び込んできたのは、今まで僕を追ってきた敵の姿と、それを前にして尻餅をつきながら怯える彼女だった。

「うわー。やっぱりあれ、もう実体化してるのかー」

さすがに、これには僕もため息がもれた。

僕のことを追ってきた敵もまだ完全には実体化していないから、僕以外の一般人には影響もないだろうと思っていたのに、どうやらすでに事態は一刻を争うようだ。

ところで、ここで僕はその敵の姿を表現するのに、この国の言葉で三つくらいあれば十分だと考える。……でかい、黒い、狼。

さて、それで状況が伝わっただろうか？

「さあ、逃げるよ。とにかく君も逃げなくちゃまずい」

怯えている彼女の手を強く握り締め、僕は逃げるように駆け出す。しかし、そんな僕の動きを彼女は引きとめて、焦りをあらわにこう叫ぶ。

「待ってください！ あ、あそこの子猫が！」

彼女が指差した先には、ダンボールにちょこんとすっぽり入った子猫ちゃん。……うわ、すごく可愛い。あれが噂の、いわゆる捨て猫というものだろうか。あんなに可愛い生き物を道端に置き去りにしてしまうなんて、全く信じられないね。プンスカ。

緊急事態だというのに、子猫のあまりの可愛さに思わず和んでしまう僕。よく目を凝らして観察すると子猫の前には千切られたパンが置かれているから、きっと彼女は子猫にえさをあげていたんだろうなあ、などと想像して心をポカポカ暖めた。

ところがなんと、巨大な黒狼がその子猫に鼻先を近づけ、実におぞましい表情を見せているではないか！ まさか食べる気か！ なんて化け物だ！

「くそう、できることなら助きたい！」

けれど、今の僕はどこまでも無力。足も恐怖で震えている。

「で、でも、早く助けないとあの子が！」

そう言って身を乗り出した彼女を、無力な僕は右手で制す。彼女のはやる気持ちはわかるけれど、その気持ちだけで立ち向かったってどうにもならない。

だから僕は、呼吸を整えて彼女の顔を真正面から見つめると、その覚悟を確認するためにこう尋ねることにした。

「ねえ、君はあの子猫を助きたい？ そして、そのためなら僕に力を貸してくれる？」

きつとこの世界の普通の人間は、特に彼女のように可憐な少女はこの問いに自信を持つてうなずくことなどできないだろうと思っていた。

どんなに綺麗な御託を並べても、そこに覚悟は伴わないだろうと思っていた。

「当たり前です！」

それなのに彼女は、一切の迷いなく首を縦に振って見せるのだ。

「……すごいな。なんかもう色々、守りたくなってきた」

彼女の反応を見てそう思った僕は、改めて敵のほうへと向き直る。

——ところで、自慢じゃないが僕には誇るべき能力がたった一つだけある。

身体能力はこの世界においても低レベル。頭脳だって故郷の文明に似合わずいまひとつ。拳句の果てには努力も根性も勇気すらも、何一つ僕の心に備わっていない。

それでも僕には、いや、僕らにはたった一つの頼れる力があつただの。

だけど、悲しいことにそれは。

「よし、わかった。それじゃあ、君の体を貸してくれ！」

僕ひとりの力では、何もできやしない役立たずな能力だ。

「え？ ええ？」

だから僕は、彼女の小さな唇へと顔をそっと近づけて……。

「僕は必ず、君とあの子猫と、それから世界を救うから」

この世界で初めてのキスを交わしたのだった。

2・ペーゼ

彼女の唇は、ふわりと優しい触れ心地だった。

「——ん、ん」

ほんの一瞬、唇と唇が触れ合うだけだというのに、たったそれだけのことで、僕と彼女は心から一つになったような、奥深いところでつながれたような気がした。

すると僕の体はキラキラと輝く粒子となり、彼女の体を隅々まで満たしていく。

「ん、ん——」

満たされた僕と彼女が我に返ったそのときには、僕と彼女は一つになっていた。

うら若き彼女の体へと、僕が憑依したのである。

「……すごい。うわぁ、君の体って素敵だね！」

ごく純粹に、僕は同じ体、心の中で一つになっている彼女へと褒め言葉を送ったつもりなのだけど。

『ちよつと、やめてくださいよ！ 変態！』

心の中で彼女はものすごく抵抗が激しかった。

『変態、変態！ ……って、あれね？ ちよ、ちよつと、これ！』

私の体が自由に動かさせんけど！』

「落ち着いて！ 説明はあとでちゃんとするから、とりあえず今は僕にすべて任せて！」

心の中で騒ぎ続ける彼女を差し置いて、僕は今しがた僕の体となった、彼女の体をパパッと確認する。本来の自分の体とはサイズも仕組みも違う部分が多いから、慣れるのに多少時間が必要なのだ。

いくら僕がひよろひよろと貧弱な男性だったとはいえ、やはり無骨な男の体とは違って、女性の体というのは色々ところ……やわらかくていい。しなやかだし。スメルもグッド。

うっはー、髪の毛なんかサッサラサラー。ぷにぷに、ふにふに、も

「うちもちー！」

『って、変態！ やっぱりただの変態じゃないですか！』

「うわぁ、ごめん！ すっかり目的を履き違えていた！」

こうして彼女の体を借りた以上、しつかり約束を果たさなければ男失格だ！

もはや見た目は女性そのものだが、僕は彼女の体を我が物にする
と、ようやくこちらへ敵意を向けてきた大きな黒い狼へと構える。

ちなみに、ここで簡単に僕的能力を紹介しておこう。だけど、無
闇にだらだらと説明するのは面倒だろうから、この国の言葉を三つ
くらい使って簡単に説明すると……。

キスして、憑依して、魔法を使う。

まあ、今はそう理解していただきたい。では、戦闘開始だ。

『来てます！ 来てます！』

心の中の彼女が、まるでハンドパワーを使い出しそうなフレーズ
とともに体の主導権を持つ僕へと注意を促した。その声にハツとし
て顔を上げると、今にも目の前の黒狼が飛び掛ってきそうな構えを
見せている。

「安心してくれ！ 美しい君の体を、むざむざ傷つけさせたりはし
ない！」

そう言つと、僕が操る彼女の体は、細長い両腕を中心として神々
しく光り輝く。

『ちょ、私の体が光ってますけど？』

「むしろ光らなければ駄目なんだ。なにしろこれは、れっきとした
魔法なんだから！」

『ま、まふおう？』

「まるで信じちゃいないね……。まあ、見ていればわかるから」

パンパンと手を叩いて気合を入れると、僕はより一層激しく両腕
に意識を集中させ、その輝きを何倍にも高めていく。

そして鋭い牙をむき出しにして飛び掛ってきた黒狼を相手に、ま
ずは彼女の右手、続いて左手と、連続でワンツーパンチを食らわせ

てやった。

『どこが魔法ですか！ それにそんな乱暴に殴りつけしないで、もっと私の手を大事にしてくださいよ！ 傷つくじゃないですか！』

まあ、確かに手がジンジンと痛むのは隠しようもないけれど。

「いやいや、これが僕の魔法なんですって。こうして光り輝くことによって、あの敵にもこちらの攻撃が通るといっ」

魔法という割には地味だけど、これが使えると使えないとは全然違うからね。

それに残念ながら、あの敵には普通の攻撃がまるで通用しないのだ。……よっぽど敵のほうが魔法使いっぱいな。

『な、なんですか、それ……』

あれ、彼女がちょっと落胆しているぞ？ 今は二人で同じ体を共有しているから、彼女の落胆も僕にそのまま伝わってくるようで、なんか変な感じだ。

そもそも脳内でしゃべっているようなこの感じ。……癖になりそう。

「だから魔法だってば」

『……もつとこう、炎とか電撃とかビームとか、空を飛んだり時間止めたり分身したり、そういうメルヘンチックな魔女っ子っぽい魔法を期待したんですが！』

「あはは、あつきらゝめてゝ」

『笑ってる場合じゃないですし！ 笑える心境じゃないですし！』

彼女は心の中で僕の肩を何度も叩いてくるみたいだった。たぶん、あまりの出来事にてんぱっているんだろう。ふむ、ここはちゃんと僕がリードして、この状況を切り抜けてみせるべきに違いない。

そう思って前を見直すと、先ほど僕に殴られた黒狼は、まるで火に焼かれたかのように苦しみもだえていた。もうこのままこちらから手を出さずとも、勝手に敗れ去っていきそうなほどである。

そう、これこそが僕の魔法の力なのだ。光を帯びた攻撃は、触れただけでも敵に致命的ダメージを与えてしまう。よほどの強敵でも

ない限り、魔法が使える状況にさえ持ち込めれば僕の勝利は約束されているも同然なのだ。

えへへ。これぞ、形・勢・逆・転！

「キラキラっ！」

『私の体を使って恥ずかしい決めポーズは止めてください！』

「シャキーン！」

『それも全然格好良くないですから！ 小学生かよっ！』

うーん、どうやら彼女にはことごとく不評みたいだ。折角徹夜してまで考えてきた勝利のポーズだったのになあ。残念。

「ま、そんなことより敵にとどめ、とどめつと。さあ、とどめを刺さないと」

『油断大敵ってことで、自分にもお灸を据えておくべきだと思いますけどね』

彼女の厳しいコメントは胸に刻んでおくとして、僕は最後の仕上げとして敵である黒狼をにらみつけた。そしてもう一度全身の神経を研ぎ澄ませると、体中をまばゆいほどに輝かせ、黒狼に向かって特攻した。

命名、流星アタック。……この国の事情については詳しく知らないけど、すでに商標を取られているような気がしてきた。うむ、次までに新しい技名を考えることにしよう。

「やった、敵を倒したよ！」

僕の輝きタックル（仮）を受けて、黒狼はおぞましい断末魔とともに消え去っていくのだった。とにもかくにも、これでひとまず危機を脱したのだから、僕はほっと胸をなでおろす。そっと胸をなでまわす。

『感謝を告げるべきか、痴漢と騒ぎ立てるべきか。……ああ、それが問題です』

「……申し訳ありません！」

うん、悪いと思ったら即土下座だね。

『って、私の体で土下座しないでくださいよ！ 私の額を地面にこ

すり付けないでくださいよ！ 誠意は伝わりましたから、もうやめてー！』

「それはよかった」

僕は立ち上がり、膝小僧についた土を手で振り払う。それにしても手足が細長くて綺麗だな。どうしてこう、男の体とは違うのか不思議である。それともこれ、世界の違い？

『ところで、いつになったら私の体を私に明け渡していただけるのでしょうか？』

彼女は急に声のトーンを落とし、不安たっぷりで僕に尋ねてくる。きつといつまでも体が僕に乗っ取られたままじゃないかと、恐れているのだろう。けどもちろん僕にそんなつもりはないし、それにこれはそこまで完璧な能力でもないのだ。

「うん、もうすぐだと思うんだ」

『もうすぐって……って、あれ？』

まさに彼女がそう呟いた瞬間、僕が憑依した彼女の体は再び輝き始める。

まるで意識が浮遊したように僕はゆらゆらと視界をゆがめられ、彼女の体の奥深き場所から弾き出されるように乖離する。僕と彼女の意識が離れていく。

そして気がつくと僕らは、お互いの体を取り戻していた。

「——ふわぁ、ようやく戻れたね。ああ、なんか自分の体が懐かしいや」

久しぶりの我が家……じゃなくて、我が体はやっぱ心が落ち着くなぁ。ううーんと大きく背伸びをして、ふふぁーと盛大に息を吐き出した。

魔法を使うとは、疲れるものなのだ。心身ともに、マジで苦になるマジックなんてね。

「ところで君、もう一度ありがとう」

感謝の意をこめて、僕は改めて彼女に向かって深々と頭を下げる。いくら彼女の同意の上とはいえ、ちゃんとした説明もなしに巻き込

んでしまったのは僕の失点だ。

それより、“もう一度”とか言ってしまったけど、そもそも一回目はあったっけ？

「どういたしましょう？」

どういたしまして、の聞き間違いかな？　なんか彼女が頭を抱えて悶絶しているけれど、あれはこの国流の「無事でよかったー」的なボデイランゲージということであー케이？

「まあ、僕もよかったよ、よかった。そうさ、終わりよければすべてよし、始まりなんて関係ないし」

ははは、と笑ってみるものの、不思議なことに彼女は相変わらず渋面。

さすがに様子がおかしいのでそつと近づいてみると、なにやらぶつぶつと呟いているらしい。ギリギリ独り言っぽい。だけどあえて耳をすませば。

「……色々、色々奪われてしまいました」

などと、彼女は困惑しておられるじゃありませんか。

「ええ？　でもあの子猫だって、僕らの命だって、それにこの町の平和だって、ちゃんと守ることができたじゃない。それなのに奪われたって、一体誰が何を？」

彼女の体を借りることはなってしまったけど、こうしてちゃんと返してあげたわけだし。僕のほうはといえば、充足感しか残っていない。

何のことだかさっぱりわからないという僕の顔を見て、彼女はフルフルと震える指先を僕の顔に突きつけながら、声を限りにこう叫ぶ。

「……私の貞操を、見も知らぬあなたに！」

「ええ？」

そう驚いた僕であったが、その直後、さらに驚くべきことが待っていた。

なんと、いきなり背後から僕の肩へと手が掛けられたかと思うと、

「おい貴様。俺の妹に何をした？」

などと野太い声が僕を糾弾するように近づいてきて。

「……はい？」

そして恐る恐る振り返った僕の目には、怒りに震える男の顔が映ったのだった。

3・前途洋洋

「いいか、お前の答えによつてはただじゃ済まさないぞ。貴様、俺の可愛い妹に一体何をしやがつた？」

その男の声に、僕は我に返つた。どうやら僕は、ずっと目の前の男性に厳しく詰問されていたらしい。何も答えずに沈黙を押し通していた僕に苛立ちを覚えているのか、彼の額には青筋が浮かび上がっている。鬼の形相つてやつだ。

年の頃は僕と同じくらいで、十八前後であると推定する。頭は短髪で、背は高く、筋骨隆々。軟弱な僕とは比べ物にならないほど屈強で、並大抵のことでは動揺しそうにない。

まるで、「俺は何々、ガキ大将！」とでも歌いだしそうだ。

それにしても……と、僕はこの湧き立つ感情を抑えられない。

「これが、これがこの世界の男かつ！」

僕は目をキラキラと輝かせて、怒り狂う彼に顔をググツと近づけた。

「お、おう！　なんだよ、てめえ！」

ところが彼、僕が顔を顔にくつつくくらい近づけただけで、何を勘違いしたのか尻餅についてひっくり返っちゃいましたよ。あはは、驚きすぎだろー。

おさまらない僕の好奇心。興味津々でさらに顔を近づける。座り込んでしまった彼に、前傾姿勢になつてまなざしをキラキラと浴びせかける。

なんたつて僕、こういう男に憧れるのですよ！

「ぐわー、近づくな変態！　妹は騙せても、俺は騙されねーぞ！」

何が彼をそうさせてしまうのか、両腕をブンブンと左右に振つて僕を警戒している。

僕に憧れられて、照れているってことかな？　見かけによらずシヤイだ。

「ちょっと、お兄ちゃん！ 私が騙されちゃったとか、人聞きの悪いことを言わないで！」

僕に気を取られていた彼は、背後から手を伸ばしてきた彼女にムググツと口を覆われてしまう。どっちもそれぞれに必死なので、見ている僕には面白い。

「お兄ちゃん？ 妹？ …… ああ、もしかして二人は兄妹？」

そんな間抜けな僕の感想に、組み合っていた彼と彼女は我に返ったらしい。コホンコホンとわざとらしく咳き込むと、少々乱れた衣服を整えながら立ち上がり整列した。

「そうだ。俺は鈴木浩一で、こっちは世界一可憐で純情で健気で稀有で高嶺の花でありながら親しみやすく、勤勉で思いやり豊かでナイスバディで……」

「……普通に妹の鈴木詠美です。お兄ちゃん、誇大広告は恥ずかしいからやめて」

「おいおい、これでも過小評価なんだぞ、エイミィ。たとえ世界が否定しようとして、俺の妹は俺の中で一番可愛い存在なんだから。俺の野望はな、それを世界に認めさせること」

「まずはお兄ちゃんがアブノーマルだということを自分で認めないと、世界は見向きもしてくれないと思うよ」

なんか妹にひどいことを言われている兄だなあ。彼とは初めて会ったけど、僕にも厳しい姉さんがいるからちよつと共感。ついでに同情。

それにしても、ハーレムよりはハートフルがいいよね、やつぱり。ここで僕、あえて言おう。女性は数じゃない……質だ！ そして絆だ！

そもそも女性のほうが男性より精神的に強いっていうのは、どの世界でも共通なのかな？ 体格だけならこの世界じゃ男性が女性に勝っているような気もするけど、いざというときに頼れなければそんな強さも意味がない。

まあ、今はそんなことどうでもいいか。男とか女とか、そんな二

元論で物事を判断するのは前時代的だし。そもそも異世界だし。

僕らの故郷では……性別の垣根など、とうに越えよったわ！

「ところで、お前はどこの誰だ？」

感慨にふけっていると、鈴木浩一さんとか名乗った男が僕にも名乗りを求めてくる。その隣の詠美さんも、同じように僕の名前を知りたがっているようだ。

ところでこの僕、これでも一応異世界人である。別に特別な守秘義務もないのが現実だったりするけれど、ひそかにエージエントっぽいものに憧れている僕は、この世界でこっそり活躍したいと夢中。

なので、ここは勝手にコードネームを作って本名代わりに名乗ることにしよう。

「サトウーだ」

「トウー？ トウじゃなくてトウー？」

「あれ？ サトウーはこの国で一番一般的な名前だと勉強したんだけど……」

「……きつとそれ、佐藤ですね」

わーお、発音が微妙に間違ってたぜ。

だけど、小っ恥ずかしいから撤回しない。むしろサトウーで押し通す。

「いや、サトウーで正しい。へへ、何しろ僕は異世界人だからね！」

あ、胸を張って秘密を暴露してしもうた。いくら守秘義務がないとはいえ、僕が異世界出身であることって、あけっぴろげにすることでもないんだよねー。

余計な火種になったらこの世界に悪いし。ただでさえ火種には尽きないみたいなのに。

「ハーフ？」

「ハーフ？」

最初に尋ねたのは浩一さんで、そのまま聞き返したのが僕。異世界人だと聞いたらハーフなのかと尋ね返すのって、この世界で有名

なジョークなのかな？

それともやつぱり、いきなり異世界は唐突過ぎて信じられないか。
「そんなことよりサトウーさん、私に説明を！ 先ほどの魔法とか、狼みたいなのとか、そして真っ先にキスの説明を！」

僕、詠美さんに首をグワシつとつかまれ、そのまま頭を前後左右に揺さぶられてしまう。

焦りはわかるが、落ち着いてくれ！

「き、き、キスだとうー？」

僕、さらに浩一さんからも両肩をギュワシつとつかまれ、そのまま体を激しく揺さぶられてしまう。うは、さすがに気持ち悪くなってきた。

「二人とも落ち着いて〜」

声が震えちゃったよ。

「よし、じゃあ早急に納得のいく説明を頼もうか」

そうは言うけど、異世界の事情を説明して納得してくれるのか？
僕の言葉をまるで信じちゃいないみたいだったし、はなはだしく心配だ。

とにかく、わかりやすくかいつまんで説明してみよう。

「実は僕、キスをする相手と憑依して、その体で魔法を使うことができるんだ。ね、詠美さん？ 詠美さんは実際に経験済みだから、わかってくれるよね？」

経験済みって言葉に二人ともぴくつと反応したのは気のせい？

「ま、まあ、確かに嘘じゃないですけど」

詠美さんは渋々ながらも僕に同意してくれた。

「……くそう。サトウーめ、俺が妹の言葉ならば信じて疑わないということを逆手に取り、エイミィを利用しやがったな？ なんてあくどい」

「いや、初対面だからそこまで詳しくないぞ、僕」

それ以前に、ちゃんと妹の言葉もよく考えてから受け取りなさい。信じることは力でも、盲目的に信じちゃ駄目なのさ。

「……まあ、サトウーさんが何か特別な状況下にある人だっていることはなんとなく察しました。ですが、ああ、私のファーストキスが……」

「よくわからないけど、ファーストとか元祖って、何かと人気があるよね」

やっぱり二回目以降とは思いつてものが違うんだろうか。

「お、お前、エイミイが十六年間も大切に守り抜いてきたファーストキスを、まさか一方的に奪い取っちゃったんじゃないだろうな！言っておくがな、今までエイミイは必死に貞操を守ってきたんだぞ！」

「お兄ちゃん、悲しくなってくるからそれ以上言わないで。私は単純に、そういう機会に恵まれてこなかったただだから。いっつも片思いで、告白する前に振られてばかりだったしさ……」

「なに？ それは初耳だぞ、エイミイ！ お前の恋心を踏みにじったくそ野郎はこのどいつなんだ？ 今すぐ殴りこみに行くぞ！」

「ちよつと待つてよ、お兄ちゃん。それはどっちも痛いわ！」

ヨイシヨつという掛け声とともに腕をまくって意気込む浩一さんをなだめるように、詠美さんは彼の進行方向に立ちふさがって体ごと押し返す。

さつきから取っ組み合ってばかりだな、この兄妹。本当に仲がいいのか？

まあ、見ているだけの僕にしてみれば面白いから許容する。蚊帳の外のほうが安全地帯だなんて不思議だなあ。

「……はあはあ。まあ、冷静に考えると、お前の恋人にふさわしい人間などこの辺りにはどうせ存在しないだろう。むしろお前が諦めるようになったことを、片思いの相手に感謝したいくらいだぜ」

「……ふうふう。その言い方は鼻につくものがあるけど、とりあえず落ち着いてくれたみたいでよかった」

二人とも肩で息をしているじゃないか。体力使いすぎだろう。

「へい兄妹、落ち着いた？ 僕だって無視されちゃうのは悲しいも

のがあるよ?」

「あ、すみません。お兄ちゃんの暴走ですっかり忘れていました」
よし、もし今後何か彼女に問い詰められそうになったら、お兄さんを暴走させることにしよう。なんか色々と忘れてくれそうだ。

「それよりもお前さ、俺の可愛い妹のファーストキスを奪った以上、しつかり責任は取ってもらうぞ。もし逃げ出そうとしたって、俺は絶対に許さない。地獄の果てだろうがお前を追いかけてやる」

いきなり浩一さんは僕の胸倉を掴みかかってきた。おいおい、そんなに熱くなってくれなくてもいいのに。いやだなあ、こっちが照れちゃうよ。

「そうですか、そうですね。僕だってこうして二人に出会えたのに、このまま別れてしまうのは惜しいですから」

責任を取るっていうのがよくわからないけど、なんか向こうから一緒にいてくれてお願いされているみたいだ。僕は二人に微笑み返した。

うーん、早速この世界でも仲間ができた気がする。いや、もはや親友かも。

ということで、続けて僕は二人に向かって信頼のまなざしをビビッと発信。

「お兄ちゃん、私はとんでもない人にファーストキスを奪われてしまったみたい」

「……ああ、間違っても好きにはなるなよ?」

とにもかくにも、僕は二人の協力者を得ることが出来たらしい。
前途洋々、幸先のよいスタートだね。

4・家族団欒

路地裏の子猫は、ちょうどその辺を通りかかったネコ好きの奥様に託した。僕ら三人で頭をペコペコ下げてお願いしたから、きっとあの子猫も新しいご主人様のもとですくすくと育っていくことだろう。せめて名前は付けてあげて欲しい。じゃないと、そのうち子猫が我輩とか言い出してひねくれるに決まっている。……本の情報だけど。

ところで、僕はどうかやら鈴木兄妹の家に御呼ばれしているらしい。「実はまだ住む所が決まっていらないんだよね」と打ち明けてみたら、浩一さんが「じゃあ、俺がお前を見張ってやる」とか言っていて、鈴木宅まで僕の手を強引に引っ張ってきてくれたのだ。

事前情報によれば、彼の態度こそツンデレというものらしい。

ちなみに、僕自身はキュンデレ。すぐにキュンとなってデレデレしちゃうから、自分でそう思ってみることにした。惚れやすいのか、あこがれやすいのか、僕って単純なんだよなあ。この世界にきたばかりなのに、すでにキュンキュンしまくってこの世界が大好きになつてるし。この世界は僕が守る！ 無理なら愛す！

「ところで、お前は俺と同じ部屋でいいよな？」

ほら、こういう彼の何気ない一言で僕は胸がキュンとする。

……一応ここで明言しておくけど、友情のことだからね？

「僕は泊めてもらえるのなら、どこだって大丈夫。それよりさ、家の人は僕のことよかったの？ いきなり来て泊めてくれなんて、いくら異世界人でも礼儀知らずっぽいけど」

「ああ、そのことなら安心しろ。一生のお願いを使ったら許可してくれた」

一生のお願いで。使うほうも使うほうだが、信じるほうも信じるほうだね。

僕だったら、一章のお願い、二章のお願いと、この先何度も使え

そんな気がしてきた。何の話か自分でもわからないけど。

浩一さんの部屋の中は、いかにも男の部屋といったような、実に殺風景極まりないものだった。机と本棚とベッドがあるくらいだ。それから床と壁と天井があるくらい。

ついでに机の上に兄妹のツーショット写真を見つけた。笑っているのが兄だけだった。妹の詠美さんかというと、むすっとした表情をしながらも、右手では兄のシャツの裾をちょこんとつまんでいて、なんかかわいらしかった。

あー、なるほど。喧嘩するほど仲がいいってこのことかあ。

ほんわかしていると、僕の肩をポンポンと優しく浩一さんが叩いてきた。何かと思って振り向くと、苦笑いしながらこう言ってくる。「そろそろ夕飯だが、お前も食うよな？ 家族団欒っつーことで、お前もこいよ」

いつから僕も家族になったのやら。

「よし、お腹いっぱい食べることにしよう！」

まあ、折角の誘いだから頂戴しよう。ごちになりますっ。

ところがこれ、一瞬葬式なのかと思った。

リビングに足を運ぶと、その場にそろっていた詠美さんとその父さん母さんが、会話もなく三人で食卓を囲んでいたのだ。みんな顔が重々しく、空気がどんよりとしている。

「あの、サトウーといいます。えっと、お世話になります」

「……ええ」

鈴木さん夫婦はたいした反応もなく、僕は一瞥もされなかった。

「まあ、座れてサトウー。そしてこの一家を団欒させてくれ」

「……そんなこと、今日顔を合わせたばかりの僕に頼まないでほしいよね」

冷めた家庭を部外者が団欒させるなんて、さすがに荷が重過ぎると思うんだ。

とりあえず、しっかりと手を合わせていただきますと言ってから、

僕は慣れた箸を使って夕食を食べ始める。多少はこの世界というか、この国の文化も勉強してきたから、そこまで食事に関して不自由はない。

ただ……。

「ことごとく、無言だな」

キョロキョロと左右に首を振ってみたものの、みんなうつむいて食事中なので、誰とも目が合わない。カチカチと、食器の音だけがむなしく部屋に響くので、余計に沈黙がいたいのかもしいないな。なんていうか、いたたまれない。

外では仲良く言い争っていた鈴木兄妹も、今やすっかり借りてきた猫のようにおとなしい。みんな黙々と食事を口に運んでいて、ちつとも楽しそうじゃない。

よし、ここは僕が率先して明るく話題提供しよう。

「まったく。離婚直前の夫婦ってわけじゃあるまいし、雰囲気が悪すぎるだろ」

「お、おま……」

「あーっと……」

ところが、僕の言葉に反応したのは浩一さんと詠美さんだけ。しかも気まずい顔をしてあたふたと両親の顔を交互にうかがっている。「……」

無言だったけど、カチャンと誰かが箸を落とした。その瞬間、ピンと空気が張り詰めた。みんなの背筋が凍ってしまったんじゃないかと。

なんか僕、よくわからないままにとどめを刺してしまったらしい。うん、早々に逃げ出すことにした。

一人先に浩一さんの部屋でのんびりしていた僕。今頃リビングはどうなっているのだろう？ リビングだけに、リビングデッド？ あんまりうまくないな。

「おいサトウー！ 馬鹿でも明るいお前には団欒をもたらしてくれ

ることを期待したのに、余計にひびを入れてくれくれやがって！」
浩一さんが、初めて会ったときと同じような顔をしながら部屋に入ってきた。

その元気をどうして食卓で出さない。

「いや、ああいう雰囲気って耐えられないんだよね、僕。なんか息が詰まりそうでさ、食事ものを通らないって」

家族の団欒とはまるで正反対だったよ。部外者である僕、気まずいっただらない。食事はおいしかったけどね。

「……だよな、悪い。さすがに俺もどうかしていたぜ。エイミイの心を奪い取ろうとしたお前なら、もつとこう、俺たちのことを軽いテンションで盛り上げてくれるんじゃないかとか、そう考えちゃったんだ」

はあ、と、大きなため息を漏らす浩一さん。その姿からはすでに哀愁に近いものが漂っているみたいだ。なんかさっきの食卓の空気が再現されたような……。

「まあ、浩一さんが何をやりたかったのかは理解したよ。さすがに僕も軽いテンションで盛り上げるなんて無理だけど、他の方法ならいくらでもありそうなものだね」

「本当か、それ？ ……つかさ、エイミイの心を奪い取ろうとしたっていうことは否定するつもりがないのか、サトウー」

鋭い視線をキリツと僕に向けてくる浩一さん。敵意満載だな。

「うーん。どちらかというと、僕は詠美さんの心よりは体のほうを必要としているわけで」

借りるのは心じゃなくて体だからね、僕の能力は。

——ガタッ！

背後からの物音に驚いて振り返ると、入り口の扉を開けたままの姿で固まっている詠美さんの姿があった。

「サ、サトウーさん。わ、私の体が目的だったんですか……」

あせあせと飛び散る汗、わなわたと震える唇。もじもじとこすり合わせる手、おどおどと左右に泳ぐ瞳。うつすらと桃色に染まって

いく類には、恐怖や苛立ちとは程遠い、恥じらいの情が見て取れた。もしかして詠美さんは僕に謙遜しているのかと、要するに彼女は謙虚だなあ、とか思った僕。とりあえず詠美さんを勇気付けてあげようと、最高の笑顔でこう言ってあげる。

「うん、最高だったよ！ 特にしなりが！」

僕の体は硬くて、前屈とか全然曲がらない。それに比べると、彼女の体は柔らかくて動きやすかった。さすがに筋力はなかったけれど、そこがいい。

「うひゃあ、猛烈に恥ずかしいことです……」

おや？ 詠美さんが自分の体をギュツと抱きしめ、そのままペタンと床に座り込んでしまったぞ。

顔も茹で上がったみたいに真っ赤だし。

「おいサトウー、どうしてお前はエイミイの体のしなりを知っている？」

言いますごんだ浩一さんから胸倉を掴みあげられる勢いで、僕は首まで締め上げられる。もはや殺気を身にまとっているじゃないか！ せめてもう少し力を抜いてくれないと、質問に答えようにも声が出ないから！ ぐぬぬ、死んでしまうぞ、僕！

そもそも自分で言っておきながら、しなりってなんだろうね？

「……ま、まひゅ、まひよ、まひよう、魔法で！」

首を絞められながらも、ひゅうひゅうと漏れ出す吐息のように、かろつじて答えることができた僕。これ以上は息が続かない。

「まふおーう？」

僕の答えを聞いた浩一さんが、いかにも信用していないような声色で聞き返してくる。魔法って言葉を初めて聞いた詠美さんよりも疑い深そうに僕を睨んでくるから、絶対に魔法を信じちゃいなさそうだ。

うむ、折角浩一さんの手を首から離すことに成功したから、ここはきちんと説明して納得してもらわねば。

「……げぶん、げぶん」

しゃべろうと思ったたら咳き込んだ。強く首を絞めすぎたんだよ、この人ったら！

恨みがましく浩一さんを睨み返しながら、僕は仕切りなおし。

「……まあ、魔法というか、僕はキスをするとその相手の体に憑依して、敵と戦うことができるようになるんだよ」

「キスして憑依？ 敵と戦う？ ……どこまで本気のつもりだ、それ」

「どこまで本気って……、いや、詠美さんだって嘘じゃないって言ってくれたでしょ？ 一応信じてくれたんじゃないの？」

妹の言うことは是が非でも受け入れてしまうつて言っていた気がするのに。

「あの時は俺もああ言っちゃったが、さすがに魔法なんて馬鹿げた話を根拠もなく受け入れるのは……ほら、今までの人生すべてを否定するようなもんじゃん？」

確かに、魔法なんてものをほいほい認めてしまったら、じゃあ今までの世界はなんだったんだーって言いたくなる気持ちもわからない。たとえばマラソンで負けてたまるかと一生懸命になつて走り続けていたのに、ゴール直前になつて自転車の人間に追い越されてしまうような、そんな寂寥感があるのかも。

魔法なんて、ないならないほうがいいもんね。それは異世界も同じ。無駄に可能性ばかりが広がっても、今ある生活の中でしっかりと足がついていなければ、結局何も選べないに決まっている。もし地に足がついている生活をしているなら、それこそ他の可能性は必要ない。

まあ、そんなのは魔法も異世界も知っている僕の身勝手な意見かもしれないけど。

「うーん、詠美さん。もう一度僕の代わりに説明してくれない？ きっとこの人、僕の言葉なんて絶対に信じてくれないと思うんだ。なんか目の敵にされている気がするし」

「……あ、あう？」

いつの間にか顔を両手で覆っていた詠美さんは、その指の間から目だけを覗かせてこちらの様子をうかがっている。すっかり警戒されているようにしか思えない。

「いや、ごめん、無理にとは言わない。……無理にとは言えないから」

これ以上詠美さんに迷惑をかけるわけにはいかないもんな。ここはやっぱり自分できちんと説明しよう。

そう思っていたら、突然詠美さんが立ち上がった。

「い、いえ、是非に確認いたしましょう！　どうか今すぐここでもう一度私とキスを！　そしてこの胸にもやもやしている私の感情……もとい、あなたの魔法を確かめましょう！」

「この胸のもやもやって……エ、エイミィ！　お前まさか、こ、こいつのこと……」

「さ、さあ、サトウーさん！　私は目を閉じて待ちます！」

「エイミィ、早まるなエイミィイー！」

手を胸の前で組み合わせ、祈るように両目を閉じた詠美さん。思いとどまらせようとしているのか、浩一さんはその肩を力強く握り締め、ガクガクと揺さぶっている。

ほんっと仲がいいな、この兄妹。あははー。

「おい、何がおかしい？」

笑っていたら浩一さんにまた睨まれた。うん、笑うのやめとこう。「そういえば言っただけで、僕の魔法って連続で同じ人を相手に使うことができないんだよ。つまり、今の状態で詠美さんにキスをして、それは普通のキスにしかないけど、それでいいの？」

同じ相手に連続して使えないからこそ、少なくとも魔法を使うためのパートナーは二人必要なのだ。パートナーが二人いれば、交互に魔法を使うことが可能になるからね。

「え、そうなんですか？　う、あ、なんか複雑です」

「それってサトウー、魔法を使うためにお前はキスの相手を何人も

……その、ハーレムでも作り上げるつもりなのか？」

「ハーレム？ はは、そんなものじゃないよ。キスの相手っていうと聞こえが悪いけれど、僕が必要としているのは一緒に戦ってくれる仲間だからね」

そこを勘違いされてしまうと、僕は異世界から来た変態になってしまうじゃないか。あくまで僕は契約として、ドライな関係としてキスの相手を……って、それじゃ余計に人聞きが悪いな。うむ、困ったぞ。

「一緒に戦ってくれる仲間ねえ……。それ、俺とかじゃ駄目なのか？」

「いや、この魔法は女性相手にしか使えないから。そもそも浩一さん、魔法を使うためにはキスが必要ってこの意味、わかる？ 僕とキスしなくちゃならないんだよ？」

「うげ……」

言ってから理解したのか、苦々しく顔をしかめる浩一さん。もちろん、それが正しい反応なんだけど、なんか釈然としない。

別に浩一さんとキスしたいってわけじゃないけど、そんなにいやそうな顔をしなくてもいいのにさ。なんだよー、親友じゃないのかよー。

ムーっと、少しだけ浩一さんに不服な顔を向けておいた。

「わ、私はもう駄目なんですか？」

ちよっとだけ身を乗り出してきた詠美さんは、何故か期待するような目で僕を見つめている。まるで自分の体を僕にお勧めするかのよう。いやあ、そういう風に期待されちゃうと、僕もいい返事をしてあげたくなる。

「駄目ってわけじゃないよ。むしろ大歓迎。ただね、最低もう一人協力者がいないと、このままじゃ詠美さんに魔法が使えないよね」「あー、私が二人いればあ」

言いながら、詠美さんは自分の体をぺたぺたと触っている。もしかして、分裂でもするつもりなのか？ ……よし、成功したら僕に

教えてくれ。

「エイミイはこの世に一人だし、かけがえのない大切な妹だ。だからそんな馬鹿げたことを言うんじゃないよ、エイミイ」

兄である浩一さんが詠美さんの頭を優しくなでる。なんとも微笑ましい光景だ。邪魔しないためにも、ここは黙って二人の触れ合いを見守っていよう。

ほわほわ。

「んだよ、サトウー。一人で勝手にニヤニヤしてないで、言いたいことがあるならはっきり言いやがれ。気持ち悪いぞ」

「き、気持ち悪いって……」

そんなに気持ち悪いのか、僕の笑顔って。

気落ちしていると、詠美さんが思い出したかのように僕に語りかけてきた。

「ん？　そういえばサトウーさん、あのときの魔法を解かずに、ずっと私の体に憑依したままならよかったんじゃないですか？　それなら他の協力者を探す必要もないのに」

ところがこの発言に、僕より先に浩一さんが反応した。

「エ、エイミイ！　お前は自分が言っていることを理解しているのか！　ずっと憑依されるってことは、お、お前の体をサトウーに捧げるってことだぞ！」

「だけど、サトウーさんが他の女性にキスされてしまうくらいなら

……って、あ、あれ？」

なにやらまた悩み始めてしまった詠美さん。それを見守る浩一さんも同じように頭を抱えてしまうので、二人そろって悩める兄妹である。

「えっと、二人で頭を抱えているところを悪いんだけど、僕の憑依能力っておよそ三分間しか持続しないんだよね。ほら、詠美さんへの憑依だって三分後には勝手に解けちゃったじゃない？　だからね、魔法は三分しか使えないの」

「え、そうだったんですか」

「つーことはお前、たかが三分間の魔法のために、キスをしてくれる女性を何人も集めようとしているつもりか。……くはー、同じ男でありながら、なんて罪作りな奴！」

「ええ？　それが本当なら、ますます複雑です、私」

そう言つて、またまた悩み始めた二人。いや、もう悩むのが普通に思えてくるぞ。

とはいえ、僕には二人が何を悩んでいるのか全然わからないのでとりあえず励ますことしかできない。

「大丈夫？　僕が力になろうか？」

「誰のせいでエイミイと俺が悩んでいると思つているんだか！」

声を掛けるや否や、浩一さんが僕に向かって叫んでくる。思わず身がすくんでしまった。

驚いた僕の反応がそれ以上ないことで冷静さを取り戻したのか、浩一さんは詠美さんに向き直つて優しく声を掛ける。

「つーか、エイミイ。もうお前はこいつに関わるな」

だけど、素直に首を縦に振らない詠美さんは、顔をそむけながら言い返す。

「でもお兄ちゃん、そこそこ格好いい男の人にファーストキスを奪われちゃったら、意識しないなんて無理だよ」

そう言つて、くねくねと身をよじらせる詠美さんはかわいらしい。それにしても僕、詠美さんに意識されているのかもしれない。意識されるってことがどういうことなのかよくわからないけど、敵意じゃないよな？

なんだか、二人から熱い視線は感じるんだけど。

「仕方ない、エイミイ。こいつに早く新しい協力者でも紹介して、早くその未練っぽい感情を断ち切るんだ。もやもやする期間が長引けば長引くほど、その正体に気がついたときの苦しみが大きくなつてしまうものだ。だからエイミイ、もやもやのうちにこいつのことを忘れてしまえつて」

「お兄ちゃん……」

兄妹、互に見つめあう。なんか入っていきづらい雰囲気だ。
しばらく様子を見ていても動きがないので、仕方なく僕のほうか
ら尋ねる。

「二人とも、本当に大丈夫？ それから、その、僕の協力者のこと
って、詠美さんがどうにかしてくれるってことでいいの？」

心配だったものの、詠美さんは力強くうなずいてくれる。

「わかりました。ちょうど彼氏募集中の友人がいるので、明日誘っ
てみます」

「うん、ありがとう。……彼氏？」

彼氏と協力者は若干意味合いが違う気もしたけど、まあいいか。

詠美さんの好意をしっかりと受け止めて、明日を楽しみに待つこ
とにしよう。

5・紹介

翌日、僕は詠美さんに手を引かれて町へと繰り出した。

何故か上機嫌な詠美さんはフリフリのワンピースで着飾っていて、学校の制服だった昨日と比べると段違いにかわいらしい。

僕もおしゃれしようかと思ったけれど、あいにく僕が身にまとっているのは異世界で御用達、洗濯不要の高性能ファッションである。残念ながら他に衣服を持ち合わせていなかったため、しばらくはこの服装で過ごすしかなさそうだ。

かさばらなくていいから便利なんだけどね。ちと、味気ないというか。

「あ、二人とも待った？」

詠美さんが明るいい声で言った先には、二人の女性が待っていた。

背が高く髪も長い女性と、背が低く髪も短い女性の二人である。

「んー、別に。詠美ならいつものことだし、待つのも慣れた」

「たはは……」

言動がクールらしい背の高い女性に冷たく返されて、詠美さんは恥ずかしそうに笑ってごまかした。

すると今度は二人のうちで背の低いほうの女性が、僕の顔をちらちらと確認しながら詠美さんにこんなことを尋ねる。

「あの、詠美先輩。その、そちらの男性は？」

「ああ、この人が電話で言っていた男の人だよ。ほらほら、二人ともいい男いないかな？っていつも嘆いてたからさ、紹介」

「もしかして、先輩の親戚の方ですか？」

「まっさかぁー。いくら親友相手だからって、自分の親戚を彼氏にどうぞって紹介はさすがにできないよ」

笑う詠美さんに、同じように笑って背の高いほうの女性が口を挟む。

「まあ、それもそうよね。その人は詠美のお兄さんと違って、結構

なイケメンだし。親戚っていうのもなんか違和感があるもの」

「うーん、それはそれで否定したい」

「そんなことないって。詠美はお兄さんに似なくてよかったじゃん」
「まあね」

そう言う詠美さんではあったけど、その顔は嬉しいというか悲しいというか、微妙な表情だった。

「……それじゃ、詠美先輩の友達なんですか？」

「えーっと、まあ、そういうところ」

曖昧にうなずいて、詠美さんは苦笑い。

なんだか歯切れが悪いので、僕も会話に参加しておこうかな。

「詠美さん、よかったら僕から自己紹介でもさせてくれない？」

「え？ ……うーん、なんか不安ですけど、わかりました。お願いします」

「あはは、よかった。よし、みんな、よく聞いてくれ」

一歩大きく前に出て、みんなの視線を一身に集める。そして一人ひとりに目配せしてから、はきはきとこう言った。

「僕はサトウーだ！」

胸をそり、両手を腰に当て、大腿を開いたまま、極め付けに、二カつと笑う僕。

さぞインパクト。他には何もいらない。

「……さすが詠美の知り合い」

「ちよつとそれどういう意味なのよ！」

「……先輩には一生追いつける気がしません」

「半笑いで言わないでくれるかな！」

二人に向かって詠美さんが肩を上下させながら声を張り上げている。三人が楽しそうなのはいいことだけど、一応今は、僕の自己紹介タイムじゃなかったのか？

別にいいけどさ。なんか一人だけ疎外感が半端なくて寂しい。

「それより詠美さん、僕にも二人を紹介してくれない？ もっとフランクに会話に参加していきたいし」

「それもそうですね。じゃあ、二人とも自分でよろしく！」

僕の言葉にうなずいた詠美さんは二人に振り返って彼女達の肩をポンポンと軽く叩いた。それが合図にでもなったのか、二人はそれぞれ一歩ずつ前に出て、僕に恭しくお辞儀してくる。おお、なかなか礼儀正しい。

「私は加藤由紀。詠美と学校で同じクラスね。んで、こっちが……」
「加藤真美です。えっと、お姉ちゃんの妹です」

お姉ちゃんの妹？ 言葉だけ聞くとすごく当たり前な気がした。

「へえ、二人は姉妹なんだ。そういわれると、顔も似てるよね」
一見すると背丈が違ってから、言われるまで僕は気がつかなかった。でも、大きいほうが姉の由紀さんで、小さいほうが妹の真美さんだから、覚えやすいのかもしれない。パツと見て姉と妹の判別ができるからね。

「えへへ、よく言われます。ね、お姉ちゃん？」

「んー、まあ」

照れくさそうに喜んだのは真美さんばかりで、由紀さんは曖昧な返事だった。それが真美さんは気に食わないのか、隣に立ち尽くす姉の袖をクイクイと引っ張り、しつこく食い下がっては「ねえ、ねえ」を繰り返した。それが由紀さんは気に食わないのか、苦笑いのような愛想笑いを表面上は浮かべながら、自分の袖を引っ張る妹の手を逆に握り返して、適当にあしらうように「んん、まあ」を繰り返した。

で、またまた僕は置き去りである。存在感が薄い気がしてならないぞ。

「ねえ、二人ともさ。とりあえず、落ち着いて会話ができるところに移動しよっか」

詠美さんがそう提案すると、じゃれあっていた加藤姉妹も異論なく賛同する。

「そうね。それじゃ詠美、行き先は詠美にお任せで」

「ふふ、お任せあれ」

由紀さんの期待を受けて、何故か不敵に笑う詠美さん。

何かと自信ありげなようすなので、僕も期待を上乘せすることにした。ベット！

そして意気揚々と先頭を歩く詠美さんに連れられて僕らがやって来たのは、人気の少ない寂れた公園だった。どうやら住宅街の目立たぬ片隅にあるようで、驚きの過疎ぶり。

犬も子供も見当たらない。

「って、公園？」

みんなで公園に入ると、由紀さんが苦笑いしながら詠美さんに向き直る。

「ごめんね、サトウーさんの話はわけあって他の人に聞かれちゃ駄目なものだから、喫茶店とか人の多い場所は行けなくて」

「ふーん」

口では興味なさそうな返事をしながら、僕のことを訝しそうに見詰めてくる由紀さん。人には聞かれてはならない理由があるって部分が、きつと胡散臭いのだろう。どうも自己紹介以来、僕は加藤姉妹から微妙に距離を置かれつつも好奇の対象として、ちらちらと様子をつかがうように観察されているようなのだ。

サトウーっていうのも偽名だっけすぐにばれたし。なかなか手ごわい。

「その話、私たちに聞かせてくれるんですか？」

真美さんは首をかしげながら、僕と詠美さんの顔を見比べてくる。

「ですよ、サトウーさん」

そう言っって、信頼のまなざしとともに僕の肩に手を乗せる詠美さん。

「ええ、まあ」

とはいえ、やっぱり僕の素性とかは秘密にしておきたいというか、簡単に口外してよいものではないような気がするんだよね。いきなり「僕は異世界人だ！そこんところろしくね！」と言っっても、

そもそも相手にされないんじゃないだろうか。

だからといって、相手の了承もなく、いきなりキスをして魔法の証明をしようとするのも悪徳商法っぽくていやだ。やはり、ぜひともここはお互いに納得した上で僕の魔法の協力者になっていただきたい。まあ、詠美さんの場合には緊急事態だったので、一方的に巻き込んでしまった形になってしまったのだけだ。

それに、加藤姉妹が僕の協力者として力となってくれるのか、ちよつと見極めてみたい。二人は可憐な少女の体ゆえ、戦闘に不向きだったらかわいそうだ。いくらキスをすれば僕が憑依するとはいえ、そこは他人である乙女の体。簡単に傷つけられるものではない。

そこで僕は、こつそりと詠美さんに耳打ち。

「僕の秘密を彼女達に教える前に、あの二人が過酷な戦いに耐えられるのかどうか、ちよつと確かめておきたいんだけど、大丈夫？」

「え？ ああ、いいですよ」

耳に息が吹きかかるたびにくすぐったそうに身をよじりながらも、詠美さんは了承してくれた。どんな方法で彼女達のことを確かめるのか、その手段には彼女も僕に対して若干の疑念を持っているような気がしてならないけど、ここは手っ取り早く実行に移らせてもらおう。

「さあ、加藤姉妹のお二人さん。それからもしよかったら詠美さんも一緒に、みなでお互いの身体測定的なことをしようか！」

「……は？」

「はい？」

僕は裏表のない笑顔で誘っただけなのに、何故かすごく軽蔑のまなざしでにらまれてしまった。敵意、警戒、愕然と、三者三様に不思議な反応をされてしまう。

おそらく、僕の真意が伝わっていないからだろう。初対面で意思の疎通を完璧にするのは難しいからね。

「詳しく説明したほうがわかりやすいかな？ えっとね、僕らでお互いの体のことをもっと深く知っていきこうって、つまりそういうこ

と」

先ほどよりもさらに明るい笑顔を心がけたし、もう誤解されることもないだろう。

「ねえ、詠美。どうしてドがつくほどの変態を私たちに紹介しようとするの？」

「お姉ちゃん、帰ろうか。なんかこの二人、おかしいと思うんだ。

……詠美先輩のことも、前々からそうじゃないかってずっと疑っていたんだけど、やっと証明されたね」

「よ、よりにもよって私とサトウーさんを同一視しないでくれるかな！」

むむ？ よくわからないけど、詠美さんと加藤姉妹がハイテンションで言い争いを始めてしまった。おいおい、みんな仲良すぎるだろうー。

「つていうか、サトウーさん！ あなたが紛らわしい発言をするから！」

ぐわっ！ 飛び火だ！ 批判の矛先が僕に！

「そうですよ！ どうして初対面である私やお姉ちゃんの、か、体のことを？」

「聞くまでもないわ。変態だからに決まっているじゃない」

そう言った由紀さんが、妹のことを庇うように自分の背後に隠しながら、僕に向かって鋭い視線を投げかけてくる。彼女の肩越しに僕のことを覗きこんでいる真美さんは、どこことなく不安げだ。

それにしても、変態だと決め付けられたことは心外である。

……あえて否定しないけどね。

「ということで、早速身体測定だね」

「この状況でよくそれを言えますね！ サトウーさんは鈍感なのか、変態にして鉄の心なのか！」

んー、感心されたのかな？ みんなの反応が相変わらずよくわからないぞ。

まあ、それよりも話を先に進めてしまおう。

「じゃあ、まずはみんなの体のしなり具合から確認していこうか」
「つーか本当に変態だなっ！」

驚くことに詠美さんから敬語が飛び去った。それはそれで嬉しいけど。

しかし、僕が変態かどうかはさておき、彼女達の身体能力については事前に把握しておきたいところだ。そのところを詠美さんにはご理解いただきたいのだが、どうすべきか。

僕が首をひねって考え込んでいると、三人が僕と離れたところに集まって会話を始めた。こっちには聞こえないように、ひそひそ話である。

「どうしたの？ 僕だって聞きたいよ？」

もちろん、彼女達は僕に聞こえないように気を遣っているのだろうけど、そうされると気になって仕方がないわけで。耳をそばだててしまうわけで。

ところが、僕が近づいていくと、詠美さんがその足を止めるかのように目の前に立ちはだかる。危うく抱きつきそうになった。

「サトウーさん、あなたの使命もなんとなく考慮します。ですが、二人の身体能力を見極めるにも、せめて他の方法でお願いします」
そう言って僕に懇願してくる詠美さん。

他の方法、か。手っ取り早く……と思っていたけど、さすがに泣きそうな顔でお願いされちゃうと僕も弱い。代案を考えよう。

ここが公園で、僕らが四人で、他には誰も見当たらないようだから……。

「じゃあ、これから僕ら四人で、プロレスのタッグマッチをしようか」

「サトウーさん！ その発言、信じられないですよ！」

「え？ あ、この国の文化らしく相撲する？ 大丈夫、八百長はしないよ」

「そんなこと心配しているわけじゃないんですけど！」

苛立たしそうに地団駄を踏む詠美さんではあるが、こう言っちゃ

悪いけど、悔しがる様子が子供っぽくて可愛い。

由紀さんが呆れたように口を開いた。

「何かするにしても、その選択はないね」

ふむ、どうやら僕のリサーチ不足だったらしい。あまり若者の間で格闘技ごっこみたいなのはブームじゃないのかも。

いい案だと思ったんだけどなあ。仕方ない、他の提案を。

「そうだ。じゃあ、みんなでかくれんぼしようよ！」

この際だから、まずは打ち解けることからはじめよう。

「かくれんぼ？」

うは、詠美さんにもものすごく馬鹿にされてしまったぞ。

「隠りたいのならどうぞ、ご勝手に」

由紀さん、ひどいな。隠れたのに見つけてくれなかったらいじけちゃうぞ、僕。

僕の提案をないがしろにされて、すっかり意気消沈。

「かくれんぼ、いいじゃないですか！」 ほらほら、お姉ちゃんに詠美先輩、かくれんぼなんてもう何年もやってないから、すごく懐かしくて逆にわくわくしてきませんか？」

ところが乗り気じゃない二人を差し置いて、真美さんは目を輝かせながら準備運動まで始めている。かくれんぼって準備運動の必要あるのか？ と思いながらも、そんなにやる気を出されると嬉しくて仕方がない。

だから僕はキyunと胸がときめいて、思わず真美さんに駆け寄っていた。

「ありがとう、真美さん！ もはや僕は君の身体能力のことなんてどうでもよくて、今すぐにもキスしてしまいたいくらいだよ！」

「キ、キス？」

「そう、キス！ だって気が合いそうな真美さんとなら、僕ともすんなり一つになれそうな気がするもの！」

「ひ、一つになるですか！」

僕の言葉に顔を真っ赤にした真美さんは、止まっていることが恥

ずかしいのか、その場でクルクルと回りだした。

とりあえず彼女が落ち着きを取り戻すまでそばでじっと眺めていようと思っていたら、いきなり僕の背後から低く轟くこんな声が。

「ちよいと、サトゥー。うちの妹に手を出したらあんたは地獄を見るよ?」

振り返れば、まさしく鬼の形相をした由紀さんがいた。

しかし、妹を持つ人間はどこも溺愛しすぎだろう。それとも、浩一さんと由紀さんだけが特別なのか? だとするなら、巡り会わせが奇跡的だけどね。

「地獄だなんて大げさだなあ。けれど、それじゃ真美さんの代わりに由紀さんとならキスも大丈夫だったりする? 僕と、オツケー?」なんて、とりあえずドサクサにまぎれて聞いてみる。

「キ、キスカ……。そりゃ、私だって少なからず興味はあるけど、だからといって誰とでもいってわけじゃなく……」

由紀さんは小さな声でそう言うと、自分の唇にちよこんと人差し指を当てながら、なにやら遠い目をして考え込んでしまう。

とりあえず彼女の答えが出てくるまでそばでじっと観察していようと思っていたら、脇から控えめに服の裾を引っ張られたので、そちらへ顔を向ける。

「サトゥーさん。で、実際のところ、かくれんぼには一体どんな思惑が?」

いつの間にか僕のそばまでやってきていた詠美さんが、期待するような視線を僕に向けていた。なので、僕は胸を張ってこう答えた。「うん、楽しそうだなって!」

「もう、ちくしょ。サトゥーさんってば、本当におめでたいですね!」

詠美さんも吹っ切れたのか、僕は肘で小突かれちった。あとはそれぞれに悩んでいる加藤姉妹が正気に戻るのを待つだけだね!

6・かくれんぼ

僕がかくれんぼを提案して数分後。ようやく始める合図を告げる
ことができた。

「じゃあ、一分数えるよ！ みんなバリバリ隠れちゃってね！」
「サトウーさんこそズルしないでくださいね！」

というわけで、最初に鬼の役を引き受けることとなった僕。じゃ
んけんもされないまま、その場の総意だけで鬼の役を押し付けられ
た気もするんだけど、実は僕も鬼をやりたかったから嬉しい。だっ
て、物陰に隠れてじっとしているだけなんて、僕は耐えられないも
の！

くふふ、今から僕がみんなのことを探しつつ追い詰めていくのだ
と想像したら、わくわくしてきたぞ。キャーキャーとか言われなが
ら、えいつと見つけてやりたい。

「……っと、そろそろ一分かな。さーて、もういいかい！」
「……」

僕の呼びかけに、三人からの返事はない。事前にみんなと申し合
わせて、準備がよかったら返事はしないようにしていたから、もう
探し始めても大丈夫だということだろう。隠れるほうは三人だけだ
から、「もういいよ」とか大声で返事してしまうと、それだけで
隠れ場所の見当が付いてしまうのだ。この公園、そんなに広くない
し。

さて、振り返って探し始めるのはいいが、一体どこから確かめて
いくべきだろう？ 適当に公園を右回りに探していこうかな。

——パキッ。

と、一步を踏み出そうとした僕の耳に、小枝が折れるような音が
しかも、今まで目を閉じて寄りかかっていた木の上のほうから聞こ
えてきたぞ。

「んー、まさかとは思うけど、念のため確認を」

恐る恐る、僕は木を間近からゆっくりと見上げる。さつき時間を数えていたときは誰かが木を昇っていく音も気配もなかった気がするけど、果たしてどうだろう。

「……うわ、いた。しかも薄い水色でフリフリの下着もばっちり見えてる」

僕の頭上、複雑に入り組んだ枝の上で、スカートなのも意に介さず隠れたつもりになっているのは、おそらく一番小柄な真美さんだろう。顔だけはばっちり腕と枝と葉っぱで上手く隠れているけれど、女性として一番隠すべき部分が丸見えなのは……うん、彼女のためにも触れないでおこう。

「やったね、真美さん見つけ！」

「ええ？ 灯台下暗しのはずが、私を一番に見つけちゃったんですか？」

「へへーん。僕を侮ってもらっちゃ困るよ」

そうは言うものの、見つけられたのは音が聞こえてきたからだ。もしあの音がなければ、僕はきっと見つけることができなかったに違いない。

自分に舞い降りた幸運に感謝していると、木を降りるのに苦戦しているらしい真美さんが申し訳なさそうに声を掛けてきた。

「サトウーさん、よかったら私を受け止めてください」

なるほど、次に舞い降りてくる幸運は真美さんそのものか……なんてね。

「うん、いいよ。さあ、僕の胸にドーンと」

両手を左右に大きく広げて受け止める構えを。

「はいっ！」

そう言っただけで枝の上から僕の胸に向かって飛び降りてきた真美さんを優しくキャッチ。

——ガタッ！

そして僕が真美さんを、いわゆるお姫様抱っこしてしまつと、なんか公園のどこかから凄まじく動揺した反応が。まさかとは思うが、

姉である由紀さんが真美さんを抱いた僕に襲いかかろうとしたんじゃないかと、一瞬背筋に悪寒が走った。

それにしても、真美さんの体はとても軽くて驚かされる。それに木の上まで上っていたのだから、きっと身のこなしも上手いのだろう。

「はい、大丈夫?」

怪我をしないように気をつけて真美さんを地面に下ろす。

「ありがとうございます。えへへ、意外とサトウーさんって優しいんですね」

「あはは、『優しい』は余計だよ」

「……それを言うなら、『意外と』って部分を否定してください」

「まあまあ。それより、詠美さんが由紀さんの隠れていそうな場所ってどこだと思う?」

「言うわけないじゃないですかあ」

やっぱり仲間を売るようなことはしないのか。

「よし、じゃあ砂場を三メートルほど掘り返そう!」

「言わないと言いましたけど、さすがにそこにはいないと思いますよ」

「そっか、じゃあ水飲み場に隠れて、二人が姿を現すのを待ち構えよう!」

「言わないと言いましたけど、さすがにかくれんぼ中に水飲みはないかと」

「まさか、じゃあ二人とも女子トイレに立てこもっていたり?」

「だから言わないと何度も言っていますけど、さすがにそこまで卑怯じゃないですよ」

うつむ、僕の目の付け所は真美さんに不評だ。そこまで悪い気がないんだけどなあ。

仕方ない。しらみつぶしに歩いて探すことにしよう。

というわけで、以下、僕と真美さん二人で一緒に探す様子。

「やっほー!」

「はいはい、ジャングルジムの頂上ごときで叫ばないくださいね」
「きゃあ、きゃあ！」

「はい、はい、滑り台くらいでいい年の男の人が盛り上がりがない
くださいね」

「え、なにこれ！ あは、はは、無理だよ、無理！ こっから全然
進めないって！」

「はい、はいはい。うんていくらい簡単にやってほしかったです
けどね」

「む？ むむ？ むむむむむ？」

「あー、はいはい。看板のイラストとにらめっこしてないで早く次
に行きましょう」

などなど、自由気ままに探し回る僕と真美さん。

ところがそんな折、横から飛び出てきた人影に思いっきり突っ込
まれた。

「つーか、サトウーさん！ 遊んでないで私を探してくださいな！」

「……うん、まあ、でも見つけちゃったよね、今」

どうやら、それは痺れを切らした詠美さんだった。図らずも、天
の岩戸作戦成功である。

「まさかかくれんぼの最中に鬼に向かって突っ込みをいれるとは、
詠美先輩、脱帽です」

「……私だってね、私だって何度も我慢したんだよ？」

悔しそうに目をウルウルとさせながら睨まれたけど、気にしない
ことにしよう。申し訳ないが、勝負の世界は非情なものだから。

無視されたまま隠れ続けるのも退屈なのだろうけど。

「まあ、とにかくにも残るは由紀さんだけだね」

そう、あと一人で僕の勝利なのだ。そして勝ちさえすれば、文句
も言われまい。

詠美さんと違って由紀さんはクールな女性だから、なんか冷静沈
着に身を潜めていそうで、かくれんぼ初心者の僕には勝てる気がし
ない。だけど僕は今調子がいいみたいなので、なんかやれそうない

がするのだ。ずばり、理由なき勝利の確信。

「ちょ、やめてください！」

「ん？」

突然聞こえてきた声に、僕らはピタリと足が止まった。

周囲を見渡しても誰の姿も見当たらないが、幻聴というわけじゃないと思う。

「今の、お姉ちゃんの声ですよね？」

「あはは、もしかして由紀さんだったら変なところに隠れているせいで、近くを通りがかった人に不審者とでも間違われているんじゃない？」

「……サトウーさんじゃあるまいし」

今日知り合ったばかりなのに、さっそく僕は真美さんから下に見られているらしい。こんな可愛い小柄な女の子に見下されるのって…… たまんないね！

なんて馬鹿なことを考えていると、またまた公園内に響く声。

「な、なんなんですか！」

「また……。ねえサトウーさん、これはもしかしてただ事じゃないのかも」

再び聞こえてきた由紀さんの叫び声に、詠美さんは不安そうな顔をして心配している。

確かに、あの声から判断すると、由紀さんの身に何かしらのピンチが迫っているとみて間違いないだろう。

「……ふふ、でもこれは僕にとってチャンスだね。よし、このまま見つけてやるぜ！」

「真面目に心配しろっての！」

「でも僕はかくれんぼ中だからこそ、真面目に鬼の役目を……」

「緊急事態でしょう！ でしょう、でしょ！」

「でしょう、でしょ」

詠美さんと真美さんが二人一緒に「でしょう、でしょ」と僕に迫ってくる。怖いどころかむしろ可愛げもあるのだけど、不思議な威

圧感で僕はたじたじ。

「わかった。探しに……じゃなくて、助けに行こう！」

「サトウーさんならそう言ってくれると思ってました！」

「ました、まし！」

そういうわけで、声のしたほうへと進んでいく。もちろん先頭は僕。

そして、たどり着いた場所で僕らが見たものは……。

「離してくださいっ！」

「由紀さん！」

なんと、男性に腕をつかまれ抵抗する由紀さんの姿だった。

「あの人って知り合い？」

「どう見たって不審者ですから！ サトウーさんと同じくらい！」

「ずずーん」

僕ってみんなから見たら不審者なのか。く、悔しい。

「ですがサトウーさん。私にはあなたを信じる余地があります！」

そう言って詠美さんは、バシツと僕の背を叩く。そのまま前のめりになった僕は、身構える余裕もなく男に拘束された由紀さんのもとへ。

おっとつとつと、バランスを崩しながら突っ込む。ハツとして顔を上げると、いつの間にか三メートルくらいまで近づいていた。まあ、それでも相手の隙を見事についたらしく、これはこれで由紀さんを助ける絶好のチャンスなのだろうけど……。

「つて、だから僕は生身じゃ全然戦えないんだってば！ 虫も殺せやしないんだよっ！」

誠に残念なことだけど、魔法も使えない僕は無力なのです。

「サトウーさん、がんばって！」

「がんばって、がんば！」

「うわあ！ 見事に二人とも僕の言葉を聞いちゃいないね！」

ちらつと振り返ると、二人とも笑顔で僕の応援をしている。その期待は喜ばしいんだけど、たぶんこたえられないや。いつそのこと

逃げちゃおっかな？

「……ん？」

ところがある。すぐ間近で由紀さんを拘束し続ける男の姿を目にした僕は、その違和感に気がついた。

黒い仮面で顔を隠したその男は、全身から異様なオーラを放っているではないか。

「陰影生命体、またの名をシェード！　僕がこの世界で戦うべき敵ではありませんか！」

「いんえいせいめいたい？　しえ〜ど？」

「この世界で戦うべき敵？」

僕の言葉を、すぐ背後にいる詠美さんと真美さんがそのまま繰り返した。その口調を耳にする限り、まるで信じちゃいない。やっぱり馬鹿にされているみたいだ。

けど、とりあえず今は敵に集中。

「ふむふむ。……なるほど、こいつは人型タイプか。人型タイプのシェードにはそこそこの知能があるけど、その代わり直接的な攻撃力は獣型のシェードに遠く及ばないから、取り立てて焦る必要はないのかもしれないね」

僕がこの世界で戦うべき敵は、シェードと呼ばれる陰影生命体で、大まかに獣型、人型、その他の三タイプに分類されている。その中でも人型は知能を宿し、ある程度の作戦を使ってくるんだけど、武器でも持っていない限り肉弾戦で恐れることはない。

ま、とは言いながら、軟弱者である僕は魔法の力に頼らないと全く太刀打ちできないんだよね。そもそもシェードという存在自体何度も繰り返し言ってしまうけど、魔法がなければ戦える相手じゃないのだ。僕らが普通に攻撃しても、シェードは影のように攻撃を受け流すのか、まるで効果がないのだから。

だからこそ、この場で由紀さんを助けるためには魔法が必要である。つまり、まあ、女性とのキスが必要ということなのだけど。

「サトウーさん！　焦らなくてもいいから、せめて急いで由紀を助

けてください！」

「焦らず、急いで！ 焦らず、急げっ！」

確かに睨み合って膠着したこの状況、急いで攻撃に打って出る必要はないのかもしれない。けれど、いくら人型とはいえ、シェードは僕らの敵である。こうして由紀さんを人質に取っているからには、おそらく敵もすぐに次の行動に移るというわけではなかるうが、由紀さんの身が危険なのは疑いようのない事実だ。

ならば、もちろん今すぐにでも助ける必要がある。

それに、今ならまだ敵も実体化したばかりのようで、倒すなら完全体になっていない今が狙いどきなだから。

そう思った僕は、とっさに背後を振り返った。

「ねえ、二人とも！ 二人は、今すぐにでも由紀さんを助けたい？
そして、そのためになら僕に力を貸してくれる？」

そんなことを聞きながら、僕はやっぱり不安だった。いくら大切な人のためとはいえ、自分の身を危険にさらすことになるのだから、簡単にうなずいてくれるとは思えなかった。

けれど、二人はそろってこう答える。

「当たり前です！」

その顔にはためらいの影もない。僕が憧れるほど、すがすがしい返事だった。

「すごいな……。うん、ますますこの世界が好きになった」

だから僕は敵と戦うため、何より由紀さんを助けるため、覚悟を決めている二人の下へ駆け寄っていく。

「サ、サトウーさん？」

「ごめんね。ちょっと強引になっちゃうけど、絶対に僕は、由紀さんを助け出してみせるから」

そして困惑する真美さんの唇に、僕は自分の唇をゆっくりと近づけていき――。

「え？ ええ？」

この世界で二度目のキスをした。

7・真美さん

彼女の唇は、ぷくりとかわいらしい感触だった。

「——ん」

軽く触れ合うだけのキス。なのに、僕と彼女の間にあったすべてのものがなくなったような、二人が自意識を保ちながら、それでも混ざり合っていくような気がした。

やがて僕の体は跡形もなくキラキラと輝く粒子となって、彼女の全身を余すところなく満たしていく。

「ん——」

そして心身ともに満たされた僕らは、気が付けば一つとなっていた。

真美さんの体へと、僕の憑依が成功である。

「……すごい。えへへ、君の体って小柄で可愛いね！」

僕とあまり背丈の変わらない詠美さんとは違って、一回り以上も小さい真美さんの体は、まさに女の子って感じがして心が躍った。

「え？ あれ？ え？」

「あ、大丈夫だよ、真美さん。そんなに心配しなくても僕がついてるから」

すぐそばに付いているって意味と、体に憑くっていう二つの意味だね。……あはは、あんまり上手くない。

「ちよつとサトウーさん！ よりにもよって真美の体なんて！ し、しかも私の目の前でキスなんかしちゃったりして！」

僕が真美さんにキスをして憑依すると、その体に向かって詠美さんが手をかけながら迫ってきた。なにやら気が動転しているぞ？

「お、落ち着いてよ詠美さん！ それにこれは真美さんの体だから、そんなに肩をゆすらず丁寧に扱ったほうがいいと思うよ！」

「うわわわ……」

詠美さんが激しく肩を揺さぶるのは真美さんの体なので、体を共

有している僕と真美さんは二人そろって視界がぐらぐらして気持ち悪くなってしまう。

「そ、そうでした」

真美さんに気を遣ったのか、詠美さんは落ち着きを取り戻した。できれば僕にも気を遣って欲しいものだ。

『た、助かりました』

「あはは、本当だよ」

心の中で一緒に笑う僕と真美さん。なんか凄まじい一体感。

「サトウーさん？ 独り言なんて薄気味が悪いですよ？」

「え？ あ、そうか、詠美さんには真美さんの声が聞こえないのか？ 真美さんの心の声は、こうして真美さんの体に憑依している僕にしか聞こえないから、僕が真美さんの体を使って心の中の真美さんと会話していると、周りから見たら真美さんが独り言を言っているかのように見えてしまう……って、自分で言ってるわかにくいな」
「それより詠美さん、僕の魔法は約三分間しか使用できないから、話は後でね」

「え、ああ、わかりました」

「うん、じゃあ詠美さんは下がって！」

詠美さんが下がったのを確認して、僕は由紀さんのほうへ顔を向ける。

『あの、私への説明は？』

「それもあとでね！」

『今すぐ聞きたいことばかりですけど……我慢します』

「うん、僕もしゃべりたいの我慢するよ！」

『しゃ、しゃべりたいのならしゃべってくれたほうが！』

「でも我慢だね！」

『我慢だね、我慢……』

それっきり真美さんは黙り込んでしまった。どこか残念がっているみたいけど、今はそんなことより由紀さんを救出せねば。

「よし、いっくよー！」

掛け声とともに、僕は気力を注入して両腕を輝かせる。

「サ、サトウー？ それとも真美？ どうする気？」

シェードに拘束され、自由を奪われている由紀さんは、僕の姿を見て目を白黒させている。詠美さんは事情を知っているから大丈夫なのかもしれないけど、由紀さんからすれば不思議で仕方がないのだろう。キスをして僕の体が消えたかと思ったら、妹の体が輝き始めたのだからね。

だから僕は彼女を安心させるため、声を大にしてこう言った。

「君を助けるに決まってるじゃない！ 僕と真美さんの二人で！」

『サトウーさん……はい、そうですね！』

そして由紀さんの反応も待たず、そのまま敵へ突っ込んでいく。

憑依した真美さんの体は軽く、身のこなしも警戒に運ぶことができる。さすがかくれんぼで木登りしていた彼女の体。反応速度も運動神経も抜群で、操っている僕の理解が体についていけないくらい。

『うつしゃー！』

僕が振りかぶった右こぶしが、狙い澄ませたとおりにシェードの顔へと引き込まれていく。魔法の力が顔へ直撃すれば、人型タイプのシェードはひとたまりもないだろう。

すなわち、圧勝！

「ググール！」

「きゃ！」

『お、お姉ちゃん！』

ところが、僕の攻撃が直撃しようかというまさにその直前、敵は拘束していた由紀さんの体を投げ飛ばし、空いた両手で僕のこぶしを受け止めてしまう。まるで真剣白刃取りのように僕の右手が挟み取られてしまったのだ。

「ヒヤフー！」

続けざまにそう叫んだシェードの両腕が、怪しく黒く輝き始める。あたかも僕の魔法の光を中和するように、相反する輝きだ。

「しまった！ こいつも僕のように魔法が使えるのか！」

そう、この敵の黒き輝きも、魔法の一種である。詳しくは専門的な知識が必要になるので説明は省略させてもらうが、簡単に言えば、僕の魔法を相殺してしまうのだ。

つまり、僕の魔法が鋭き矛ならば、敵の魔法は鉄壁の盾。どちらが最強かは個々人の能力によるのだろうけど、少なくとも現状は拮抗している。持続的な能力は未知数だが、瞬間的な性能では五分五分らしい。うむ、正面突破は難しいか。

『サトウーさん、大丈夫なんですか？』

僕のわずかな動揺を読み取ったのか、真美さんが心配そうに尋ねてくる。僕に自分の体を預けているのだから、恐怖や不安もあるのだろう。

安心させるためにも、僕は力強く叫ぶ。

「もちろん大丈夫。だって、こうして君の大切な体を借りた以上、負けも負傷も許されないからね！」

『は、はい！』

さて、ここで状況を再確認しよう。僕が放った魔法の一撃である右腕は、同じく魔法で対抗してきたシェードの両手によってがっちりを受け止められてしまっている。とつさのことでお互いに次の手を出せず、それから時間にしておよそ数秒、至近距離でにらみ合いが続いてしまう。

ちなみに、お互いの体で輝いているのは両腕だけ。つまり、どちらも魔法が効力を発揮しているのは両腕だけということだ。僕は片方の右腕を拘束されてしまったけれど、対するシェードはその防衛のためだけに両腕を使っている。

要するに、魔法によって輝く僕の左腕は、敵の防御を気にすることなく打ち込めるということだ！

「食らっちゃえーい！」

『ええーい！』

容赦なく振り抜いた左手は、ものの見事にシェードの下腹部へと

直撃した。

「ヤゲウ……」

その衝撃で、うなりながらシールドは数歩大きく後ずさる。

僕の魔法の効力が余りに強かったのか、先ほどまで両腕を取り囲んでいた黒い輝きも消えうせ、もはや敵は無防備となっている。

そんな敵の苦しむ様子を見ながら、僕は戦闘中ということも忘れて、真美さんの体を使ってその場でピョンピョンと飛び跳ねてしまふ。スカートが風でふわふわして、ついでに色々スースーするけど、なんかそれも含めて全部楽しい。

「えへへ、この真美さんの可愛い少女の体、見た目に小さい割にはフットワークが軽快で、敵の懐にも突っ込んでいけそうだね！

うん、小柄で運動神経抜群な女の子の体って最高！」

『さ、最高って言われましても……』

「特にこの、スレンダーなところが！」

『ぬぬぬぬ……』

無駄のない体つきを褒め称えたつもりが、真美さんも敵に負けず劣らずもだえ苦しむ結果となった。相変わらず女心は難しい。次までに新しい褒め言葉を考えておこう。

「さて、今はそんなことより目の敵、目の敵と」

『サトウーさんこそ、女の敵にならないように気をつけなきゃ駄目ですよ？』

「ん？ ん」

『うは、自覚なさそうな返事ですね……。ですが、少なくとも私にとっては敵なんかじゃなくって……』

なんだか真美さんがごにょごにょと言っているみたいだけど、早く敵にとどめを刺さないとタイムリミットである三分が過ぎてしまふ。真剣に会話の相手をしてあげられないのは心残りだけど、ここは戦闘を優先させてもらおう。

「さあ、シールド、これでとどめだ！ 軽快ステップ乱れ打ち！」

『パンチラ！ パンチラ！ せめて私のパンチラを気にしてくださいさ

い！」

「大丈夫、もう真美さんのあれが水色つてこと知ってるから！」

『んなつですとー！』

軽快ステップ乱れ打ちなんて技名は自分でもどうかと思うけど、実際その通りなのだから説明も必要ないのかもしれない。とにかく僕は無防備なシェードに向かって突撃し、そのまま連打を浴びせかけたのだ。えへへ、真美さんの動揺は無視しちゃった。

「へっへーん、強者は勝つ！」

そして今回も僕の圧勝。もちろん、これは真美さんの協力あつてのことだ。

『……ひとまず。これで勝ったんですか？』

「うん。これも真美さんのおかげだよ、ありがとう！」

感謝の気持ちを伝えたくて、僕は真美さんの体を抱きしめようと努力。

『あ、あのですね！抱きしめるのも抱きしめられるのも自分の体ですが、そこにサトウーさんの意志があると問題ですのでやめてください！』

「え、そう？」

真美さんに憑依したまま自分の体を抱きしめていたら、ものすごい勢いで怒られてしまった。どさくさにまぎれて、真美さんの胸や腰に手が触れてしまったことがいけなかったのかな？ちと反省。

『でもよかったです。お姉ちゃんを助けることができて』

「うん、それはそうだよね」

由紀さんに直接的な危害が及ぶ前に助けることができて本当によかった。

と、ほっと安堵していたときだった。

「サトウーさん、危ない！」

「え？」

突然聞こえた詠美さんの叫び声に、驚いて後ろを振り返ろうとした僕。

しかし、それかなわず僕は大きく吹き飛ばされてしまう。どうやら、背後から何かが激突してきたらしい。

『うわあああ!』

「……くそ、獣型のシールドか。まさか、もう一匹いたとは!」

吹き飛ばされた先で振り向いた僕の目に映ったものは、黒い犬の姿をしたシールドだった。鼻息荒く、いかにも獰猛。

——ところで。

僕の憑依能力はおよそ三分間持続するのだが、実は憑依中の体に外部から強い衝撃を受けてしまうと、たとえ憑依時間に猶予が残されていても憑依が解かれてしまうのである。

だから背後から黒犬に突撃されてしまった僕と真美さんの体は、分離して元通りになってしまうのだった。

「ご、ごめん! 真美さん、大丈夫?」

元の姿に戻った僕は、すぐ隣に倒れている真美さんの体を抱き起こす。

「あ、はい。ちょっとすりむいただけみたいです」

よく見ると、真美さんの膝小僧には擦り傷が。とても綺麗でつるつるしていたのに、なんてことだ。折角の服も土ぼこりで汚れちゃったし。

むむむ。シールド、許すまじ。

「ま、真美! ちょっと、大丈夫なの?」

黒犬に襲われてしまった真美さんのことが心配になったのか、由紀さんは慌てて駆け寄ってきた。

「うん、私は大丈夫。でも……」

不安げな真美さんの視線の先には、こちらの様子をうかがっている黒犬が。このままじゃ僕らは一方的にやられてしまうだろう。みんなを守るためには、もう一度魔法を使って戦う必要があるのだが、立て続けに真美さんに使うことは無理だ。

そこで僕は、由紀さんに頭を下げる。

「お願いだ、由紀さん。みんなを助けるために、僕とキスを」

「え、キス？ キスってあの、口と口の？」

「そうだよ。由紀さんも見ていたと思うけど、僕はキスすることで魔法が使えるようになって、シェードっていう敵と戦えるようになるんだ！ ね、だから！」

「でも私は、その、ファーストキスは好きな人とするって決めてるし……」

顔をうつむかせて呟く由紀さんは、やっぱり自分の唇に人差し指を当てながら頬を赤く染めている。

そんな風に恥じらう姉の姿を見て思うところがあつたのか、真美さんが右手を上げながら元気いっぱいにこう提案してきた。

「サトウーさん、だったらもう一度私に！」

「ごめんね、真美さん。君の気持ちは嬉しいんだけど、残念ながら続けて同じ人には使えないんだ」

「そうなんですか……」

落ち込んでしまったのか、真美さんにがつくりと肩を落とされてしまう。くそ、なんとという罪悪感だろう。こんなにも彼女は献身的で優しいのに、それをあろうことか落胆させてしまうなんて。

「くそう、あのシェードも今のところはこちらの様子をうかがっているけど、今にも飛び掛つてきそうで恐ろしい……」

黒犬はこちらに向かつてうなつてはいるものの、牙をむき出しに襲い掛かってくることはない。おそらく、離れた場所から様子見でもしていてくれるのだろう。まるでこちらの態勢が整うのを待っていてくれるようだが、シェードという存在は不思議なもので、時間経過とともに実体化が進行し、より強く進化していくものなのだ。つまり、今は黒犬の姿をしているあのシェードも、数分後には大きな黒狼へと成長を遂げるに違いない。そのための時間稼ぎとして、あちらは僕らをうなり声でけん制しているに過ぎないのだ。

そんなことしなくたって、今の状態の僕は無力なのにな。たぶん獣型のシェードにはそういった戦況判断も上手くできないのだろう。すでにそっこのほうが優勢な癖して、怖がりなんだから。

などと、笑っている場合じゃないんだけど。うわ、ほんとにどうしよう、僕。

「サトウーさん、だったら私にキスを！」

膝を屈し頭を抱えて悩んでいる僕に向かって、いきなり声高にそう叫んだ詠美さんは、僕に向かって両腕を広げていた。

僕と詠美さんとの距離は少し離れているものの、その申し出を断る理由はない。シールドがその標的を僕らから詠美さんに切り替えてしまう前に、決断しなければならぬのだから。

「うん、わかった。ありがとう、詠美さん！」

そして駆け寄った僕は詠美さんに激突しつつも逆に抱きしめられ、そのまま求めるようにお互いの唇を近づける。だから少し荒々しくて優しくもなかったけれど、僕は詠美さんとスタイリッシュに二度目のキスをするのだった。

8・シエード

憑依する体も二度目となると、やはり手馴れたものである。

キス直後に詠美さんの体へと憑依した僕は、すぐさま敵である黒犬へと向き直った。

『さあ、お願いしますよ、サトウーさん!』

心の中で勇ましく詠美さんが僕の背を押した。最初のころとは違って彼女も協力的で、僕も嬉しい。心が躍れば体も踊る。戦闘にもメリハリが出るというものだ。

「もちろんだよ! だけど、また詠美さんを巻き込んでしまつてごめんね」

『大丈夫です。だつて、二人を守るためですから』

「そつか、ありがとう」

『私も……』

「え?」

『いえ、なんでもありません。とにかく敵に集中ですよ、集中!』

「う、うん、そうだよね」

詠美さんが僕に何を言いかけたのか非常に気になつてしまつけれど、仕方ない。今は目の前の敵に集中しないと、また三分が無駄に経過してしまう。

「ギョルルル!」

おっかない叫び声とともに、黒犬の姿が一回り大きくなっていく。牙やつめがより鋭く研ぎ澄まされる。どうやらパワーアップしてしまつたらしい。

『なんか見るからに獰猛ですね……』

雄雄しいシエードを前に、詠美さんが怯えている。もちろん僕も、もとの体のままだつたら全身が震えて戦いどころではなかったことだろう。

けれど、今の僕に恐れはない。

だって、もはや一人じゃないのだから！

「いくつよー！ 詠美さん、君の体を借りて！」

敵が攻撃態勢に移ってしまうその前に、僕は詠美さんの体へと意識を集中させる。

するとたちまち両腕が光り輝く。魔法が効力を発揮したのを確認して、僕は今まさにこちらへ飛び掛ってきたシールドへと両手を突き出した。

ザ・カウンター。……そのまますぎて悲しいな。もっと格好いい技名とか決めておくんだった。折角攻撃が華麗に決まったのに、名前が弱いとむなしいよね。

『やりましたね！』

「うん、そうだね。ちょっとあつけないくらい」

それにしても魔法の力が強すぎる。光り輝く腕で軽く殴りつけるだけで、あの獰猛な獣型シールドまで一瞬のうちに倒してしまえたのだから。

うーむ、さらに要領がよくなったらもっと強くなれるんじゃないか、僕たち。未恐ろしいな。三分しか持続しないのが心残りだと思うけど。

『あつけないくらいがちょうどいいんです！ 残念がらないでくださいよ、恐ろしい！』

「あはは、ごめん。別に残念がっていたわけじゃないんだけどね……」

『本当ですか？ サトウーさんのことだから、本当はもっと華麗に過激に敵と戦闘してみたいとか、アクションシーンをど派手に演出したいなあ、とか思っていたりするんじゃないですか？』

「ふむ、否定しない」

『何を言っているんですか、ちゃんと否定してください！ 今すぐ否定してください！ でなければ私は二度とサトウーさんに協力なんてしませんからね！』

「うわわ、ごめん！ 否定するから許して！ どうか、これで！」

『って、だからそれは私の体だから土下座なんかしないでくださいよ！ ああ、私の顔が地面に！』

ズザズザと額を地面にこすり付けていたら、全身が淡く輝きだす。すると僕らは不思議な浮遊感に包まれて、気がついていたらもとの体に戻っていた。どうやらもう三分ほど経過していたらしい。ほとんど土下座に使ってしまったな。

「よ、ようやく戻りました。サトウーさんに私の体を任せるのは本当に不安で仕方ありませんでしたよ」

「え、そうだったの？ 詠美さんってば、乗り気じゃなかったの？」
詠美さんから誘ってきたくせに！。

「だーれが、乗り気になって自分の体を貸しますか！ キ、キスマでして！」

「ひ、ひどい！ それじゃ詠美さんったら、遊びだったんだね！」

「むしろ逆ですから！ 遊びなんかじゃなくて、由紀を助けるためでしたから！」

ムキー、ムキーといがみ合う僕と詠美さん。僕らの言い合いが次第に白熱していくのを心配に受け取られたのか、隣から横槍が入って口げんかは中断してしまう。

「んっんー！ 取り込んでいるところを邪魔するけど、ちょっと二人ともいいかな？」

それは、由紀さんの仕業だった。

「なに？」

「そのさ、キスのことなんだけど」

「キス？」

由紀さんの口からその単語が出るとドキリとする。一度断られちゃっているからかな？

その質問に、由紀さんは答えにくそうに眉をひそめながら、それでも口を開いた。

「……うん。そうだよ、キスだよ、キス。あのさ、ねえ、詠美。あんたって私たちの前でキスなんかやって、まさかそいつのこ

と好きだったりするんじゃない？」

「……………」

「え、詠美？」

由紀さんの質問を耳にした瞬間、詠美さんの体が不自然に固まっ
てしまった。僕もちゃんと答えを聞いてみたい質問なんだけど、す
ぐには解答してくれなそうだ。まずは彼女のフリーズ状態を解凍し
なくちゃね！ ……なんちゃって。

「そういえばキスだけど、真美さん、改めてありがとう。君のおか
げで助かったよ」

すっかり忘れてしまうところだった。真美さんの協力がなければ、
僕らはきつと由紀さんを助けることなどできなかっただろう。そう
考えると、真美さんには感謝してもしたりない。よし、いつそのこ
とこれからは真美さんに対する挨拶を、すべてありがとうにでもし
てみようかな。……しつこいか。

「そういえばキスだよ、サトウー。え、詠美だけにとどまらず、よ
くも私の大切な妹の唇を……」

キリツと向けられた鋭い視線が、僕の目を射抜く。しかも鋭い犬
歯がむき出し。明らかに敵意を持っていますよね、これ。

にじりよられるので、僕は一步步後ずさる。このままじゃ追い
詰められてしまう。

と、危機的状況に陥ろうとしたまさにその時。

「待って、お姉ちゃん。サトウー先輩は悪くないの！」

まるで僕を庇うように前へ飛び出したのは、意外なことにも真美
さんその人だった。

ところで、何故か真美さんは僕のことを急に先輩とか呼び出した
ぞ？ 尊敬されてしまったのだろうか。

これには僕だけでなく、もちろん由紀さんも驚きを隠せない。

「何を言い出すのよ、真美。どうしてそんなことを？」

「私はね、お姉ちゃん。もしも将来結婚するならファーストキスの
相手だって、もう心に決めていたの。だから……ああ」

と、遠い目をする真美さん。

「あらま！ 私の妹が、夢見る中二女子になってしまったわ！」

「ああ、ああ！ 私の王子様がようやく……」

「駄目よ、真美！ 帰ってきなさい、妄想の世界は危険よ！」

などと、なにやら加藤姉妹が騒ぎ始めてしまっただった。残念なことに、僕の入り込んでいく隙が見当たらない。なので、黙って様子を見守ることにしよう。

未だにピーンと固まっている詠美さん、妹のことで頭を抱えながらうなり続ける由紀さん、そしてなにやら目を輝かせながら妄想の世界に入り込んでいる真美さん。

そんなみんなの様子を眺めながら、ははは、と他人事のように笑っていた僕。

ところが、のんきに笑っている僕に背後から忍び寄る影。寸前のところで驚いて振り返ると、そこにはよく見知った女性が立っていた。

「シェードの反応があったから来てみれば。……愚鈍だな、弟よ」

「ね、姉さん！」

それは見間違っはすもない、僕の姉さんだった。

「姉さん？」

僕の言葉に気がついたらしく、三人は突然姿を現した姉さんにそろって顔を向けた。いかにも興味心身って感じで、ちよつと身を乗り出しているのだから面白い。

姉さんはそんな三人の顔を興味深そうに見比べると、満足げに僕へと振り返ってこう言った。

「しかし、短期間のうちにこれだけの協力者を集めたとなれば、弟にしては上出来だ。その身に有り余る光栄だと思え」

「うん、ありがとう。うは、姉さんから褒められるなんて夢みたい！」

生まれてこの方、姉さんには見下されてばかりだったのに。まさかこんな風に褒めてくれるなんて幸せだ。

もしかして夢じゃないよね？

「サトウーさん、残念ながら夢です」

「え？」

正気を取り戻した詠美さんの冷めた声に、僕は驚いて振り返った。するとその驚きこそ意外だといわんばかりに、詠美さんが鋭い指摘を。

「だって、まだ誰もあなたの協力者になるとは言っていないでしょう？」

「……それは、そうだけど」

確かに、詠美さんは他の協力者を紹介してくれるって話だったし、由紀さんは僕のこと目の敵にしているようだし、真美さんだってまだ答えてくれないんだよね。

つまり、現状じゃ協力者なんていないも同然。

「どういうことだ、弟。詳しく教えろ、グズ」

「うっ……」

僕に向かって突き刺さる鋭い視線が胸に痛い。姉さんをぬか喜びさせてしまったとなれば、なにをされるかわかったもんじやない。

最悪、シエードなんかよりもずっと怖いんじゃないか、この人。

答えに窮した僕は、唇を噛み締め、涙を堪える。姉さんはそんな僕の表情を、じっと見下すように眺めていた。

「待ってください、サトウー先輩！」

「え？」

もうこのまま姉さんにやられるしかないと諦めかけたその時、意外にも声を上げた真美さん。僕は驚き振り返った。

「私がサトウー先輩の協力者になります！ その、よくわかりませんけど永遠に！」

顔を真っ赤にして叫んだ真美さんは、真っ直ぐに駆け寄ってきて僕の手を力強く握り締めてくれた。ギュッと伝わってくるその熱意に、思わず僕の目は潤んだ。

「真美さん……。ありがとう！」

真美さんの手を握り締めたまま、僕は笑顔で姉さんに顔を向けた。ほら、こんなにも素敵な協力者がいるんだよって。

「一人か？　じゃあ、その二人はなんだ？」

姉さんの冷え切った目が、後ろに控える詠美さんと由紀さんに向けられた。

「私は、別に、そう、その子の姉だから、サトウーの監視者としてここにいるだけよ」

とは、強気な由紀さんの言葉。

姉さんも渋々納得した様子で、今度は視線を詠美さんに注ぐ。

「わ、わ、わ、私は、その……。そう、サトウーさんの宿主です！」

「サトウー？　宿主？」

まるで何の話をしているのか理解できないという顔をする姉さん。そういえば、あとでちゃんと僕の偽名がサトウーなんだって教えとかないと。うっかりみんなに僕の本名を教えてしまいかねないぞ。

そんな僕の心配をよそに、詠美さんは胸を張ってこう言った。

「ええ、サトウーさんは私の家に住んでいますので！」

「ほほう」

姉さんが驚いたのは無理もないとして、どうして由紀さんと真美さんの二人もビクツと肩を揺らしてまで驚いてしまうのだろう？

そんな疑問を残しながら、僕は加藤姉妹とひとまず別れ、姉さんを詠美さんの家まで案内するのだった。

9・姉さん

いろいろあつて、詠美さんの家に戻ることになった僕ら三人。僕が玄関の扉をあけて一番に家へ上がると、廊下まで出迎えた浩一さんが不服そうに文句を言ってきた。

「どうしてお前が帰って来るんだよ。新しい協力者のところに行くんじゃないかったのか？」

「ああ、そのことなんだけど……」

と、説明しようとしたのだが。

「ああ、もういい。しゃべるな。お前の説明なんて意味がわからないから聞きたくもない。とにかく帰れ。今すぐ帰れ」

問答無用で僕を手押ししてくる浩一さんに、無力な僕はなされるがまま後退してしまう。すると当然の成り行きで後ろに控えていた姉さんにぶつかってしまうので、ものすごく不機嫌な文句をこれまた耳にするのだ。

「馬鹿か、弟。私にぶつかってくるな」

「ああ、ごめん！」

とつさに僕が横にずれると、その反動を食らって浩一さんが姉さんに突撃してしまう。

「あいた！」

「痛いのは私だ、ぼけ」

手こそ出さないものの、姉さんの口調はとげとげしかった。もはや、つばを吐き掛けそうな勢いである。反射的に身をすくめた浩一さんの反応は正しいだろう。

姉さんは出会いがしらにぶつかってきた浩一さんへ威嚇するかのごとく睨みつけていた。

の、だが。

「……こりは、とんだご無礼をば」

姉さんの顔を見た浩一さんは、何故か目を輝かせて、恭しく頭を

下げた。普段の浩一さんからは想像もできない変わり身だ。

よもや頭を打ったか？

「誰だ、こいつは。弟、お前の知り合いか？」

「うん、そのはずなんだけど、なんだか僕って嫌われているみたいで」

と、確認するように浩一さんへ目を向けると、彼はいきなり僕に遠慮なく顔を近づけてきた。それこそキスをするかのような勢いで。おいおい、僕は驚いて危うくひっくり返るところだったぞ。

「ん、弟だと？ お前が弟ってことはお前、サトウー、もしかこのお方は？」

「うん、僕の姉さん」

「そうだったのか……」

なにやら納得した浩一さんは腕を組むと何度も頭を上下させた。しかもちよつと嬉しそうに口元をゆがめているし。

なんかさつきから不気味なんだけど、この人。通報しちゃったほうがいい？

「おい、弟。お前の知り合いならどうにかしろ。気持ち悪いぞ、この男」

「そうは言っても姉さん、僕は浩一さんから出て行くように追い返されたばかりだし、たぶん話も聞いてくれないと思うんだ。だから姉さん、残念だけど今日は帰ろう」

初対面にもかかわらず好戦的な姉さんの手を引っ張って、そのまま一緒に外へ連れ出す。このままずると浩一さんに迷惑をかけるしまうのも申し訳ないからね。うん、姉さんと再会したこの辺が潮時かもしれない。これでお別れにしよう。

「ま、ちょ、待てよ、サトウー！」

「え？」

しかし、あろうことか浩一さんに呼び止められた。

「そのさ、今日も泊まっていけよ。よかったらお前の姉さんも一緒にさ。ほら、この前だっけと俺の家に住めばいいって、そーい

う話だっただろ、な？」

「え？ そうだったの？」

てつきり僕は追い出されているような気になっていたんだけど。まさか歓迎されていたなんて。本当なのかな？

「なんだ、弟。お前の話とずいぶん違うじゃないか」

「う、うん。実は僕もそれに困惑しているところ」

二人して首をかしげていたら、浩一さんが咳払いをしてこう続けた。

「だったらよく聞くんだ、サトウー。お前は俺の家に世話になれ。それから、そちらのお姉さんもぜひ一緒に」

そして繰り出される、飛び切りのスマイル。何を喜んでいるのかわからないけど、すごく不気味だって教えてあげたほうがいいのかな。本人は満足げだから言いづらい。

と、僕らが浩一さんの対処に困惑していると、ずっと背後に隠れていた詠美さんが前に出てきた。

「お兄ちゃん？ ねえ、お兄ちゃん？」

「げげ！ エ、エイミィ、まさかずっとそこにいたのか！ お、落ち着け、俺は決してこの方に心奪われていたわけじゃなく、そもそも本命はエイミィ、お前であつてだな！」

「うん、まず落ち着くべきはお兄ちゃんでしょ？」

「ま、ままま、まあ、そうなんだがゆえに！」

妹である詠美さんの登場により、すっかり取り乱した浩一さん。うん、とにかく見苦しいね。

「まっ、いいよ、別に。お兄ちゃんなんかどうでもさ……」

そう言いながらも詠美さんが口をすぼめて拗ねているように見えたのは、果たして僕だけだろうか？

「エ、エイミィ……」

「そんなことよりお兄ちゃん、二人を家の中に入れてあげようよ。いつまでもこんなところに突っ立たせているわけにもいかないでしょ？」

「んまあ、そうだよな」

やっぱり機嫌が悪い詠美さんが先頭になって、僕らをリビングに通してくれた。いつになく浩一さんが沈んだ様子だったのは、本当に珍しくて不思議だった。

僕と姉さんが二人そろって詠美さんの両親である鈴木夫妻に挨拶をすると、「はあ、そうですか」と適当に受け流されたので、それはそれで了承を得たことにした。宿泊、無問題。

残る問題は、この日も夕食の席である。姉さんが一緒だから、ズバズバと会話も盛り上がるだろうなあ、なんて樂觀視していた僕は、けれど言葉を失ってしまったのだ。

なにしろ、昨日よりも空気が重々しい。期待の星である姉さんは、黙々と食事に集中しているばかりで、殺伐としたオーラさえ身にまとっているようだった。

「ねえ、姉さん」

ちよつと空気を和らげようと思って声を掛けても、

「食事中は黙って手を動かさんか、ばか者」

なんて一蹴されてしまうのだから取り付く島もない。むしろ姉さんのせいでみんなに余計なプレッシャーを与えてしまっているほどだ。

「……」

相変わらずみんなうつむいているなあ。もはや冷え切った家庭そのものなんだけど、それでも家族そろって食卓を囲んでいるからには、まだ団欒を取り戻す可能性もありそうなのに、現実はそう上手くはいかないのかな。

料理を口に運びながらみんなの顔をちらちらと盗み見るけど、暗すぎる。こんなに黙々と食事していて味がわかるのか？

むむむ、仕方ない。やはりここは僕が先陣を切るしかあるまい。どれ、僕が気の利いた台詞で雰囲気盛り上げてしまおう。

「そつえば、今日も詠美さんの体はしなやかだったよね。僕さ、

とっても気持ちが悪かったよ」

「……………」

あれ？ みなさん、黙ったまま僕のことを睨みつけていらっしやる。

特に浩一さんは殺意、おばさんは苛立ち、おじさんは憤怒の念を視線にこめて、何故か姉さんはポカーンと呆れ顔。

うん、気まずい。僕は一目散に逃げ出すことにした。

ごちそうさま！

食後すぐに横になると体に悪いらしいので、僕はベッドに腰掛けた。もちろん、浩一さんの部屋のベッドである。

ちなみに、彼のベッドの下には事前の世俗文化調査どおり、若者にふさわしい書物の存在が確認された。僕の予想では妹っぽい幼い顔つきの少女が好みなのかなあって思ったんだけど、意外や意外、妹好きの浩一さんらしくなく、巨乳美人ばかりだった。しかもお姉さん系。なんだそれ、がっかりだ。

僕も嫌いじゃないんだけど、うーん、好みが偏りすぎていないか？ もつとこう、あらゆる可能性を視野に入れたほうが、現実的な出会いや巡り合わせというものが……って、僕は人の部屋で何をしているんだ、まったく。変態に輪をかけて変態じゃないか。

でもこういう雑誌って興味を引くから侮れない。ふむふむ、ふむふむ。

「って、わっしやーい！」

「うつひゃあ！」

いきなり部屋に飛び込んできた浩一さん、奇声を上げると僕が眺めていた雑誌を勢いよく弾き飛ばした。そんなに見られなくなかったのか、ベッドの上に綺麗に並べていた残りの雑誌まで慌ててかき集める始末。はは、胸にエロ本抱えて鼻息荒く、まさしく変態っぽいよ。

「お、お兄ちゃん……」

「え、詠美！ これは、ち、ちが……」

兄の醜態に驚愕した妹の前に、浩一さんは言葉を失う。

「浅ましいぞ、小僧。しかもその表紙に見えるマークはなんだ？

十八禁と呼ばれる、どエロ雑誌の証拠じゃないか」

「あ、え、その……」

続けてやって来た姉さんの汚らしいものを見下すような視線に、浩一さんはうろたえている。うん、間違っても喜んじやいないはず。

「お兄ちゃん、まあ、その、まあ……」

詠美さんもなんと声を掛けるべきか迷っている。血のつながる兄妹だけに、こういった話題は気まずいのもかもしれない。実は僕も、姉さんを前に結構緊張しているのだ。どつきどき。

よし、ここは僕が空気を和らげよう。

「安心してよ、詠美さん。どうも浩一さんの趣味って、自分より年上で巨乳の女性みたいだから」

「んなんですと！」

うは、詠美さんがのけぞった！

「これだから男は……」

ぐは、姉さんが僕らを同時に見下している！ 僕まで同類にされてしまった！

「つーか、浩一さん！ あなたがそんな雑誌を隠し持っているから！ 十八禁なんて雑誌を買い揃えちゃっているから！」

僕が非難の矛先を浩一さん一人に向けさせようと話を振ると、浩一さんが憤慨して叫ぶ。

「言っておくがな、俺は四月生まれだからもう十八だぞ！ 高校生だが十八だ！ 今年は受験を控えているが十八だ！ だからせめて優しく見逃してくれ！」

「今年で十八って、これさ、ほとんど去年のだよ？」

「……サトウー、お前もそこまで見るなよ。そして気付いても黙っててくれよ」

「そんなこと言われても」

サトウーさんから涙目ながらに嘆願されたが、時すでに遅し。もはや恥を忍んで諦めるしかないね、この場合。

「そんなことより話がある。弟、それから十八男。とりあえず並んでそこに座れ」

「十八男つて……。別に間違っちゃいないが、間違っちゃいないが心に痛い」

「そうだよ、姉さん。“禁”が抜けているよ」

たとえば青春十八切符と十八禁雑誌じゃ天と地ほどに別物だからね。

「うるさい、サトウー！ いいからお前は黙って俺の隣に座つてろ！」

口では突き放すように言いながら、僕を力強く引き寄せて隣に座らせる浩一さん。

まったく、ツンデレなんだから。きゅんきゅん。

「で、話つてなんですか？」

僕たちと向かい合うように座った詠美さんの質問に、珍しく姉さんは言いよどむ。

「ああ、うん。……さて。とはいえ、一体何から話せばいいものか」
そうか、説明するべきこととか色々あるんだよね、本当は。そもそも僕と姉さんは異世界人なわけだし。風俗の違いとか、色々ね。

「まず、君は弟の協力者ということで間違いないのか？」

真剣な目をして尋ねた姉さんの視線を浴びながら、詠美さんはたつぷり余韻をもってこう答えた。

「……………はい」

「え、え、ええええ？ ええええ！ エイミー！」

と、突然素っ頓狂な声を上げる浩一さん。ひっくり返ったかと思つたら立ち上がったりして、もうせわしないったらない。

「ちよつと浩一さん、さすがにうるさいよ。僕の隣で騒ぎすぎ」

「ただだ、だって、たった今エイミーが恥じらいながらも力強く、うかがうように恐れながらも迷いなくうなずいたんだぞ、この俺の

目の前で！ ああ、エイミイのコケティッシュな微笑なんて俺は生まれて初めて目の当たりにしちゃった！」

コケティッシュな微笑で……。そりゃ確かに詠美さんのはにかなだ笑顔は素敵だけど。

「お兄ちゃん、恥ずかしいから落ち着いて」

「その恥ずかしさは誰に対するどんな感情だ！ 今すぐここで言ってみろ、エイミイ！ いや、それでも嘘だと言ってくれ、エイミイ、エイミイ！」

本当にうるさいな、この人。熱くなりすぎだよ。

「そうは言っけどお兄ちゃん、お兄ちゃんだってサトウーさんのお姉さんへの視線が怪しいんだけど」

「んな！」

詠美さんの指摘に、自分の胸を手で押さえひるむ浩一さん。凶星を付かれでもしたのだろうか。

「ん？ 変態の目が怪しいだど？」

姉さんが不機嫌そうに浩一さんを警戒する。結果、それぞれがお互いの出方をうかがっているから、なんだか一触即発な雰囲気になっってしまった。

うむ、ここは僕が話を変えて、みんなの気を引いてみよう。すっかり僕がリーダーだね。

「そういえばね、どうにも僕ってこの世界にきてから都合のよい敵襲が続いているんだけど……」

初日に獣型、そして今日は人型とそれについてきた犬っぽいシェード。たった二日で三体だ。これじゃ真っ先に僕の体がダウンするに違いない。

折角僕より優秀な姉さんがいるんだから、その事について相談しておきたかったのだ。

「まさか僕、シェードから狙われていたりする？」

そんな人気者ってわけじゃないとしても、そうとしか思えない。どうせもてるのなら女性からがよかったなあ。

「だろうな。本能的に天敵をかぎ分けて襲っているのだろう」

「僕は天敵なのか……」

そうか、シェードにしてみれば僕ってまさに天敵なんだよな。魔法が使えるってことで、命を狙われてしまうのも無理のない話しかもしれない。これからは気を抜けないね。

と、一人で考え込んでいたら浩一さんがそつと尋ねてくる。

「ん、シェードって？」

「陰影生命体っていう、僕が戦うべき敵の名前だよ。そっか、そういえば浩一さんはまだ見たことがないんだっけ」

「陰影生命体ねえ。……うさくさいな」

「嘘じゃないからね？ 本当だからね！」

「ふう〜ん」

うわ、全く信じてないよね、この人。絶対僕のことを馬鹿にするよ。ちよつと含み笑いしちゃっているし。釈然としないなあ。

「お兄ちゃん、にわかには信じがたいことだと思うけど、残念ながら本当のことみたい」

「エイミィ……」

まるでかわいそうなものを見るかのような目をして、詠美さんへと憐憫のまなざしを向ける浩一さん。あたかも胡散臭い詐欺に騙されてしまった被害者を哀れんでいるみたい。まさか僕のことを大嘘つきとも思っているんじゃないだろうか。

「こ、ここで証明して見せてもいいんだからね？」

そのまま浩一さんに詰め寄ろうとしたところを、姉さんに止められてしまう。残念。

「いや、待て弟。どうせ説明するなら、残りの二人にも一緒に説明したほうが手っ取り早いだろう」

「残りの二人って、えつと、加藤姉妹のことかな？」

たぶん由紀さんと真美さんのことだろう。由紀さんは不明だけど、真美さんは協力的な感じだったからね。

「うむ」

と一度うなずいて、姉さんは詠美さんに向き直ってこう言った。

「とにかく、明日もう一度今日のメンバーを集めてくれ。そこで私からちゃんとした説明をしようと思う」

「ええと、また公園でいいんですか？」

「私はどこだって構わない。そちらさえよければ」

「わかりました」

詠美さんがうなずいた。どうやら詳しい説明は明日、みんなが公園に集まったところでゆっくりするつもりらしい。

こうして話にも一段落着き、ちょうどいい頃合だと思ったのか、姉さんが立ち上がる。

「さてと、それでは今日のところはもう休みたいのだが、私はどこで休ませてもらえるのかな？」

「姉さんはもちろん、詠美さんの部屋に……」

と僕が言いかけたところ、脇から叫ぶように割って入る浩一さん。僕のわき腹を両手でぐぐつと押してくる。ちょっとこれは必死すぎるだろう。

「そのことですが、是非サトウーのお姉さんは俺の部屋に！」

「ちょっとお兄ちゃん、馬鹿なこと言わないで」

「しかし、エイミィ。そうすればほら、自然とサトウーはお前の部屋に泊まることになるんだぜ？」

「え、サトウーさんが？ ……ぬぬ」

なにやら兄妹で顔をつき合わせて悩み始めたぞ？

結論がなかなか出ないことに痺れをきらせたのか、あつさり姉さんがこう提案する。

「おい、もし男女二人ずつにするつもりなら、鈴木兄妹、サトウー姉弟って部屋割りでいいんじゃないか」

僕はそれもいいかなって思ったけど、鈴木兄妹は急に冷静になっ
たらしい。

「……いや、ここはやはり同性同士でベターにいい」

というわけで、姉さんは詠美さんの部屋で、僕は浩一さんの部屋

で夜を明かすのだった。

うん、別に何事もなく無事に夜が明けたからね！

10・浩一さん

その翌日、僕らは公園に集まっていた。僕、詠美さんと浩一さん、由紀さんと真美さん、それから姉さんの六人である。気が付けば、もうなかなかの大事帯になっていた。これで向かうところ敵なし、僕も大満足で文句なし。

「さて、みんなそろったようだな」

だけど、仕切るのが僕じゃなくて姉さんっていうのが残念だ。まったく、どうしてこういう大事な場面でリーダーになりきれないんだよ、僕って奴は！

「あのその、今日は説明をしてくださるということですよ？　ですな？」

真美さんが何かを期待するような目で僕らを見ている。その純粹すぎる顔が僕にはまぶしすぎて直視できない。

「私も真美の姉としてちゃんと聞かせてもらいます」

「さすが詠美の友達だな、二人とも。よっし、この俺もすっかり話を聞かせてもらっぜ！」

浩一さんもすっかり聞く気満々である。これには姉さんもちよつと嬉しいようだ。得意げな顔して胸張っちゃってるもの。しゃべりたがりに聞きたがり。ちよつといい感じ。

「うむ、それでは私から順を追って説明させてもらおう」

「うん、してして！」

とりあえず僕は姉さんの横に立って補助的な役割を担当することにした。大切な話の邪魔をしないように合いの手だ。

「陰影生命体とはシェードと呼ばれる、いわゆる影のような存在のことだ。明確な目的などはなく、ただ本能に従って人間を襲う危険な存在であると考えられている」

「そうそう」

「そして私たちは異世界から、そんなシェードを退治するためにこ

の世界にやって来た」

「そうそう」

「本来ならば第一人に与えられた任務だったのだが、私も尻拭いとして来てやったのだ。なにしろこの弟は出来損ないで、一人で任せるにはリスクが大きすぎるからな」

「そうそう」

「……弟、グズだし」

「そうそう……って、今は単なる悪口だよね？」

これは聞き捨てなりませんね。うっかり認めてしまうところだったけど。いやあ、やっぱり姉さんは僕に容赦がないなあ。ははは。

「そんなことより俺から質問いいか？ どうして急にシェードなんて化け物がこの町に出るようになったんだよ？ 少なくとも俺は今まで陰影生命体なんて見たことも聞いたこともなかったのにさ」

という浩一さんの質問に、姉さんはこう答える。

「ふむ、確かに本来ならばこの世界にシェードなんてものは出現しなかったことだろう」

「だったらどうして？」

そこが問題なんだよね、僕らにとっては。

一言では答えにくい疑問にも、姉さんは淡々と事務的に答えていく。

「我々の世界では異世界旅行が一般化しているんだが、その際に使うルートは日々開拓が進んでいるんだ。もちろん開拓する場合には問題がないか事前に調査を専門家がやるのだが、残念なことに今回の異世界間における新ルート開拓に伴い、この世界の母屋市が影の部分になってしまったんだ。まあ、とばっちりだな」

「影？」

「異世界旅行はおろか、その観測さえも不可能な世界の人間に詳しく説明しても理解などできんだろう。だからこそ端的に言わせてもらうが、つまり影とは吹き溜まりみたいなものだ。様々な世界における負のエネルギーが、この母屋市に向かって流入するようになった

てしまったと言えは理解してもらえるか？」

「でね、そのエネルギーが時間とともにシェードとして実体化してしまうってことなんだよ。わかった？」

「よし、ちゃっかり最後だけ僕がまとめてみたぞ。なんかできる男って感じがする。」

「うーん、わかったか？」

「さあ？」

けれど四人とも可愛らしく首をかしげている。でも、無理もないかも。実は僕だってよくわからないからね。僕らの世界でも詳しい仕組みを理解しているのは一部の専門家くらいのもので、一般の人はわかったような振りをして受け入れているだけだもの。

「まあ、とにかくこれだけ理解してくれ。この町にシェードという危険な存在が出るようになったため、私たちはそれを退治しなければならぬ」と

「なるほど。では、とりあえず二人は悪者ではないんですね？」

「とは詠美さんだ。ここで善悪を持ち出してくるとは、なかなか鋭い。」

「そう思ってくれて構わない。私たちはこの世界を守りたくてここにいる」

「うん、それは僕も同じ。シェードには悪いけど、みんなを守りたいからね」

僕らの言葉を聞くと、詠美さんはなにやら考え込むように腕を組む。それからしばらく何度も首をかしげながら思索した結果、彼女は結論を出した。

「そうですね。だったら、私も喜んでサトウーさん達に協力します。よくわからないっていうのが本音ですけど、その、サトウーさんの力になりたいですから」

「私です！ 私も！」

と、ピョンピョン飛び跳ねながら真美さんも賛同してくれる。うん、だけど真美さんはスカートだからパンチラに気をつけようね。

「エイミィ……」

「真美……」

ところが一方、ともに妹を持つ二人は頭を抱えて苦悩していた。
なかなか難儀なものだよね。

「とにかく、詠美さんと真美さんの二人は僕に協力してくれるみたいで嬉しいよ。そ、それから、浩一さんと由紀さんもどうかよろしく。……恨まないでね？」

みんなにペコペコ頭を下げる。特に僕を複雑な目で睨みつけている浩一さんと由紀さんには念入りに。

「さて、挨拶はそれくらいでいいだろう。それより弟。これを受け取れ」

「ん、なあに？」

何かを姉さんから手渡されたけど、これは何？ 携帯電話みたいな機械だけど。

「それは簡易版のリーダーだ」

「リーダー？ 何のリーダー？」

「ばか者。シエードの居場所を突き止めるリーダーに決まっているだろう。これで実体化寸前になったシエードの位置がわかるはずだ」
「なるほど」。つまり、このリーダーに反応があった場所に急行して戦えばいいんだよね？」

「そういうことだ」

そう言った姉さんにバシンと肩を叩かれた。要するにお前ががんばって言いたいんだろう。このリーダーさえあれば、能動的にシエード討伐に動けるからね。

それにしても、今まで僕は姉さんに叱られたり馬鹿にされたり相手にされなかったりと、ひどい扱いばかりだったのだけど、こうしてリーダーを渡してくれるなんて親切だなあ。こんなに協力的な姉さん、初めてなんじゃないだろうか。

なんか泣けてきた。

「ありがとう、姉さん。僕、僕はとってもうれしい」

「間違えるんじゃない、弟。お前のためじゃなく、お前の任務のためだ」

「……そ、そっか。うん、それでもうれしいよ」

どちらにしろ泣けてくるからいいや。

「あのさ、ところでその任務のことなんだが……」

「ん？」

なにやら浩一さんが僕らをうかがうように低姿勢で尋ねてきた。

どうやら僕の任務のことについて疑問を持っているらしい。まさかまだ僕のことを疑っているんだろうか。そろそろ信じてくれないと、次の話に移れないんだけどなあ。

「お前の協力者ってさ、本当に女じゃないと駄目なのか？」

「……」

女じゃないと駄目っていうか……まあ、駄目なんだけど。

「勘違いするなよ！ 別に俺はお前とキスがしたいっていうつもりはないからな！ ただ、俺の妹や彼女達がお前の毒牙にかかるっていうのが気に食わないというか羨ましいというか……であって！」

毒牙って、そこまで言いますか。別に僕は趣味趣向でキスをしているわけじゃないのに。それでもこの世界を守るという使命に燃えているんだけど。

まあ、でも誤解されても仕方ない。なにしろ、実際には女性ばかりを集めてキスをしているわけだからなあ。よく考えると破廉恥だよな、僕。

「うーん、でも僕らの世界では、男性と女性がキスをすることでこの奇跡が起こるわけで、男同士や女同士のキスじゃ効果はないんだよね」

「そうなのか……」

浩一さんは落ち込むけれど、励ましようがない。無理なものは無理なのだ。

僕が浩一さんの背中をポンポンと叩いて元気を出してあげようと腕を伸ばしたその手を、姉さんの一言が遮った。

「おい変態、残念がるのは早いかもしれないぞ」

「え？　ってか、変態って俺？」

よかった、僕のことじゃなかったのか。浩一さん、残念。きつと体が変態って言葉に反応しちゃったからだね。

「そのはずだが？　なんだ、十八男のほうに気が入っていたのか？」

「どっちもいやじゃい。浩一って呼んでほしいんじゃい」

いやじゃい、いやじゃいと、急に駄々っ子っぽくごね出したぞ。

見ている分には面白いけど、絡まれると困るね。現に姉さんはちょっとむっとしているから。

姉さんは大きくため息をつく、浩一さんに向かってこう言った。

「確かに我々の世界では異性同士のキスしか効果はなかったのだが、もしかすれば、この世界の人間となら、男同士でも魔法が使えるようになるかもしれないが。可能性の域を出ないが、試してみる価値はある」

「しかしだな、さすがに男同士でキスって……」

「そ、そうだよ」

と、当然ためらう僕と浩一さん。お互いにお互いの顔色をうかがう。

「だったらお前らはいいのか？　女性に危険な役割を任せ、自分は安全圏で眺めているだけでいいというのか？」

「そ、それはたしかに、どうかと思うが……。しかしだな、サトウ

ーとキスするのは――」

「僕、いいよ？」

「――さすがに、ええ？」

思い切った僕の言葉に驚いて、ぎょっとして僕の顔を凝視する浩一さん。

僕は深呼吸すると、思いのたけを伝える。

「だってね、それで詠美さんや加藤姉妹の二人に頼らずにすむのなら、僕はどんなことだって我慢できるもの」

「お前……はは、ちゃんと立派に男じゃないか」

それから愉快に笑った浩一さんは、息を大きく吐き出すとこう言った。

「よし、決めた。俺も男だ。サトウー、お前に負けちゃいられねえ」
「う、うん」

そして緊張の面持ちで向き合うことになる僕ら。女性のみんなは遠く離れて僕らを見守っている。まるで僕ら二人が腫れ物扱いなのは納得いかないけれど、今は我慢。

手が触れ合う距離で、僕と浩一さんは息を呑む。

「……お前さ、よく見るとお姉さんの面影があって可愛らしい顔しているよな」

「そんなことないよお。それをいうならさ、浩一さんは詠美さんに全然似ていないけど、とっても男らしくて格好いいから僕は憧れるなあ」

「はは、よせよ」

「うん、そうだね。キスを前に余計な言葉はいらないよ」
「ああ」

そして僕らはお互いの唇をそつと――。

「――って、ちよつとタイムだ！　いくらなんでもこの真剣な空気はおかしい！　ほら、もつと軽い感じで試してみようぜ！　そう、罰ゲームみたいなテンションで！」

「ば、罰ゲームって……」

せめて普通のゲームにしてよ。なんでよりによって罰なのさ。

「いいから行くぞ！　さつさと目を閉じろ、サトウー！」

「う、うん！」

ガシツと浩一さんに肩をつかまれ、凄まじい力で体を固定されてしまう。

「ええい、どうとでもなれ！　なーれー！」

「んん！」

なんだかよくわからないままに強引だったけど、浩一さんの一方的な腕力で、僕は初めて男同士でキスをするのだった。……少なくとも

とも、全然ロマンチックじゃないと思う。

11・結果

彼の唇は、ゴツリと鈍い味がした。

——だけだった。

「……おええっ！」

そう言っただけで勢いよく唇を離したのは浩一さんだ。キョロキョロと周囲を確認する限り、どうやら浩一さんへの憑依は失敗したみたい。やっぱり男同士じゃ駄目だね。

「くっそ、よく考えたらこれ、俺のファーストキスじゃねえか！本気でどうしてくれるんだよ、サトウー！」

手のひらを上向きにして大きく両手を左右に広げる浩一さん。怒りやら気恥ずかしさやら後悔やらで顔が真っ赤だ。そのまま無視したら殴りかかってきそうだな、これ。

「まあまあ、男だからノーカウントってことで！」

なだめてみたのだが、浩一さんはおさまらない。

「お、お前は数あるキスの中の一つだからそう割り切れるんだろうがな、今俺の記憶の中にはキスといったらお前とのキスしかないんであつて、それはつまり特別な愛情にも似て……って、本格的にやばい！俺はサトウー相手にどうかし始めている！おや、俺の様子がおかしいぞ？ええい、今すぐキャンセルだ！Bキャンセルだ！待て俺、変な方向に進化するんじゃない！」

ついに一人で地団駄を踏み始めたぞ、この人。わけのわからないことを叫んでいるし、僕には手の施しようがないな。もはや近寄りがたい。

そんな様子を見てか、姉さんもぼそりと呟く。

「やっぱり駄目だったか」

「やっぱりって……」

僕もそう思っていたけどさ。それを人から改めて言われると、男同士でキスまでしちゃった僕らが馬鹿みたいなんだよね。……まあ、

いつか。

「仕方ない。ここはやはり、その女性達に協力を仰ごう」

姉さんはハンターの目をして詠美さんたちを眺め回す。ちよいと猟奇的な表情をしていて僕も怖い。対する女性陣は一步身を引いて姉さんの様子をうかがっている。

まさか彼女達を取って食おうとは思ひ出さないんだろうけど、一応僕がみんなのことをかばっておこう。姉さんを野放しにしていたらこの世界が滅亡してしまうかもしれない。って、それが本当ならシールドより凶悪だな。

「姉さん、そんな脅迫みたいな頼み方はちょっと……」

「ふむ、それはそうだな。これは失礼した」

「あ、いえ、別に」

突然姉さんが頭を下げるものだから、三人も同じように頭を下げてしまう。ううむ、みんな腰が低くて頼もしい。

と、姉さんはいきなり声を上げて三人を見渡しながらかう言った。

「……それじゃ、弟とキスしたい奴は手を突き上げろ！」

「「おおー！」」

と、詠美さんと真美さんは真っ先に反応するものの。

「「おお……」」

と、浩一さんと由紀さんはそんな二人の反応を見て落胆していた。うーむ、やっぱり反応は二つに分かれちゃっているみたい。浩一さんが手を挙げないのは当然だけど、由紀さんもキスに否定的なのはちょっと傷ついちゃうなあ。

だけど、詠美さんと真美さんは右腕を精一杯空へ向かって突き上げていた。二人で腕の高さを競っていて微笑ましい。しまいには二人でピョンピョンとびはね初めて……って、だから真美さんはスカートだからパンチラに気をつけなさいってば。

「よし、それじゃ手を挙げた二人は前に並べ」

「は、はい！」

姉さんの指示に従って、詠美さんと真美さんは綺麗に並んだ。

「あの、何を？」

「まずは訓練せねばなるまい。対シールド戦を想定し、戦闘訓練を重ねなければ」

「訓練？」

訓練とはまた物騒な単語を持ち出してきたものだ。姉さんが口にすれば、どんな言葉も不穏な空気をまとうんだけど、その中でも特に訓練なんていわれた日には、鬼教官となった姉さんが僕らをスパルタで厳しく指導する姿しか想像できないよ。

何度も言うようだけど、シールドの前に姉さんに殺されてしまいかねない。

「た、たとえば？」

僕は若干引き気味で聞き返していた。姉さんはそんな僕の露骨な反応すら目に入っていないようで、乗り気でこんなことをうきうきしながら語る。

「もちろん個人の身体能力を上げるべく、基礎体力向上のためにも特別メニューを組ませてもらうが……それ以上に、弟との連携を特訓してもらいたいな」

「サトウーさんとの連携？」

今度は詠美さんが僕よりも早く聞き返した。連携というと難しく考えがちだけど、要するに魔法に慣れるってことなんだろうなあ。

つまり……。

「キス？」

ってことだろう。うーん、たとえば、いかに素早く的確なキスができるかとか？

「そうだな。シールドを発見してのキスから戦闘体勢に上手く移れるかどうかが問題だ。なにしろ、魔法は三分間しか使用できないのだから」

「だよね……。よし、じゃあ訓練としてたくさんキスしなくっちゃ！」

と、僕は真面目に気合を入れてみた。

「たくさん……キス……」

ところが、詠美さんの様子がおかしい。顔を真っ赤にして腰を左右にくねらせているのだ。その横の真美さんも遠い目をして空を見上げている。二人ともどうしたのかな？

「さて、それじゃ早速——」

と姉さんが途中まで言いかけると、今度はすっかりあわてた様子で浩一さんが割って入ってきた。

「ま、ま、まあ、その訓練は今後の課題ということでもいいじゃないですか！ ほら、実戦が一番だって考え方もありますことですし！」
「私もそう思います！」

そう言って由紀さんまでも浩一さんをフォローするので、仕切り屋の姉さんも考え直さざるを得なかったみたいだ。どっしりと腕を組みながら思案している。

「ふむ、そうだな。十八男の言うことも一理ある。それでは、訓練より先に今後のことを決めておこう。つまりシールド討伐の具体的な作戦についてなのだが……よし、とりあえず当分は詠美と真美による二人の交代制でいこう」

「確かに、僕は連続して同じ人を相手に魔法が使えないから、シールドと戦うことに交代して協力してくれるのが一番だとは思っけど」
「というわけで、頼めるか？」

殊勝にも姉さんが二人に向かって深々と頭を下げた。

「ですが、明日からは私たちも学校があるので……」

ところが、とても申し訳なさそうに詠美さんがそう答える。詠美さんが口にした学校というものが、この世界における教育機関であることくらい僕だって知っている。おそらく詠美さんの年齢だと高校生くらいだろう。そうなると、なかなか自由な時間もないのかも。悩ましい問題を前に、姉さんがあごに右手を添えながら尋ねる。

「二人は学校、か。もしものときにどうする気だ？」

確かに、詠美さんや真美さんが学校に行っている間にシールドを発見した場合、僕は魔法が使えなくて敵を退治することができない。

基本的に学校という場所は部外者立ち入り禁止だからね。

「よし。僕ね、今からがんばって教員免許を取得してみるよ!」

「——という妄言は置いておいて、どうすべきか……」

これは名案だと思ったのに、姉さんには僕の本気が伝わらなかったらしい。そうか、言い方に勢いが足りなかったのかな。

「よーっし。僕ね、ちよつと編入試験受けてくる!」

「——という冗談は無視するとして、どうすべきか……」

また無視ですか。本当に姉さんは容赦がないね。だけど、僕だつてここできじけるような男じゃないのだ。

「いよおーっし! こうなったら積もつ、学校に裏金をたーんと積もう!」

「——という戯言は聞き流して、どうすべきか……」

「……うん、もういいです」

折れた。僕、心がポキッと折れた。何も口出しせずに黙っていようと思いました。

「いっそのこと私が……」

と、姉さんが何か言いかけたのだけど。

ピコーン、ピコーン! という謎の電子音が鳴り響いた。しかも僕の手元から。

「な、何事だ?」

突然の出来事に僕は周囲を警戒する。まさか敵襲かと思い、身を低くして声を潜めるのだけど……。

「ばか者、リーダーだ。弟、早く確認しろ」

「ああ、そっか」

姉さんの冷たい指摘で自分がリーダーを手に行っていることを思い出した。そこで、慌てて手元のリーダーを確認してみる。

「おお、早速シェードの反応みたいだね。よーし、とにかく行ってみよう!」

そして真っ先にリーダーの反応する方向へと駆け出した僕。最先端を走る。まさにリーダーっばい。

「……って、みんなもついてきてよ！」

だけど振り返ったときにみんなが呆然と見送っていたことに気がつくのと、さすがの僕も泣き出しそうになっちゃったけどね。

はは、ずっと空回りしている気がするや……。

12・リーダー

リーダーの反応があった場所にいたのは、実体化したばかりの獣型シェードだった。周囲には繁々と草原が広がっている。そんな中に、一目でそうだとわかるほど大きな図体をしているシェードは、その熊のような雄雄しい姿を覗かせていた。

「あ、あれがお前らの言うシェードって奴か？」

初めてシェードの実物を目にした浩一さんは動揺した様子を隠さない。本人は怖がっているところを悪いけど、意外に臆病な浩一さんには親近感が湧いた。

「うん、そうだよ。このまま放置していたら実体化がさらに進んでより強大になっていつちゃうから、来て早速だけど戦わなくっちゃ！」

僕はそして視線を詠美さんと真美さんの二人に向ける。魔法の使用を求めるためだ。

「順番からいくと、次は私の番ですよ！　ね？」

そう言ってちょこんと一歩前に飛び出したのは真美さんだ。確か、昨日は詠美さんに魔法を使ってシェードに止めを刺したので、順番的には真美さんに魔法を使うべきなのだろう。本人も協力的でありがたいことだ。

「うん、じゃあ——」

と、僕はなるべく優しくキスするために真美さんの肩へ両手を添えて、そつと唇を近づけていったのだけだ。

「ま、待った！」

由紀さんが僕らの間に右手を差し出してキスを寸前で邪魔してしまふ。

突然のことで僕は止まりきれずにうつかり由紀さんの手の甲にキスしてしまった。ちよつと気まずくなりつつ由紀さんに顔を向ける。「なに？」

由紀さんはそつと右手を引つ込めて優しく左手で包み込みながら、慎重に言葉を選ぶようにこう言った。

「あのさ、サトウーがシェードを倒さなきゃならないのはわかるし、魔法が女性相手じゃないと使えないのもわかった。でもさ、本当にキスじゃないといけないの？」

「……ポ」

「ちよつと！ どうしてそこで頬を赤く染めるのよ！」

由紀さんに左手で滅茶苦茶激しく肩をゆすられてしまう。

「だって、キスじゃなければ……その、ねえ？」

キス以上に男女ができることといったら……。く、口にできるわけがない。

「あーもー！ わかつたから照れるな気持ち悪い！」

気持ち悪いってへこむなあ。やっぱり僕、由紀さんには嫌われてるんだろうか。

よくわからないけれど、それきり由紀さんは僕への抵抗を諦めてくれたみたいで、くるつと僕らに背を向けてしまった。怒っているのか拗ねているのか、僕には判断が難しいので保留。

「じゃあ真美さん、仕切りなおして……いくよ？」

「はい、先輩」

そして今度こそ僕と真美さんは、二人でチュツと控えめなキスをした。

途端、僕の体は輝く粒子となって真美さんの体に浸透する。そうやって体の隅々まで僕の意識が満ちていくと、真美さんの体は僕の支配下におさまってしまう。

「……よし、成功だ。うーん、やっぱり女性の体っていいよね！」

先ほどは浩一さんとのキスで失敗しているので、なおさら感慨深いや。

『先輩に支配されているこの感覚……ああ、ゾクゾクしちゃいます』

「え？」

『な、なんでもないです！ ないです！』

心の内側で真美さんが僕に向かって何か言ったような気がするけど、本人がこれほど否定するのだから僕の勘違いかもしれない。

とにかく、今はシェードである。魔法は三分間しか時間に猶予がないのだから、ほかの事にかまけていてはいけない。

「よし、いっくよー!」

『もちろんですとも!』

真美さんの体はとても小柄なので、ちょっと身がかめると背の高い草に隠れてしまう。それがシェードには効果的みたいで、僕は敵の隙を上手につくことができた。

『草が隠してくれるので、パンチラも気にしないですみますね!』

「それもそうだね、やったあ!」

『って、だからってジャンプしないでくださいよ! さすがにスカートの大きいくめくれ上がるほどジャンプされちゃうと草とか関係なく恥ずかしいので!』

「おっと、ごめんごめん」

それにしてもスカートってスーッと快感。なんか意味もなく自分の手でスカートの裾を握ってヒラヒラさせたくなくなる。

いやあ、女性の体ってずるいよね。なんか立っているだけでも可愛いじゃん。

だから僕なんか、こう、色々ポーズを取ってこの体をいかしたくなってしまう。折角真美さんに憑依できたのだから、きゃぴきゃぴとはしゃいでみたい。

「ぐわっしやああああ!」

「って、わわ! すっかりシェードのことを忘れていた!」

『馬鹿ですか! ですよ!』

おぞましい雄たけびを上げながら襲ってくる熊のようなシェードの攻撃を危機一髪でかわす。真美さんの体だとフットワークも軽やかなので、僕にも難なく敵の攻撃を読み取ることが出来た。

「よし、今度はこっちの番だぜ!」

『うひゃあ、体が光っていきますね!』

「そう、これが魔法だから！ 名づけて魔法パンチだ！」

口では魔法とか言いながら、結局やることは肉弾戦なので悲しい。本当、もっと派手な魔法が使えたらよかったのにね。

『サトウー先輩、格好いいです！ さっすが私の王子様！』

「お、王子様？」

『——はっ！ しまいました！ どうか今の言葉は聞かなかったことに！』

「う、うん」

結局何が王子様なのかわからずじまいだったけど、真美さんは恥ずかしがって教えてくれないので、ここはやはりシェードに集中だ。僕は小柄な真美さんの体で草原を縦横無尽に駆け巡りながら、シェードの無防備な部分を狙って容赦なく攻撃を加えていく。シェードは大きな体をもてあまし、ちょこまかと動く僕らの姿を捉えることすらできないらしく、もはや一方的な戦闘である。

そして時間にしておよそ二分が過ぎたころ、戦いは僕らのペースのまま終了した。

なんと、敵の反撃によるダメージがゼロで終了してしまった。パーフェクトゲームだ。

「あ、元に戻りましたね」

僕らによる魔法の攻撃を受けてシェードが消滅するのとはほぼ同時に、僕たちもお互いの元の体に戻った。

「ふむ、またしても僕らの圧勝で幕を閉じてしまった。三分も過ぎないうちにか」

実にあっけない。やばいな、このままじゃ戦闘描写が面白くない……。

「だからそれでいいんです！ なんですか、その苦戦を望むような言い草は！」

僕が一人で頭を抱えていると、詠美さんが声を荒げて近づいてくる。

「ええ？ だってさ、やっぱりもっと熱くなる展開が欲しいじゃない

い」

こうして僕は魔法使いとしてこの世界に来たのだから、ここはぜひとも手に汗握る、白熱の戦闘を経験してみたいものだ。ここぞというときに盛り上がらないと、地味で退屈だよな。

次回までに何か必殺技でも考えてこようかな？

「サ、サ、サ、サトウー。一体なんなんだよ、今の……」

詠美さんのすぐ後ろでは浩一さんが腰を抜かしていた。地面に尻餅をついているので、生い茂った草に半分埋もれてしまっていて可笑しい。

僕が魔法を使う場面を見たのは初めてだろうから、驚いているのかも。それにしてもその場でひっくり返ってしまうなんて、さすがに驚きすぎだ。

「やっと理解してくれた？ うん、これが僕の魔法なんだ」

浩一さんの大げさな反応が嬉しいから、僕は胸を張って声を張って大威張りで説明してあげた。論より証拠、百聞は一見にしかず。

「なんてこった……てつきり冗談半分だとばかり……」

「まあ、半分だけでも信じてくれていたのなら大丈夫」

半信半疑だったとしても、ゼロよりはましだからね。

「だ、だが、魔法が本当ならお前とエイミイのキスを認めるしかないんじゃないか！」

そう叫び終わると、浩一さんは絶望に膝をついてうずくまった。

肩を震わせて、泣いているようにも見える。

「お兄ちゃん……」

そんな浩一さんのそばへ詠美さんが歩み寄る。そしてそつと兄の背中へ手のひらを乗せると、励ますようにさすっていた。

よくわからないけど、あれが兄妹愛ってやつか……。邪魔しないでおこう。

ということ、僕は由紀さんに向き直る。

「えーっと、由紀さんは？ その、真美さんが僕に協力してくれることについて、由紀さんはどう思う？」

「く……」

見ると、由紀さんは歯を食いしばって悔しそうな表情を浮かべていた。右手を胸元でギュツと握り締めて、なにやら悶絶している。

「どうしたの？」

恐る恐る僕が問いかけると、由紀さんは苦悩しつつ答える。

「……私は反対だけど、反対できないもの。サトウーには助けてもらったし、なにより、姉として妹の恋路を邪魔するわけにはいかなから」

「そ、そっか。ありがとう」

要するに由紀さんも賛成ということでもいいのかな？

ちよつと恨みがましく睨まれているけれど、そう信じよう。

ひとまずみんなが落ち着くと、姉さんが僕にこう言ってきた。

「まあ、弟。これからも気を抜くなよ？」

「うん、もちろんさ！」

強くうなずくと、やつとみんなも笑顔に。

——そして、いよいよ本格的にシェードとの戦いが始まるのだった。

13・慢心

それから二週間、三日に一度くらいのペースでシェードを討伐していった僕ら。たとえ二人が学校にいる日中にシェードの反応を確認しても、放課後を待ってから現場に向かつて也十分間に合うことがわかって以来、まるで焦る必要を感じていない。

ピンチと呼ぶほどの失敗もなく、僕たちは無難に勝利を重ねていった。

……ところが僕はいつの間にか慢心を、つまり油断していたらしい。

「さあ、真美さん。僕とキスを！」

「はい、先輩！」

いつものようにキスをして、輝く魔法を使ってシェードと戦う。

すぐ背後には念のために同行してくれた詠美さんを残し、真美さんの体に憑依した僕。

そこは、町の中にある小さな雑木林。

それは、恐れるほどでもない人型シェード。

僕らが負ける可能性はおろか、苦戦するはずもないとたった一瞬で判断していた。

『サトウ先輩、私は今日の下着に控えめのものを履いてきましたので、パンチラも気にしないで大丈夫です！』

「うん、その前にスカートをはかなければいいんじゃないかな？」

『なるほど。ですが学校の制服はスカートなので、わざわざ着替えるのは……』

「だったらほら、スカートの下にブルマを履けばいいんじゃないかな？　むしろブルマ姿で戦えばいいんじゃないかな？　あ、もちろん上は制服のままで」

『私の学校はブルマじゃありませんから！』

「そ、そんなあ？　僕の事前調査によると、この世界の女学生はブ

ルマ姿だと相場が決まっているはずなのに……」

『何を調査したんですか！ 何を！』

なにをって、それはもちろん文化的資料だったんだけど。その資料の中では、何故か女子だけブルマ姿だったんだよね。男子は普通にハーフパンツなのに。

ところで話は変わるけど、意外と赤白帽子って可愛いよね。この際だから熱中症対策として、中高生も赤白帽子を被るようにしたらいいのに。ちなみに僕は赤組が好き。あれかな、ちよっと情熱的に見えるからかな？

「ちよつとサトウーさん、キスをしてからもう三十秒くらい過ぎちゃいましたよ！ それからこれだけは言っておきます。真美と何をしゃべっているのかはわかりませんが、あなたの独り言は激しく変態チックなんです！」

と、背後から詠美さんの怒声が。いくらなんでも変態チックとは手厳しいけど、確かにこのまま無駄話で三分を浪費してしまうのは馬鹿馬鹿しい。そろそろ攻撃を始めよう。

ここ最近、シールドとの戦いは要領がよくなって決着にかかる時間も短縮傾向にある。魔法が持続するのはたった三分間だけだけど、上手くいけば二分以内に決着がついてしまうこともあるのだ。

だから、間違いなく僕は調子に乗っていた。憑依しているものが他人の体だということも忘れて、慎重に戦うという基本を忘れていた。

目の前には、僕らの様子をうかがっている人型のシールド。こちらと木々の間から、その姿が見える。ひよつとしたら僕を挑発しているのかもしれない。

「よーし、行くよ、真美さん！」

『お任せします！』

いつものように意識を集中させると、両腕が光に包まれる。順調。いつものようにシールドの姿を捉えると、肉弾戦へもちこむために駆け出す。順調。

そのまま敵の目前まで一気に距離をつめると、右腕で殴りかかる。まだ順調。

シールドは黒々と光る魔法を使用し、両手で僕の拳を受け止める。多少の動揺。

続けざまに左腕を振るい、シールドの顔を狙うも飛び退いてかわされる。失敗。

追いかけようと踏み出したところで、ツタのようなものに足を取られつまづく。動揺。

『大丈夫ですか？』

「だ、大丈夫。それよりシールドは？」

すっかり足元に気を取られていて、シールドを見失ってしまったらしい。とっさに左右を見渡すものの、全く敵の姿が見当たらなかった。

僕は、がらにもなく焦った。なんだか嫌な予感がする。

『先輩、上です！ 上！』

「う、上？」

真美さんの声に従って顔を上に向けると、そこには木の枝にしがみついたシールドの姿があった。同じ木登り家として、真美さんには勘付くものがあつたのだろうか。

魔法で僕らは一体化しているため、真美さんと僕は視界も共有しているはずなのだ。それでもシールドが頭上にいると気がついたのは、音とか気配とか、そういう部分で僕より注意力が高かったからだろう。

と、そんなことよりシールドである。木の上？

「ギッシャアア！」

「うわあああ！」

『あわわわわ！』

いきなりシールドが僕らに向かって飛び掛ってきた。いくら非力な人型シールドとはいえ、落下のスピードとともに全体重を乗せてくると、かなりのダメージがある。

突然のことで飛び退くこともできなかつたため、せめてもの防御としてシェードの体を受け止めるべく両手を出す。ちなみに、両手は魔法で輝いている。これぞ、飛んで火にいる夏の虫作戦だ。

「やった！」

そして作戦通り飛び掛つてきたシェードを両手で受け止めることに成功する。真美さんの小柄の体では、ちょっとだけシェードとの体格差が気になったけれど、そこは大丈夫だったみたいだ。これも魔法の力のおかげかな？

『つて、あらら？　ありやりやりや！』

「ん？」

輝く魔法でシェードを捕らえたと思つて安堵していると、なにやら真美さんが騒ぎ出した。何かと思つてよく見てみると、腕の中でシェードがもそもそと抵抗している。

「あはは、無駄無駄無駄！　逃げられないよ〜？」

なにしろ魔法の力は圧倒的だからね。

『ち、違います！　サトウ先輩、縛られてます！』

「縛られているって？」

何が？　と聞く前に、その言葉の意味がわかった。

「う、動けな……」

なんと、シェードが僕の体をロープで縛っているのだ。

捨て身覚悟の反抗には敵ながら感心するけれど、あいにくもう僕の魔法はシェードの体を蝕んでいる。今更僕の動きを封じたところで、シェードが消え去ってしまうのも時間の問題だろう。

だから僕は、ロープで体を縛られつつも、逆に両手でしっかりとシェードも抱きしめたまま、絶対に離さない。

「あ、危ない！」

そう叫んだのは、僕でも真美さんでもなく、遠くはなれた詠美さんだった。

「な、何が？」

驚いて振り返った僕の目に、驚くべき事態が映った。

『あわわわわ!』

「なんだってー!」

なんと、巨木がこちらに向かって倒れ掛かってきていたのだ。

どうやらもう一体、獣型のシールドが木陰に隠れていたらしく、そいつが僕らに向かって木を切り倒したらしい。二体のシールドが僕らを罠にはめたのか？

「駄目だ、間に合わない!」

倒れ掛かってくる木から避けようと体をねじってみるものの、人型シールドによってロープで身を縛られていて、僕は逃げ出すことができない。

魔法は対シールド戦に特化した能力だから、巨木を吹き飛ばすような力はない。

くそ、ここにきて万事休すか？ 観念した僕は、目を閉じて身構えた。

「きゃああ!」

衝突の瞬間、全身に鋭い痛みが襲うだろうと覚悟していた僕は、不思議と事なきを得ていた。

じゃあ、この叫び声は？ もしかして真美さん？

「——あ、あれ?」

ようやく周囲の状況が理解できるくらい冷静になると、僕は無傷で立っていた。

どうやら、強い衝撃を受けてしまったせいで真美さんの体への憑依が解けてしまったらしい。僕と真美さんの体は、二人ともお互いの体に戻っていた。

「うつうつ……。くう……」

そんな苦しい声に驚いて目を見張ると、そこには傷ついた真美さんの姿があった。

「ま、真美さん!」

体をロープで縛られた真美さんが、木が倒れた衝撃で怪我した足から血を流しながら、苦悶に顔をゆがめ、地面の上に倒れていたの

だ。

「私は大丈夫です……。だからサトウ先輩、私よりもシェードのことを……」

そんな言葉を、傷ついた真美さんは瞳を涙に潤ませながら僕に言うってくる。木の枝がぶつかってできた太ももの傷の痛みを堪えながら、真美さんは気丈にも大丈夫だと言ってくれている。

だけど僕は、とっさに動けなかった。

だって、馬鹿な僕の失敗で、真美さんが僕の代わりに苦しんでいるんだ。

「う、う……」

真美さんは眉間にしわを寄せ、脂汗を額に滲ませる。

その痛みも、その苦しみも、本来なら僕が背負うべきもののはずだ。

なのに僕は、こうして無傷で立ち尽くしている。

なんて無責任で、なんて卑怯者だろう。シェードを討伐するのは僕の役目だと言っておきながら、詠美さんや真美さんの体を借りてばかりで、ずっと安全圏で戦っていたんだ、僕は。すべての危険を女性に押し付けたままで。

「サトウ先輩、私のことは構わず……」

真美さんのその声に、僕は状況を思い出す。

倒れた巨木に足を挟まれて、体をロープで縛られて、おまけに怪我をしてしまった真美さん。そんな彼女の傍らには、未だにシェードが存在していた。

「キシヤアアア！」

「あ、ああ……」

魔法が使える状態なら人型シェードは雑魚に違いない。けれど、生身の人間にとってそれは、とても太刀打ちできるような敵じゃない。襲われたらひとたまりもない。

僕は、自分の頬をひっぱたくと気合を入れなおした。

「大丈夫？ 真美さん！」

そして真美さんのところへ一刻も早く駆け寄るべく、僕は大きく
一步を踏み出そうとした瞬間、冷静さを取り戻して考え直す。

……違う。シェードを倒すために魔法を使うなら、傷ついた真美
さんを確実に助けるなら、まず向かうべきは詠美さんのところだ！
そう思っただけで走り出し、彼女のそばへとたどり着く前に僕は声も限
りに叫ぶ。

「詠美さん！ 君の体を――」

……貸してくれ、なんて、今の僕に言う資格があるのか？

僕が負うべき苦しみを、今まさに真美さんに背負わせたまま、今
度は詠美さんに背負わせようというつもりなのか？

思わず詠美さんから顔をそらし、僕は立ち止まる。

「――くっ！」

歯を、強く食いしばった。

みんなを救いたいと思うなら、もう僕は、この状況を生身で打破
するしかないじゃないか。たとえ軟弱者で無力でも、だからってみ
んなを巻き込むなんてできないのだから。

もっと早く、ずっと早くに気がつくべきだったんだ。

僕はヒーローでもエージェントでもなく、卑怯な魔法使いだった
つてことに。

「サトウーさん！」

「え？」

ところが、立ち止まっていた僕の名前を呼んでくれる人がいた。

その人は、僕のそばまで息を切らせながら駆け寄ってくると、そ
のまま僕の肩に両手を乗せて、力強くこう言っただけ。

「私に、あなたの力を貸してください！」

一瞬、僕は自分の耳を疑ってしまった。

けれど、すぐに言葉の意味を理解して、涙ながらに聞き返す。

「……僕に、僕に君の力を貸してくれるの？」

「サトウーさん！」

詠美さんが、右手を振り上げた。そのまま僕の頬をビンタするの

かと思つて目を閉じると、そつと優しくその右手が添えられていた。恐る恐る目を開くと、そこには穏やかに微笑みかけてくれる詠美さんがいた。

「貸すんじゃないありません。私たち二人で協力するんですよ」

「あ、……うん」

そしてそのまま、僕は詠美さんから、励まされるようにキスをされた。

女性から励まされるなんて、すごく情けなかったけれど、おかげで力がわいてきた。

絶対に二人を守りたいという決意をしながら、僕は詠美さんとのキスを受け入れた。

14・僕の過ち

詠美さんへの憑依は無事に成功した。

『サトウーさん、急ぎましょう！』

「だね！」

詠美さんは僕の背を押すように励ましてくれた。だから僕も強くなずき返し、気合を入れなおす。

とにかく今は急いで真美さんを助け出して、魔法が使えるこの三分以内にシェードとの決着をつけなければならない。遊んでいる暇はない。

「まずは真美さんのところへ！」

人型シェードはすでに僕の魔法を受けているから、消滅は時間の問題だろうと思う。

けれど、だからといって負傷中の真美さんを人型シェードのそばに放置することはできない。これ以上彼女の身に何かあったら、今度こそ僕は責任をとることができなくなってしまうから。

『気をつけてください！ また獣型シェードが木を倒してきますよ！』

「う、うん！」

詠美さんにまで怪我をさせるわけにはいけない。

僕はピシッと気を引き締めると、初めてにも近いほどの激しい緊張感に包まれた。

……そうか、これが戦うということか。今まではどこか、ずっと遊びの感覚でいたのかもしれない。ちゃんと反省しなければ、僕はみんなに合わせる顔がないよ。

『今です！ 真美のところへ！』

僕の代わりに詠美さんがタイミングを計ってくれる。今の僕は戦うことに自信を失っていたから、こういう助言はとても嬉しい。

「シェードよ、散つれー！」

のどをからすほど大声で叫びながら、真美さんの体をロープで縛り付けている人型シェードのもとへ一直線に突き進む。

両手には、まばゆいほどの魔法の輝き。これが詠美さんの体であるということを忘れずに、僕は一切の隙を見せることなくシェードに飛び掛る。

「グシャアアア！」

今度こそは逃げることも防ぐことも出来ず、シェードは僕の右腕を受けてそのまま地面に沈んだ。どうやら気を失ったらしい。

『ナイスパンチです！』

「ありがとう！ だけど、それより真美さんを助けなくっちゃね！」
『そうしてください！』

人型シェードが魔法を受けて消滅していく姿を視界の隅で確認しながら、僕は急いで真美さんのそばへ駆け寄った。

「真美さん、大丈夫？」

「あ、はい、なんとか……」

そうは言っても、真美さんは足の痛みを我慢しているようだ。相変わらず足の傷口からは血が流れている。本当は今すぐにでも真美さんの手当てに尽力したいところだけど、今は残る獣形シェードの相手が第一だろう。もうあまり時間も残されていないし。

「グルルルル……」

改めて獣型シェードの姿を確認すると、それは巨大なゴリラのような姿をしていた。

そのシェード、今は木々の間をピョンピョンと軽快に動き回っている。どうやら、更なる実体化の時間を稼ぎつつ、距離をとってこちらの様子をうかがっているようだ。

『あと二分くらいしかありませんね。少し急ぎましょう』

「う、うん……」

普段の僕なら、いつもの僕なら、きつと残り二分でも果敢に勝利していたことだろうと思う。臆せず、屈せず、何の考えもなしに敵に突っ込んでいけたからだ。

だけど今の僕は、闇雲に敵へと立ち向かうことができない。

『サトウーさん？』

心の中の詠美さんが、立ち止まる僕に疑念を投げかけてくる。
なぜ戦わないのですか？ と。早くシールドを倒しましょう、と。

「……わかってる。でもね、今はこちらから仕掛けるのも危ないと思うよ。敵の罠かもしれない」

詠美さんにうなずきながら、一方で僕は背筋に冷や汗をかきつつ息を呑んだ。

いつの間にか僕は、自分でも判るくらい臆病になっていた。

詠美さんの両足が、借り物の指先が、僕一人の不安と恐怖によって小刻みに揺れている。力をこめようと思っても、上手く力が入らない。

『ですがサトウーさん、時間がなくなったらかえって危険ですよ？』

「うん、そうなんだけど、ここは慎重にいかないと」

『……わかりました。でも、時間には気をつけてくださいね』

「うん」

再びうなずきこそすれ、僕はやっぱり動き出せなかった。

林の中を縦横無尽に飛び回っている獣形シールドを目で追いながら、一步を踏み出すことができない。追いかけてようと思えばできるはずなのに、足がすくんで動けない。

『……』

もはや言葉にはしないけれど、詠美さんが不安げなのが手に取るようにわかる。安心させてあげられればいいのだけど、僕にはその方法もわからない。

なのに、時間は決して待ってくれない。どうがんばっても魔法は三分間しか続かないのだ。もう動き出さなければ、詠美さんへの憑依が解けて、僕らは無力になってシールドを退治することができなくなってしまう。

急がないと、本当にどうしようもなくなってしまうのだ。

「じゃあ、そろそろ行くよ、詠美さん！」

『お任せします!』

両手を輝かせると、僕はシェードへ向かって大きく一步を踏み出した。

とにかく、相手よりも先にこちらの攻撃を当てることができれば僕らの勝利だ。そこまで難しく考える必要はない。だって、それで今まで成功してきたのだから。

今回も、きっと大丈夫。必要以上に恐れることはないはずだ。

僕の動きを確認したのか、獣形シェードは立ち止まって身構えた。面と向かって反撃でもしてくるつもりなのだろうか。

でも、シェードの攻撃なら魔法で対処できるから大丈夫。どんなに鋭い爪も、牙も、魔法で輝いている腕で受け止めれば大丈夫。

そう思っただけで突っ込んでいく僕の目に、映った敵の姿はどこか違和感があった。

仁王立ちしているものの、両腕を、後ろにひねって隠している。

僕の魔法を受け止めようとしているのなら、両腕は前に出すべきだろうと思いつつ、それでも僕は止まらずに走りこんで――。

「グガアア!」

――敵のフルスイングを受けた。

「うわあああ!」

ゴリラのような姿をしたシェードは、大きな木の枝を振りぬき、僕を吹き飛ばしてしまったのだ。いくら魔法の力でも、物理的な衝撃を防ぐことまではできなかった。

今まで戦ってきた獣形のシェードはずっと四足歩行の敵だったから、道具を使って攻撃してくることはなかった。だから、今回のように木の枝を使って攻撃してくるなんて、予想外だったんだ。

「くっく……」

その声が、心の中から聞こえてこなかったことに僕は驚いた。

「え、詠美さん?」

いつの間にか、詠美さんへの憑依が解けてしまっていたらしい。もちろん、それは僕がシェードの攻撃によって吹き飛ばされてし

まったときだろう。

「だ、大丈夫ですよ、サトウーさん。私は別に、けほっ、木の枝で思い切りお腹を、うう、叩きつけられただけですから……っう」

気丈に笑いながらも、その顔にはじつとりと脂汗が浮かんでいる。とてもじゃないが、決して大丈夫というわけではないだろう。馬鹿な僕に気を遣って、詠美さんは平気な振りをしているだけなんだ。

それも当たり前だ。普通、たとえ男でも、自分のお腹を棒で叩かれて大丈夫な人間はいない。その痛みは、苦しみは、簡単に押さえ込める程度のものじゃないはずなんだ。

また、だ。また僕は、自分で負うべき失敗を女性に押し付けてしまった。

「ご、ごめ……」

謝りたいのに、しっかり声がのどから出てくれなくて、僕は言葉の途中で情けなく尻餅をついてしまった。思うように足に力が入らなくて、バランスを崩してしまったのだ。

「い、いえ、私は大丈夫です。そ、それより、真美を……」

苦しいはずなのに、詠美さんは自分よりも真美さんの心配をしていた。

いや、きっと僕がさせてしまっているのだろう。僕が頼りないからだ。

「だけど……」

ここに来て、僕の頭はすっかり真っ白になってしまった。

一体どうしたらいいのか、全く頭が回らない。何一つ打開策が思い浮かばない。

「グギヤアアア！」

そんな時、僕の背後から叫び声が響いた。

「シエ、シエード！」

皮肉だけど、シエードのおかげで僕は我に返ることができた。そういえば、まだシエードは生き残っているんだ。いつ襲い掛かってきてもおかしくない。

「真美さん！」

無意識のうちに、僕はとっさに真美さんのほうへと顔を向けていた。

それは真美さんを心配してではないのかもしれない。ただ打算的に、詠美さんの次は魔法が使える相手として真美さんしかいないと思っただけに過ぎないからかもしれない。

「あ、はい……。いいですよ、魔法、ですよね？」

けれど真美さんも詠美さんと同じように、自分の痛みも苦しみも耐え忍んで、僕には笑顔で答えてくれた。答えさせてしまっていた。真美さんは、震える手で、自分の傷口を恐る恐る押さえ込んでいたのだ。流れ出す血が、止まらない血が、彼女を不安にさせているはずなのに、それを懸命に顔には出さないように取り繕いながら、僕を信じて笑って見せてくれるのだ。

「最悪だ……。最低だよ、僕……」

そんな彼女達に、僕が魔法を使えるわけがなかった。

そんな彼女達の傷ついた体を、これ以上僕が酷使するわけにはいかなかった。

使命としてのシールド退治と、詠美さんと真美さんの身の安全なら、僕は迷わずに決断して選び取るしかなかった。

無力な自分が情けないと思いつつ、彼女達の期待に応えられないことが悔しいと思いつつ、シールドを倒せずに放置することが危険だと思いつつ、それでも僕はこうやって切り出すことしかできなかった。

「……ごめん、二人とも。今はここから逃げよう！」

「え？ サトウーさん？」

「で、でも……」

「いいから、早く！」

詠美さんと真美さんは、同じように困惑した表情を僕に見せた。けど、僕は現実逃避と変らない理由で二人の顔から目をそらす。そのまま有無を言わず、僕は右手で詠美さんと、左手で真美さ

んと手を繋いでしまう。

そうして僕は怪我を負った二人の手を強引に引きながら、わき目も振らず、涙ながらに走って逃げ出すのだった。

二人は、途中から全くの無言だった。

無事に逃げ出せたことだけが、僕にとっては救いだった。

15・みんなと

他に行くべき場所が思い浮かばなかった僕は、ひとまず急いで詠美さんの家に向かうことにした。もちろん詠美さんと真美さんの手はしっかりと繋いだままだ。

無事にシェードのいた林を抜けたところには、二人の傷や痛みを考慮して僕は走るペースを落としていた。真美さんの足の傷口には、逃げる途中で止血のために詠美さんがハンカチを結んでくれていた。詠美さんと真美さんは、家にたどり着くまで口を開かずについてきてくれた。

そして、なんとか無事に詠美さんの家の前までやって来た僕ら。そこには、僕らを待っていたのか偶然なのか、浩一さんの姿があった。

「……とにかく入れよ」

「うん、ありがとう」

僕は申し訳なささと恥ずかしさのせいで力なくうなずくと、詠美さんと真美さんの手を引いて家の中に入った。

それから真つ直ぐ浩一さんの部屋に向かう。途中で先に帰っていた姉さんとも顔を合わせたので、僕らと一緒に来てもらった。

「とにかく、まずは真美の怪我の治療をしましょう」

「あ、そうだね。姉さん、お願いしていい？ 女性同士のほうがいいと思うから」

「仕方ないな、弟。私に任せろ」

そう言うと、姉さんは真美さんを連れて部屋を出て行った。真美さんは足の怪我なので、一度水で綺麗に洗うためにも風呂場で傷の治療をしてくるらしい。

そうして姉さんが真美さんの怪我の治療を始めてくれたので、僕は部屋に残った詠美さんに向き直る。

「どうしました？」

すると詠美さんは自然な笑顔で僕を見返してくれた。どうやらもうシェードの攻撃を受けてしまったお腹が痛むということもないらしく、僕はひとまず安心する。

「えっとね、今から由紀さんと呼ぶことってできるかな？」

「ここにですか？」

「うん、できれば今すぐに。その、みんなに話したいことがあるんだ」

「わかりました。今から電話してみます。そんなに家も離れていないので、特に用事がなければきつとすぐに来てくれると思いますよ」
「だといいけど……」

それきり僕は目を閉じて、うなだれてしまう。顔を上げられなかったのは、詠美さんと目を合わせることができなかったからだろう。数分間、僕らは沈黙の中に佇んでいた。浩一さんも詠美さんも、気を遣ってくれたのか、自分から口を開こうとはしなかった。

何度も何度も、僕は二人に何かを言おうと思ったけれど、ついに口を開くことができなかった。

ただ無意味に時間は流れ、やがて姉さんと真美さんが部屋に戻ってくる。

「……」

けれど、足に包帯を巻いてきた真美さんはおろか、何故か姉さんも空気を読んで無言を貫き通した。そのせいか、より一層部屋の空気が重苦しくなってしまう。

誰もが気まづくなっていたところに、まるで救いのように玄関の呼び鈴がなった。

「……なんか重いね」

それは由紀さんで、詠美さんに案内されて部屋にまでやってくると、いきなりそんなことを口にした。

たぶん、みんなの雰囲気のことを言っているのだろう。

「うん、ごめん」

だから僕は、頭を下げて謝った。

「んーと、どうしてサトウーさんが謝るの？　というより、まずは誰か状況を説明してくれない？」

「俺もさ……たぶん、サトウーから事情を聞きたくてここにいるんだ。だから、説明はサトウーがしてくれるんだと思う」

そう言つて、浩一さんは僕に期待のまなざしを向けた。説明を求めているのだろう。

もちろん、僕もそのつもりだ。ただ、説明というよりは、謝罪と言うべきかも知れないけれど。

「うん、僕、みんなに言わなくちゃいけないことがあるんだ。ただね、その前にこれだけはちゃんと謝ろうと思う」

「なんだよ？」

みんなの視線が僕に集まる。緊張するけれど、ここで逃げ出しちゃいけない。

「――僕のせいで、僕の失敗のせいで、詠美さんと真美さんの二人を危ない目にあわせてしまったんだ。本当にごめん！」

「危ない目？　おい、どういうことだよ？」

浩一さんが声を荒げて僕に詰め寄ってくる。その目にはわずかに怒りの火がともっているようだった。

先ほどまでは状況が飲み込めず一歩引いていた由紀さんも、浩一さんの反応に合わせるように身を乗り出してきた。

「ご、ごめん！　実は、戦いの最中に僕のミスで二人に怪我をさせちゃつて。おまけに、シェードの退治には失敗しちゃったし……」

真美さんには足の怪我をさせてしまふし、詠美さんには敵の攻撃をもろに受けさせてしまつたし、それなのに僕だけは無傷ですんでしまつたし。

「おいおい、サトウー！　ちゃんと説明しろよ馬鹿やろう！　お前の話が正しいのなら、確か魔法が使えるのならシェード退治なんて余裕じゃなかったのか！　エイミィや真美はあくまで協力するだけで、お前の危険を代わりに引き受けるって話じゃないだろ！」

「う、うん！　そのつもりだったんだ！」

すごい勢いの浩一さんに僕は胸倉を掴まれてしまう。

もはや僕は謝ることしかできないけど、言葉で謝っただけで許されるとは思っていないから、このまま顔を殴られることも覚悟して目を閉じた。

「そのつもりだったって、でもこうして真美が怪我しちゃったんでしょ？　ねえ、一体どうしてくれるの？　どうやって責任を取るつもり？」

そして浩一さんとは対照的に、由紀さんは氷のように冷たい口調で僕に迫ってくる。

結果、二人に囲まれた僕はたじたじになって何も言い返すことができなくなってしまった。言い訳も、謝罪も、すべてを飲み込んで口を閉ざす。

ああ、これで僕もお仕舞いだろう。そう思ったときだった。

「待つて、サトウーさんに悪気はないの！」

それは、詠美さんの澄んだ声だった。

「そ、そうですよ。そもそも、サトウー先輩は私たちのために戦っているわけですし」

そしてそれは、真美さんの力強い声だった。

「二人とも……、ありがとう」

二人のそんな言葉が、今の僕には何よりもありがたい救いだった。けれど、そんな二人のやさしい言葉こそ、妹の身を心配する浩一さんと由紀さんには不安でならなかったのだろう。

「何を言っているんだ、エイミィ」

「そうよ。魔法を使うサトウーにも守れないんなら、もうあなた達を守るのは私たちくらいなモンでしょ！　このまま危険な目にあわせ続けるわけにはいかないのよ」

確かに、それは由紀さんの言うとおりだった。

これからのシェードとの戦いにおいて、危険を押し付けるわけにはいかないのだから。

「……ごめん。本当にごめん。僕、これから他の道を探すよ。短い

間違ったけれど、こんな僕に力を貸してくれてありがとう」

「……」

みんな黙ったままうつむいて、僕の別れ言葉には誰も答えてくれなかった。

悲しいけれど、これがみんなの答えなのかもしれない。円満な別れにならなくて、一方的に迷惑をかけたばかりでさよならになるなんて、悔しくて辛いけれど、すべては僕の責任なのだからしかたがないんだ。

「さようなら」

流れ出そうな涙を堪えて、僕は部屋の扉に手をかけた。

ところが、僕は意外な人物から呼び止められた。姉さんである。

「待て、弟。そして、みんな。可能なら、私の話を聞いてくれ」

そう言うと、姉さんはみんなに頭を下げた。あの姉さんが、深々と頭を下げた。

まさか、僕のために？ 僕は驚いて立ち止まっていた。

「サトウーのお姉さん？ わかりました。聞きますよ」

浩一さんがそう言ったのをきっかけに、みんなが姉さんに顔を向けた。

姉さんはそれから一呼吸置くと、ゆっくりと語り始めた。

「今回の件に関しては、弟に責任があることは認める。だが、できればどうか見捨てないでやってほしい」

「見捨てるっていうか……。いや、なにもそこまで……」

いつになく真剣な様子の姉さんを前にすると、浩一さんにも先ほどまでの勢いはなくなってしまった。由紀さんも、静かに話を聞く姿勢に入っている。

「そもそも、私たちの故郷にとって、この地球をシェードの危険から助ける予定はなかったんだ」

「え？」

「私たちの故郷では異世界旅行が一般化していることは説明したと思うのだが、それはつまり、星の数ほどの異世界を発見したという

ことでもあるんだ。正直に言うと、その世界の中には、発展して栄えている世界、この地球と同じくらいの文明レベルの世界、そしてまさに滅亡の危機にある世界など、多くの世界がある。そのたくさんの世界で、私たちの異世界旅行の影響を受ける世界もまた、数え切れないほど存在する」

「あ、ああ……」

少し早口で説明する姉さんに、みんなはうなづくことしかできない。

それでも構わずに、姉さんは説明を続ける。

「私たちの母国の政府も、最初のころは異世界におけるシエードの討伐に本腰を入れていた。ところが、ある時点で悟ってしまったんだ。すべてを救うのは、不可能だと。私たちには、手に負えないと。新しい異世界間のルートを構築する際には、それに伴って別の世界がシエードの犠牲になってしまふのは仕方がないことだと、割り切ってしまったんだ」

「そ、そんな……。そんなの、無責任じゃないか」

その言葉が、僕らには重く突き刺さる。

この世界の人々にしてみれば、シエードなんて、完全に僕らの世界の行いによって出現するようになった脅威だから、とぼつちりに他ならないのだ。

「ああ、そうだ。君の言うとおりだ。しかし、いや、だからこそ弟は、志願してこの世界に来たんだ。誰にも命令されることなく、自分からこの世界を救うためにシエードと戦うことを決意して来たんだ。……そのことを、頼む。どうか理解してやってくれ」

「え？ おい、サトゥー、それは本当か？」

姉さんの説明を聞き終えた浩一さんが、意外そうな顔をして僕に尋ねてきた。

「確かにそれは本当だけど、ちょっと違うんだ。僕はこの世界を守りたいって気持ちももちろんあるけれど、もともと僕がこの世界に来たのは、自分のためだったんだ。弱くて情けない自分が、ちゃん

と役に立つ人間だつてことを、みんなに証明したかっただけなんだ。一人でいきがっていただけだよ、僕は」

だから、全然褒められたことじゃない。胸を張れることじゃない。所詮、僕は自己満足のためにみんなを、この状況を利用しようとしただけだったのだから。むしろ、ずっと英雄気取りで浮かれていたのだから、文句を言われたって仕方がないくらいなんだ。

「そうだったのか……」

浩一さんは、そう言うと考え込むように視線を床に落とした。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん？ どうしたんだ、エイミィ？」

「あのね、もうこれはサトウーさんだけの問題じゃなくて、私たちの問題だと思うの。こうして実際に被害が出た以上、なおさら放っておくことはできないよ。だって、関係のない人がシェードに襲われるかもしれないんだよ？」

「ん、まあ……」

何かを言いかけて、浩一さんは深くため息をついた。

そして自分の膝をパチンと叩くと、すっきりした明るい表情をして口を開く。

「……んだよ。はじめからそう言ってくればよかったんだ」

「浩一さん？」

すっかり様子の変わった浩一さんに、僕は恐る恐る目を向ける。

「よっしゃ！ サトウー、シェードのくそやるうにリベンジに行くぞー！」

「え？ え？ ええ？ ええつと、まさか今から？」

何かなにやら理解できない僕は、浩一さんの勢いに翻弄されてしまふ。

戸惑っている僕に気が付いてくれたのか、浩一さんは照れくさそうにこう言った。

「俺、やっと今わかったんだ。この中で一番恥ずかしいのは、他でもない俺だったんだって。だから、俺はみんなに頭を下げるよ。…

…頼む、サトウ。この世界を守るために力を貸してくれ。頼む、エイミイと真美。この世界を守るために力を貸してやってくれ。そして頼もうじゃないか、俺と由紀。そして、せめて応援しながら見届けてやろうぜ。それが俺たちにできる、俺たちなりの誠意かもしれない」

そう言つと、浩一さんは隣にいた由紀さんに同意を求めた。

「……私は、私は」

ところが由紀さんは、そこで言いよんだ。僕らからとつさに顔をそらして、口を閉ざしてしまう。

苦しそうに、辛そうに、自分の胸元に手を当てて、何か必死に言葉を探し続けているようだった。

僕は何か声を掛けるべきだろうか？ 声を掛ける資格があるだろうか？ そう迷っていると、真美さんが由紀さんのもとへそつと歩み寄り、微笑みながらこう言つた。

「お姉ちゃん、大丈夫。お姉ちゃんの優しさは、私が一番知っているから。ねえお姉ちゃん、私がサトウ先輩の力になってくるからお姉ちゃんは応援して。ううん、認めてくれるだけでいいよ。それだけで、私は嬉しいから」

「真美……」

姉妹で見詰め合うと、何か思うところがあつたのだろう。

由紀さんは吹っ切れたように力強くうなずくと、こう宣言した。

「私も一緒にいくよ。うん、ここにいるみんなでシェードのもとに行こう！」

するとみんなも由紀さんの言葉に同意して、

「おー！」

なんて、楽しそうに右腕を振り上げた。

そんな心強いみんなの姿を見ると、姉さんはもう一度頭を下げる。

「みんな、すまない」

けれど、それは姉さんの言葉じゃなくて、僕が言うべき言葉だ。

「みんな、ごめん……。みんな、ありがとう！」

だから僕は涙ながらに、
なのに嬉しくて笑顔でそう言った。

16・とりあえず結末

それから僕らは、みんなでそろってシェードが待ち構えているであろう林へと向かった。

僕、詠美さん、浩一さん、真美さん、由紀さん、そして姉さんの六人である。

時間は五時を少し回ったくらい。日暮れまでにはまだ余裕がある。「残っているのは獣型のシェードが一匹だけなのか？」

そう聞いてきたのは浩一さんだ。

「うん。人型のシェードはちゃんと倒したから、残っているのは一体だけだと思う」

「そうか、だったらさくつと倒しちまおうぜ」

「もちろんそのつもりだけど、油断大敵だよ」

先ほど僕がシェードに負けてしまったのは、その油断が原因だったのだから。

今回ばかりは、真剣に集中して戦わないとね。

「おお、期待してやるぜ！」

「……ぽぽぽ」

「照れるなよ、気持ち悪いな……」

照れ隠しなのか、浩一さんは僕から顔をそらす。まさか本当に僕のことを気持ち悪いとか思っていたりして……いそうで悲しいな。

でも、露骨に嫌われていないだけましか。うん、がんばろう。

「あ、そろそろだよ」

たわいのない会話を続けていると、目的地である林にたどり着いた。シェードはきつとこの奥で待ち構えているはずだ。手元にあるリーダーの反応も変わっていない。

「さてと、じゃあ僕らはこのままシェードのところに行くけど、浩一さんや由紀さん、それから姉さんはここで待っていて。さすがに危ないからね」

ここから先は、魔法がつかえる詠美さんと真美さんの二人だけについてきてもらうことにしよう。たぶん、今の僕には他の人まで守る余裕がないから。

「え？ うん。足手まといになるのはいやだからね」

「そうだな、弟がそう言うのならそうしよう」

そう言っただけで由紀さんと姉さんはうなずいた。ここには姉さんが一緒にいてくれれば、僕がいなくても大丈夫だろう。

「俺はついていくぞ？」

ところが、姉さんと由紀さんとは違って、浩一さんは僕らについてくる気満々だった。

「ええ？ だけど、危ないよ？」

「だからなおさらだ。もちろん俺には何もできないかもしれないが、ほら、お前の魔法って一人ずつにしか使えないんだろ？ 憑依してないほうを守るためにさ、俺も一緒にいたほうがいいかもしれないって思っただが」

確かに、僕が憑依している間は詠美さんと真美さんのうちどちらか一人は無防備になってしまうので、その護衛のためにも誰かが付いていてくれるのは心強いかもしれない。

また誰かを負傷させてしまった場合、とりあえず安全のために抱えて逃げてもらうことになるかもしれないしね。

「うん、わかった。だけど気をつけてね。生身の人間だと、どうあがいたってシェードには太刀打ちできないから」

「おうよ！」

浩一さんが腕まくりしたのを合図に、僕らは林の中へと入っていく。由紀さんと姉さんはそんな僕らを応援しながら見送ってくれた。「えっと、最後に魔法を使ったのは詠美さんだったから、順番的に今度は真美さんに憑依することになるんだけど……本当に大丈夫？」林の奥、シェードの気配を感じた僕は、魔法を使うべく真美さんに尋ねた。

一応足の怪我の治療はしてあるけれど、シェードと戦えるほど治

っているのか心配だったからだ。これ以上真美さんに負担をかけるわけにはいかない。

「怪我ですか？ はい、もう大丈夫です」

「そっか、よかった」

それなら一安心だ。早速魔法を使ってシールドに先制攻撃を仕掛けよう。

「じゃあ行くよ？」

「はい」

真美さんがうなずいたのを確認して、僕はそつと唇を寄せた。キスである。

その瞬間、僕の体は輝く粒子になり、そのまま真美さんの体の中へ入り込んでいく。

どうやら無事に真美さんへの憑依が成功したようだ。

「よし——つて、痛いな……」

無事に憑依が成功した僕を待っていたのは、ズキリと来る足の痛みだった。

『たはは、ごめんなさい。嘘付いちゃいました』

「いや、うん、大丈夫。動けないほどじゃないから」

けれど、やっぱり予想外だった。真美さんは平気な振りをして、この怪我の痛みをずっとがまんしていたのかと思うと、より一層重く真美さんへの責任を感じてしまう。

『痛むって言ったら、私は仲間はずれにされてしまいそうだったの
で、つい』

「真美さん……」

『それより、急ぎましょうよ、サトウ先輩。時間がなくなってます
まいますよ？』

「そうだね」

痛む足を気遣いながら、僕はシールドの姿を探す。ゆっくりと慎重に、けれど残り時間を気にしながら林の奥へと足を踏み入れる。

「グギヤアアア！」

「来た！」

突然木陰から飛び出てきたのは、探していた獣型シールドそのものだった。

ただし、時間経過によってか、先ほどよりも少しだけ巨大化している。

「これ、一発や二発じゃ倒れないかもしれないね」

実体化が進んだシールドに関しては、いくら僕の強力な魔法でも簡単に倒れてくれなくなってしまうこともある。それだけ時間がかかるということだ。

『だったらワンツ、ワンツですよ先輩！』

「あはは、そうだね」

それにしても、こうやって心の中で励ましてくれるのはとても心強い。

一人で戦っているわけじゃないんだって、いつも誰かが応援してくれているんだって、そういうことを実感できてやる気と闘志が自然と湧き出してくるんだ。

「よっし、じゃあ僕の乱れ打ちをシールドのどてっばらにお見舞いしてやるう！」

『キラキラワンツパンチですね、先輩！』

「う、うん！ きつとそうだ、そうに違いない！」

なんだか勝手に真美さんによって僕の必殺技が命名されてしまった。

僕とあまり変わらないくらいの残念なセンスだけど、折角真美さんが名づけたものだからもうそれでいいこう。

くられ、僕のキラキラワンツパンチ！ …… ちょっと恥ずかしい。

「グラッラララア！」

当然ながら敵も腕を振り回すように激しく反撃を試みってくるが、真美さんの体に憑依した僕はその攻撃を華麗にかわしていく。怪我の完治していない足が痛みこそすれ、僕は歯を食いしばって耐えた。

だって、今更僕には弱音を吐く資格などないのだから。

そう、真美さんや詠美さんは僕のために痛みを耐えてくれた。僕に協力するために、恐怖や不安に耐えてくれていたんだ。

『やった、入りました！』

僕の右ストレートを腹部に受けて、シェードは若干体勢を崩してしまふ。その隙を逃さずに僕は続けて左腕を叩きつけるように振りかぶった。

「食らえ！　って、くそ！」

けれど、寸前のところでシェードの腕によって僕の左手は払われてしまった。

そして、敵の反撃。巨体を活かして両腕を振り下ろしてくる。

『危険ですよ！　は、離れましょう！』

「うん、そうだね、一旦そうしよう！」

獣型のシェードは攻撃力が高いので、まともに接近戦で戦うのは少し危険が伴うだろう。僕はとっさに敵の攻撃の間合いから離れ、後方へと下がっていく。

本来なら小柄で機敏な動きができる真美さんの体でシェードの懷を狙うべきかも知れないけど、今の真美さんは足の怪我が少しだけ心配なので、あまり無理はできない。

「グルルルル……」

逃げ腰の僕らを追いかけてくるかと身構えているものの、シェードはその場にとどまっとうなり声を上げているだけだ。

どうやら、僕の魔法がボディブローのようにじわじわと効力を発揮しているようだ。

「おい、サトゥー！　そろそろ三分だぜ！」

「え？　ああ、うん！」

浩一さんは後ろで時間を計ってくれていたらしく、僕に魔法の制限時間が近づいていることを教えてくれた。三分経過してしまうと自動的に憑依は解けてしまうので、その前に真美さんの体は安全圏に移動させておかないといけない。

ということで僕は急いで後方に控えていた浩一さんと詠美さんのもとへ。

ここでなら憑依が解けても浩一さんが守ってくれるだろうし、シールドも追ってくる様子はない。僕はホッと一息ついた。

その瞬間ちようど三分が経ったのか、僕が憑依していた真美さんの体が輝く。そして僕の意識は真美さんの体を離れ、やがて僕と真美さんはもとの体に戻るのだった。

「浩一さん、真美さんをお願い」

「ああ任せろ。俺にがつり任せろ」

「あの、どうか先輩も気をつけて」

「うん、当然だよ！」

僕のことを心配してくれた真美さんにピースサインを返す。安心させるためっていったら変だけど、不必要に心配させることはないからね。

自信があるかと言われれば、正直ちよつと怖いけれど。それでも、僕は立ち止まらない。

「グガアアアア！」

やっと僕らを追いかけてきたシールド。だけど、その姿は先ほどより弱っているようだ。どうやら、ちゃんと魔法が効いているらしい。

「あと一発くらいで倒せるね、あれ」

「そうですか。じゃあ……」

「うん、お願い」

いつの間にか僕の隣にいた詠美さんへと、僕はゆつくりと唇を寄せていく。詠美さんも控えめではあるけれど、ちゃんと自分から答えてくれた。

そして僕は深く、浅く、一瞬のキスをして。

「……よし！」

無事に一つとなることに成功した。

『さあ、これで決着をつけましょう！』

「……うん、その前にちよつといい？」

『え？ え？ ええ？』

詠美さんの体へと憑依が成功したものの、その瞬間に僕を違和感が襲った。

それは、真美さんの体に憑依したときに感じた、足の痛みにも似た感覚。そう、それはお腹を中心とした鈍い痛みのようなもの。

もしかして、詠美さんも真美さんと同じように怪我をしているんじゃない？

そう思った僕は、シェードに叩かれてしまった詠美さんのお腹を確認するため、憑依した体で自分の服をへそが見えるくらいめくりあげてみた。

『つて、何をするんですか変態さあ〜ん！』

「いや、別にこれは変態行為ってわけじゃ……んん、やつぱり自分じゃよく見えないな」

念のためにしつかり確認しておきたいと思った僕は、服を胸元までめくり上げたまま浩一さんと真美さんに振り返る。詠美さんのお腹を見てもらうためだ。

「どう？」

『つて、何をやつとるんですか変態やる〜う！』

浩一さんと真美さんの返事を聞く前に詠美さんが心の中で暴れまわってそれどころじゃなくなってしまった。二人はちよつと顔をそらしてしまっているし。

残念だけど、動けないほどの痛みはないから大丈夫かな？

時間も三分間と限られているし、そろそろ攻撃に移らないと。

「よーし、それじゃ行くよ、詠美さん！」

『はじめからそうしてくれれば……』

なにやら詠美さんが落ち込んでいるが、今は構っている余裕もない。いつの間にかシェードの姿が近づいてきていたからだ。

大きな獣型のシェードは、たとえるならゴリラのよう。見るからに怪力で、まともに歯向かえば危険な相手に違いない。

けれど、今のシェードはすでに僕の魔法を一撃受けていて、すでにふらふらと足腰が揺れている。もはや普通に立っているのも限界なのかもしれない。

あと一撃で、あとほんの一発の魔法で倒せるだろう。

「けれど冷静に、けれど熱く！」

僕は気合を入れると、両腕を魔法の力で輝かせる。

シェードを倒すための魔法の力である。

『はい、行きましょうか！』

詠美さんの言葉にうなずくと、僕は大きく一步踏み出した。

その動きを見て、シェードは大きく右腕を振るってくる。が、もちろん僕はそれを飛び退いて避ける。からぶった衝撃で体勢を崩したシェードめがけ、今度はカウンターで僕の右腕をお見舞いする。

「さあ、こいつを食らって霧散しろ！」

「グギヤアアア！」

魔法の力をその腕にまとった一撃で、衝撃を受けたシェードは大きく後ずさる。

その姿を逃さず、僕は続けざまに左腕で追撃を浴びせかけた。

「ガアアアアア……」

するとシェードは、徐々に小さくなっていく雄たけびとともに消滅していく。

やがてその姿が完全に消え去ってしまうと、僕は脱力して呟いた。「やった、勝った。シェードに勝ったんだ……」

それは少し前までは当然のことだと思っていたこと。僕が、負けるわけがないと調子に乗っていたはずのこと。

でも今の僕にとって、みんなの協力を得て戦えること、そして無事にシェードの退治をできるということは、何ものにも変えがたい喜びだった。

『よかったですね』

「うん、これも詠美さんや真美さんのおかげだよ。ありがとう」

本当ならみんなに向かって土下座で御礼申し上げようと思ったけ

れど、今はまだ詠美さんの体に憑依したままだから土下座はやめておこう。また詠美さんがショックを受けてしまいかねないからね。うん、僕だってそれくらい勉強したさ。

それより、あと残り時間は一分くらいかな？

気になつて時間を計っていた浩一さんへと振り返ると、そこにはこちらに駆け寄ってくる浩一さんがいた。

そしてためらいもなく浩一さんは僕に抱きついてきた。

「やったな、サトウー！　そしてもちろんエイミィ！」

「う、うん。そうだけど」

ちよつと驚いたけれど、きっとこれは浩一さんなりの感謝と喜びの表現なんだろう。そう思った僕は、しっかりと浩一さんの体を抱きしめ返す。

ギュツと、両腕に力をこめて。

『ちよ、これは私の体ですが！　お兄ちゃんと実質的に抱き合っているのは私ですが！』

実の兄と抱き合うのには照れがあるのか、詠美さんはどこか本気で嫌がっている。

「よかった、よかったよエイミィ、そしてサトウー」

だけどそんな詠美さんとは対照的に、浩一さんは涙ながらに喜んでいる。

だから僕もなんだか嬉しくなつてきて、思わず声を上げてしまうのだ。

「やったね、浩一さ……ううん、お兄ちゃん！」

『ちよつと！　勝手に私の言葉を代弁しないでくださいよ！』

「そうか、そうか。エイミィ、お前も喜んでくれるか」

「うん、お兄ちゃん！」

『だから私の言葉を勝手に捏造しないでくださいってば！』

詠美さんの言葉を半ば無視して浩一さんと抱き合つて泣いていると、その間に制限時間の三分が過ぎていたらしく、僕の憑依は解けてもとの体に戻っていた。

「って、いつの間にサトウー！」

「うわわ！」

で、当然ながら僕と抱き合う形になっていた浩一さんは、その事に気がつくと驚いて僕を弾き飛ばしてしまう。危うく地面に尻餅をつきそうになってしまったぞ。

「まったく、お兄ちゃんも調子に乗りすぎ。嬉しいのはわかるけど、抱きついてくるなんて非常識だよ」

「あはは、ですね」

詠美さんと真美さんは顔を合わせて笑っている。その笑顔が、どこまで澄んで晴れやかで、僕にはなんだかまぶしかった。

「あ、おお、悪かったな。それよりサトウー、そのさ、俺はちょっと感動したよ。お前が本当に命がけで俺たちのために戦っているんだなって、今日を見ていてそう思った。だからさ——」

「ん？」

近寄ってきた浩一さんは、さつと右手を僕に差し出してきた。

「——お前さえよければ、みんなのことをよろしく頼む。そしてもちろん、がんばってくれと俺に応援させてくれ」

「お兄ちゃ、じゃなくて浩一さん……。うん、僕のほうこそお願いするよ」

僕は浩一さんの右手を力強く握り返した。二人で固い握手を交わす。

「あ、私も混ぜてくださいよ！」

「私もです、私も！」

僕らの姿を見つけたのか、詠美さんと真美さんが駆け寄ってくる。そしてそのままわけわからないままに四人で握手しあうことに。「じゃあ、みんな。これからも一緒にがんばろうか！」

「ですね！」

そんなことを約束しあうと、名残惜しみながら僕らは手を離す。なんだかこのとき、僕らは本当の意味で仲間になれた気がした。これからもずっと、一緒に戦っていけるのだらうと、そんな気が

してならなかった。

「つと、ところで姉さんと由紀さんは？」

「あ、あちらです」

詠美さんが指差した先には、なにやら話し込んでいる姉さんと由紀さんの姿があった。何を語り合っているのかわからないけれど、僕は勝利を伝えるために二人の下へ向かっていく。

「……よかった、真美が無事で」

「確かに。だが、そう言う割にお前は複雑そうな眼をしているな。……なあ、いつまで意地を張り続けるつもりだ？」

「それ、あなたにも当てはまりませんか？」

「……まあな」

と、なにやら姉さんが目を伏せてしまっている。由紀さんもどこか気まずそうだ。

「どうしたの？」

「ああ、サトウーか。なんでもない、気にしないで。それより無事だったみたいね」

「そうだな、弟にしてはよくやった。これからもしっかりがんばれよ」

「うん、もちろんそのつもり。えつと、二人もありがとう。僕のこと心配してくれていたんだよね」

そう言っ僕は二人に向かって右手を差し出した。もちろんこれは握手。

「うん、えつと、妹を、真美をよろしく」

「弟、しくじるなよ」

そう言った二人と僕は交互に握手を交わした。

そこへ詠美さんたちも遅れてやってくる。そして一箇所にみんなが集まってきた。

すると姉さん、何故か僕の肩を景気よく叩く。

「……よし。最後に弟、お前が締めろ」

「え？ ええ？」

なんとという無茶振り。さすが姉さん、ここぞというときに僕を追い詰めてくれる。

「そうだな、サトウー。お前の一言で俺たちの結束を高めてくれよ」「ですね、サトウーさんが一応リーダーみたいなものですから」

「先輩お願いしますね、お願い！」

「お、おお、みんなも僕を何故か持ち上げているし……」

でも困ったな。何を言えいいのかまるで見当が付かない。

かといって、ここで何も言わずに逃げてしまうのは示しがつかないだろうし。

うつむ、どうしよう？ 何か面白い駄洒落でも言わなきゃ駄目なのかな？

「あのね、サトウー。とにかく今あなたがみんなに一番伝えたいことを正直に言えばいいと思うよ。そうすれば、きっとみんな納得すると思う」

「え？ あ、そうだね、ありがとう由紀さん」

「ま、気にしないで」

由紀さんは一歩下がって僕に場所を譲る。

そこで僕は一歩前に出て、ゆっくりとみんなの顔を眺める。

浩一さん、詠美さん、真美さん、由紀さん、そして姉さん。みんな僕のために力を貸してくれた、優しい協力者のメンバーだ。

僕は感謝しても感謝したりないし、それを言葉にすることはとてもできない。

けれど、今みんなの前で語るべき言葉なら、いくつもいくつも湧いて出てくる。

「ありがとう、みんな。そして、どうかお願いだ——」

グツと握りこぶしに力をこめて、みんなの顔へ目を向けて、大きく息を吸い込んで、僕は声を限りにこう叫んだ。

「これからも僕のために、みんなの力を貸してくれ！」

シールドとの戦いがこれからも続く限り、僕はずっとみんなの力を借り続けなければならないだろう。

それでも、僕は諦めない。そして、いつまでも忘れない。

みんなのために戦うことは、みんなの協力を必要としている
こと。

みんなを守ることは、決して一人の力じゃ成し遂げられない
こと。

だから僕は、ここにみんなと手を取り合って、これからも戦
っていくだろう。

いつの日か、この町に平和がやってくるその日まで。

1・あの日から、しばらく。

あの日（どの日かわからない人は一章の最後を読んでね）から数週間が過ぎた。

もちろんシェード討伐は続いているけれど、致命的なミスもなく取り立てて語るべき出来事もなく、月日は平凡に過ぎ去っていた。要するに順調。大丈夫だよ、問題ない。

協力してくれているみんなも元気だし、すごく積極的だ。

ただ一つ問題があるとするのなら、実質的に僕とキスをして魔法を使ってくれるのが、詠美さんと真美さんの二人しかいないということだけだろう。由紀さんは嫌だといって断り続けているし、他の人は今のところ見つかっていない。

二人の負担を考えると新しい協力者を探すべきかも知れないけれど、僕から見知らぬ女性をシェードとの戦いに巻き込んでしまうのは気が引けるからなあ。

かといって自発的な協力者を募集するにしても、シェードのことは一般の人にはできるだけ秘密にしておきたいし。

むむむむむ。さてどうしよう、わからない。

今度みんなと相談しよう、そうしよう。

「よう、サトウー。こんなところにいたのか」

「うん、まあ。浩一さんは今帰り？」

ノックもなくいきなり扉を開けて部屋に入ってきた浩一さんは、学校の制服姿である。こうして一日中何もすることのない僕とは違い、浩一さんや詠美さんなどは毎日学校に行っているのだから感心する。

「おう。それより、お前も昼間に何かするようにしたらどうなんだ？ 一人で暇だろ」

「うーん、退屈といえば退屈だけど、戦士には休息が必要だからねえ……」

そう言つて僕は遠い目を見ると、今までずっと腰を下ろしていた浩一さんのベッドの上へと横になる。電灯がまぶしい。

右手をかざしながら目をしかめると、浩一さんがため息をついてこう言つた。

「なんなら俺が揉んでやろうか？」

「え……。な、何を？」

「あーもー、いちいち顔を赤らめるなって！ 肩か腰に決まってるだろ！ ほら」

「あわわ！」

いきなり浩一さんはベッド横にやってきて、仰向けに寝ていた僕の体をひっくり返してうつぶせにしてしまう。その勢いで僕は浩一さんの枕に、ぼふつと顔をうずめてしまった。

そして何をするのかと思えば、浩一さんはうつぶせている僕のお尻の上に容赦なく飛び乗ってきて、「ぐわ！」つとうなり声をあげる僕のことなどお構いなしに、両手の親指を腰に突き刺すかのごとく押し当ててきた。

「どうだ、気持ちいいだろう？」

「ん、ん、ん……。ん、んん」

最初は何事かと思つて身構えたけれど、これは確かに気持ちいい。浩一さんの指使いに合わせて、自然と声が漏れてしまう。

痛いのに心地よいというか。いじめられているみたいなのに優しくされているというか。そもそもなんか体勢的に無防備だから恥ずかしいというか。見た目には使役している感じなのに、現実的にはなされるがままつていうか。上に乗られているから重くて仕方がないのに、段々と体が軽くなっていくような気分がするというか。

もはやマッサージではなく、僕は揉みしだかれている！

「あ、ああ……」

もう声が声にならないね。情けなく吐息が漏れるくらい。

「へへへ、次はもっと深くいくぜ？」

「う、うん。できれば優しくお願い……」

そして浩一さんは腰を浮かせると、ギュギュツと指に力をこめた。
そのときである。

——ガタッ！

「お、お兄さんったら何を……」

「ん？」

部屋の入り口のほうで物音がしたと思ったら、そこには何故か驚愕に目を見開いた詠美さんの姿が。右手で口を押さえているし、壁に背を預けて今にも倒れそうだ。

いつからそこにいたのか全然気がつかなかったよ。

「そ、そんな……。まさかこんな三角関係が待ってようだななんて、考えたくもなかったけれど……」

今度は額を左手で押さえながら、ずるずると床に座り込む。
そして何かを必死に否定するように首を左右に振っている。

「ど、どうしたの？」

僕は顔だけを向けて詠美さんに尋ねる。まだ浩一さんのマッサージは背中の上で続けられている。それにしても浩一さんはまるで動じないな。

「どうしたのって、そんな、ベッドの上でいやらしいことを……」

「ええ？ マッサージっていやらしいことだったの？」

「は？ え？ マッサージ？」

ところが、きょとんとした様子で聞き返す詠美さん。
どうやらマッサージと何かを間違えていたらしいね。

「当たり前じゃないか、エイミィ。お前は一体何と勘違いしたんだ？」

「うん、それは僕も大いに気になる」

今後のためにも是非聞いておきたいことだ。

その、詠美さんが考える、いやらしい行為とやらを！

「あ、あはは、えへへ、うふふ、おっほっほ！ 気にしないでくださいなあ」

明らかに笑って誤魔化す詠美さん。否定しようもないほどに顔が

真っ赤だ。

そんなに恥ずかしいことなのか。なんだか僕まで恥ずかしくなってきたぞ。

「まったく、エイミイはいつからそんなにませてしまったんだ……。大体、最近までキスもしたことがなかったというのに」

「……そ、それを言うかなあ！ お兄ちゃんって本当に最低！」

「んな！ 俺はエイミイのことを思ってたな……」

「それが余計なんだよ！ お兄ちゃんは余計なんだよ！」

「そんな……」

詠美さんに一蹴されて浩一さんは涙目になってうろたえる。

別にいいけど、僕の腰の上からどいてからにしてくれないだろうか。さすがに重い。

「それよりさあ、詠美さんは何か用事があったんじゃない？ 理由もなく浩一さんの部屋まで来るわけがないもんね？」

「お前なあ」

今の言葉の一体何が気に食わないのか、浩一さんは不服そうにため息をつきながら僕の上を離れる。

浩一さんがベッドから降りるのを確認すると、詠美さんが気を取り直してこう言った。

「えーっと、実はサトウーさんに頼みたいことがあって。……一応、お兄ちゃんにも」

「そうなの？ だったら聞かせて。僕に力になれることなら喜んで協力するよ」

いつも詠美さんにはお世話になってばかりだから、その用事が僕の力を必要とするものなら、いつもの恩返しを含めて精一杯の努力をしよう。

そう思っ僕は寝転んでいたベッドから立ち上がる。足元がふわふわしているので、ちょっとだけバランスを崩して危つく顔面から床に落っこちるところだったけどセーフ。

いくらドジな僕でも、これから僕のことを頼ってくれる詠美さん

の前で情けない姿を見せるわけにはいかない。頼む前に向こうから断られてしまいそうだからね。

「つーかさ、俺は一応なのか……。サトウーのついでなのか……」横を向いてみると、浩一さんがぶつぶつと一人で呟きながらうなだれていた。

けど、関わりと面倒そうなので無視することにした。

「ほら、言ってみてよ詠美さん。気を遣う必要なんかないからさ」

「そうですか？ はい、なら……」

僕が話を促すと、詠美さんは僕らの様子をうかがうように話し始めた。

「実は、今月の最後の日曜日がお父さんとお母さんの結婚記念日なので、どうにか二人を祝えないかと思って、サトウーさんにも意見を聞きたくて」

「結婚記念日？」

おそらく詠美さんの両親の結婚を記念する日のこと、だよな。

……だけど、結婚の記念を祝うような雰囲気のかな、あれってあの二人って、僕の目から見てもすごく殺伐としていたような気がするんだけど。

「あー、そういえばそうだったな」

「もう、ちゃんと覚えておいてよね。これだからお兄ちゃんってば」

「悪い悪い、うっかり忘れていたぜ」

「もう最っつ低だね！」

プイツと頬を膨らませてそっぽを向いてしまう詠美さん。腰に両手を当てて、怒った様子で部屋の中央に仁王立ちしている。

ちなみに、いつの間にか浩一さんはベッドから降りて床に土下座中。潔い。

「まあまあ二人とも。喧嘩はやめてえ。でさ、結婚記念日には何をやるの？ 僕は何を手伝ったらいいの？」

「あ、そうでしたね。ええっと……」

「ちょうどいい機会だ。サトウーも一緒に考えてくれ」

「うん、まあ。力になれる限りでがんばるよ」

実際には何をすればいいのかなんて、全くもって見当も付かないけれど。

だけど、折角の二人からのお願いだから、僕もがんばろう。

ということで、命名「鈴木夫妻結婚記念日計画」の開始である。

計画の始まりは、ほとんど挫折から始まった。

「私とお兄ちゃんで作手料理をドーン大作戦だよ」

「いや、ここは俺とエイミでいつもありがとの手紙大作戦だ」

「いつそ家族四人で温泉旅行とか行ったら？　僕と姉さんで留守番大作戦」

「……うーん」

とまあ、結論が出ないのだった。

そもそも子供のほうから親の結婚記念日を祝うなんてなかなかいからね。誕生日だったらプレゼントとケーキを用意しておめでとうと声を掛ければ大成功なんだろうけれど、結婚記念日なんて何をしてあげたら喜ぶのか全然予想できない。

それにしても僕らが祝ったくらいで本当に喜んでくれるのだろうか。

言っちゃ悪いけど、僕には二人の離婚記念日が迫っていそうで怖い。

「とにかく、ここは二人におそろいのアクセサリーでもプレゼントしてみよう！　話はそれからだ！」

という浩一さんの提案に、他に代案のない僕らはうなずいて返す。そんなわけで僕らは黄昏色の夕方の町、プレゼントによさそうな小物を探して三人で歩きまわっていた。もちろん先頭を歩くのは詠美さんだ。この中では一番センスがよさそうだからね。

実際、道中で僕が提案したプレゼントは二人に「ありえない」と一蹴された。そんなにおそろいのハチマキっておかしいのかな？　赤白で別々になるよりはいいと思ったんだけど。まあいいや。

「でも何をあげたら喜んでくれるんだろう？」

「そうだな、エイミイの趣味に合わせれば大体オツケーなんじゃないか？」

「何が大体でオツケーなんだか……」

詠美さんと浩一さんは二人で言い争ってばかり、先ほどから全然話がまとまらない。僕が口を挟んでしまうと、余計に話がこじれそうだから救いようがない。

なんとかならないものかな、これ。

「でもさ、参考までに聞かせてくれない？ 詠美さんってプレゼントに何が欲しい？」

とりあえず僕は詠美さんに尋ねた。

そうでもしないと永遠に何も決まらなそうな気がしてきたから。

「そうですね、それはもちろん相手にもよりますけど、気持ちのこもったプレゼントなら嬉しいですよ。さすがに突拍子もないものと反応に困ってしまいますけどね」

「へえ。だったらさ、両親へのプレゼントも気持ちをこめれば大丈夫なんじゃない？」

「ええ、でも……」

と、詠美さんは歯切れ悪く黙り込んでしまう。

まるで、何か言にくいことでもあるかのようだ。

そもそも普通のプレゼントなら、贈った相手が喜んでくれるだけでオツケーなはずだ。けれど、詠美さんの反応から推測する限り、それ以上の理由なり目的が、今度のプレゼントには秘められているようだった。

もしかしたら余計なお節介になるのかもしれないけれど、ここまできたら中途半端な気持ちでやり過ぎることなんて僕には出来ない。たとえ迷惑でも、多少強引でも、僕はあえて遠回りをせず、詠美さんの目を見詰めながら単刀直入に尋ねることにした。

「でも、何？ 何か理由があるのなら、僕にも教えてくれない？」

きつと、いや、絶対に詠美さんの力になるから。……役に立つとは

限らないけどね」

こんなとき、必ず役に立てると胸を張って誓えるほどの力が僕にあればよかったのだけれど、残念ながら僕には出来ないことのほうが多い。

それでも、できる限りの協力はしたかった。恩返しという意味だけじゃなくて、ただ純粹に詠美さんたちの力になりたいくて。

その熱意が伝わったのか、それとも気を遣ってくれたのか、詠美さんはためらいながらも口を開いた。

「喜ぶだけじゃなくて、二人の仲を取り持ってくれるような、そんなプレゼントを用意したいんです」

「二人の仲を、取り持つ？」

その疑問に、詠美さんに代わって浩一さんが答える。

「ああ、要するに俺たちは二人の離婚を食い止めたいんだ」

「離婚……」

それは、確か、結婚という状態を解消すること。

一緒に生活していた二人が、これからは別々の道を歩むと決めること。

「お前がどう思つかは知らないが、俺たちは本気で離婚を取りやめさせたいんだ。鈍感なお前でも勘付いていると思うが、俺たちの父さんと母さんは仲が悪い。というか冷え切っている。無関心に重ねて無関心だ。けどな、それでも離婚はして欲しくないんだよ」

「うん、だからね、次の結婚記念日に、私たちで何かできないかなって、ずっとお兄ちゃんと話し合ってきたの」

「そうだったんだね」

なにやら二人の様子がおかしいと思っていたら、そういう理由があったのか。

二人にとって両親の離婚が何を意味するのか、僕には正確なところでは理解することなどできないだろう。

けれど、僕は確かにその話を聞いて悲しかった。いや、この感情は寂しいというべきかもしれない。

とにかく、結論として僕はやっぱり二人に協力したいと思った。

「というわけで、プレゼントだが」

「何かいい案はありますか？」

改めて尋ねてきた二人に、僕は今度こそ完璧なファイナルアンサーをつきつける。

これ以上はない最高のプレゼントだと確信して、声を張り上げた。
「ずばり、手錠だよ！」

ガシャーンとガツチリ、二人の絆を物理的につなげてしまおう！
と思つたものの。

「ありえない」

「残念ながら、それは本当にありえないかと」

ことごとく二人には不評だった。

「ええ……。でもさ、詠美さんと浩一さんも思いつかないんでしょう？
だったらいつそ僕の案に賭けてみるっていうのも面白いと思うんだけど」

「どう見積もっても負け戦にしかないだろ。それとも何か、お前はプレゼントに拘束具を贈られて喜んでしまう性癖なのか？」

「ちよつとお兄ちゃん、それはいくらなんでも言いすぎだよ……」

「え？　もしかして僕にくれるの？」

「そしてサトウーさん、あなたは どうして目を輝かせますか……」
やれやれといった風に詠美さんが肩をすくめる。どうやら僕の反応は間違っていたらしい。ひよつとして文化の違いかな？

再三に渡つて僕らはプレゼントが思いつかず、それきり議論も滞つてしまう。

なんだか、このまま三人で町をぶらぶらしながら話し合つていても名案なんか出てこないような気がしてならない。

ここは行き詰った雰囲気を開解するために、頼れるあの人に期待してみよう。

「まあ、とにかく姉さんにも相談してみるよ」

「おお、サトウーのお姉さんか。お前の三百倍は頼りがいあるな」

「さ、三百倍ときましたか……」

そんなに僕に対する期待値って低いんだね、ちょっと悲しい。けどあの姉さんを相手に三百分の一なら、意外と健闘しているほうなのかも……って、さすがにそれは卑屈すぎるだろう、僕。

せめて二百倍差まで戦力差を縮めよう。うむ、自分でも何を言っているのかわからない。

「そうですね、だったら今日はもう帰りましょうか。あ、それともこれからどこかに三人で遊びに行きます？」

「え？ いいのか、エイミイ？ 俺が一緒でもいいのか？ うおお、なんかすごく嬉しい！」

と、詠美さんから寄り道の誘いを受けて、路上で盛大にガッツポーズを決めてしまう浩一さん。

そのあまりの痛々しさに、詠美さんとはっさに呟いた。

「……やっぱり止めにしてお今日は素直に帰りましょう」

「ええええ？ エイミイ！ そりゃないぜ、エイミイ！」

浩一さんは愕然と叫ぶけれど、それは自業自得だから仕方ないね。後悔先に立たずというか、なんというか。

まあ、二人のやり取りを見ているだけの僕にとっては面白かった。うん、満腹。

よし、今日は家に帰ったら早速姉さんに相談してみよう。

2・相談

そのドアの前に礼儀正しく気を付けの姿勢をして立ち止まると、僕は自分の右こぶしにギュツと力をこめた。

そしてゆつくりとその右手を自分の胸元まで掲げると、僕はためらいがちにドアを三度叩いた。

なんてことはない。ただのノックである。

「姉さん、いる？」

「……弟か、入れ」

「うん、失礼するね」

姉さんの返事を待つて、僕はドアを開く。

部屋の中では姉さんが一人きりでくつろいでいた。

本来ここは詠美さんの部屋なんだけど、今は詠美さんがお風呂に入っている時間なので、部屋の中には姉さん一人だけなのだ。

「弟のほうから私を訪ねてくるとは珍しいな。どうした、土下座でもしにきたのか？」

「そうだね、じゃあ早速床に手について……って、さすがにそれはないよ」

言いながらすでに土下座していた僕は、負け犬根性が身に染みすぎている気がする。

まだ何も悪いことしていないのにね。うつむ、それともついだからこの機会に先走って今後の失敗について謝っちゃおうかな？ どうせすぐになんらかのミスをおかしそうな僕のことだから。……

その姿勢がすでに姉さんを怒らせそうだけど。

「ならばこんな時間に何をしにきたんだ、弟。私が一人のときを狙ってくるなんて気持ちが悪いぞ」

「あはは、気持ち悪いだなんてそんなあ、言われたほうは気分が悪くなるよ？」

「じゃあ帰れ」

「うん、そうする。……って、だからさすがにそれはないよ」

危うく用件を忘れて帰ってしまうところだった。

恐るべし、姉さん。

これ以上僕のペースを乱されてしまう前に、さっさと本題に入らせてもらおう。

「あのね、実は姉さんに相談があるんだ。聞いてくれない？」

両手を合わせてお願いする。姉さんは腕を組んで僕を睨みつける。

「相談だと？ 相談と言ったか？ 弟が私に相談？ ……ふむ、聞くじゃないか」

「よかった、聞いてくれるんだ」

最初の反応がちよつと威圧的だったから、てつきり追い返されちゃうのかと思ったけれど、なかなか協力的なみたいで安心した。

よし、このまま姉さんの気が変わってしまわないうちに早速相談だ。

「浩一さんと詠美さんがね、両親の結婚記念日にプレゼントを贈りたいって言っているんだけど、そのプレゼントで離婚を食い止めたみたいなんだ。そういうわけで、何かいいプレゼントってないかなあ？」

「ふむ、両親への結婚記念日のプレゼントか。そうだな……」

と、姉さんは座っていた椅子から立ち上がって腕を組み、ゆっくりと目を閉じる。

その姿勢で熟考すること数秒、思い立ったように目を開けた姉さんは、何故か窓際へと重い足取りで歩いていく。

閉じられていたカーテンをそつと右手でめくり上げたかと思うと、そのまま窓を開けて夜空を見上げる。その視線の先には輝く月。いくつかの星の影。

それからしばらく夜風に浸っていた姉さんは、やがて名残惜しそうに漏らした深いため息を自分で見送りつつ窓を閉め、僕のほうへ振り返るところだった。

「……うむ、見事に何も思いつかないな。弟よ、きつとお前は相談

相手を間違えたぞ」

なんだったんだ、この時間は。

……などという言葉はもちろん口にはせず、僕は落胆を隠して姉さんに気を遣う。

「いや、姉さんにもわからないことなら他の誰にもわからないよ、きつと。あはは、なんかもうどうしようもないね。いっそのことプレゼントは現金がよかったりして。プレゼントがお金だなんておっかねー、マネーだなんてまねできねー。なんつって」

もちろん冗談で、そんなことはないって思いたいけどね。

それにしても、やっぱり姉さんにも思いつかないのかぁ。ちょっと期待していただけに、残念で他ならない。けれど無理もない話かもしれない。僕や姉さんにとって、この世界の人が喜ぶようなプレゼントを提案するのは難しいからね。

自分でも忘れがちだけど、僕と姉さんは異世界の人間だから。

「まあまあ、それよりもちよいといい機会だ。弟に言っておきたいことがある」

「え？　僕に言いたいこと？　うわぁ、もしかして説教じゃないよね？」

僕は思わず身構えてしまう。

こうして姉さんがわざわざ前置きするくらいだ、真面目な話に決まっている。まさか日ごろの愚痴や親父ギャグを聞かされることにはならないだろう。

「説教か……うむ、いつか弟にはピシツと言わねばならないと思っているのだが、無念だ。今から話すのは弟への駄目出しではない。いうならば報告か」

「報告？」

姉さんから僕に報告なんて、一体なんなのだろう？　全く想像がつかない。

ひょっとして、「グーの勝率が最も高いぞ、弟」とか微妙な雑学でも教えてくれるのだろうか。……いや、普通にチヨキが強いだろ

う。パーなんて論外。けれど、相手の不意をつく感じにじゃんけんを挑んだ場合、あせる相手は複雑なチョキをとっさに出すことができないから、そのときに限ってはパーを出しておくのが無難な気がしてならない。それから、『叩いてかぶつてじゃんけんぽん』の場合だと、パーのほうがピコハンやヘルメットを取りに行きやすいから、グーやチョキに対するアドバンテージがあると思う。

そんなことを考えていると、姉さんがちょっと嬉しそうな顔をしてく説明した。

「どうやら最近、ようやく異世界間の移動ルートが安定してきたらしい。詳しい説明は省くが、要するに今後はシェードの発生数が減少するようだ」

「え、本当なの？ だったらシェードとの戦いもだいぶ楽になるのかな？」

「ふむ、そうであつたらよいのだが……。どうやら、出現する数が減少する代わりに固体の強さは増すようだ。わかりやすく言うのなら、数で攻めず、少数精鋭の質で攻めてくる感じ……。ということところか」

「一体一体が今より強くなる、か……。もしかして、僕の魔法だと一発くらいじゃ倒せなくなるのかな？」

「それは実際に戦ってみないとわからないが、ふむ、今後はシェード相手に苦戦する可能性があるただけ忘れないでおけ」

苦戦するという言葉を聞いた僕は、この前の出来事を思い出していた。

結果として詠美さんや真美さんを傷つけてしまったあの出来事を。緊張からか、ゴクリと音を立ててつばを飲み込んでしまう。

だけど、僕はすでに決意している。二度と馬鹿みたいな失敗は繰り返さないと。たとえ詠美さんや真美さんたちに頼ってしまう形になつたとしても、僕は絶対に油断しないと。

「うん、忘れない。姉さん、僕はこれからもつとがんばりたいと思う」

「そうか、弟も少しは成長したようだね。ふむ、そんな弟に朗報があるぞ。聞くがいい」

「朗報？ いい知らせってことだよ、期待していいの？」

今の報告は喜ぶ部分と不安な部分の二つを含んでいたけれど、朗報ってことは純粋にいい知らせなんだろう。わーい、聞く前から喜んじゃおう。

とはいえ、「弟、にらめっこは基本的に指で両頬を引っ張るのが有効だぞ」とかいう朗報だったらどうしよう。まあ、確かに頬を指で引っ張っちゃえば少しくらい笑っても誤魔化せるから強いけれど、言っても防戦なんだよね。やっぱり攻めるなら意外性を狙って顔を作り変えるくらいしないと駄目だから、指は目元に使っておきたい。目は口ほどにものを言うくらいだから、目つきを変えるだけで表情は一変するからね。

そんなことを考えていると、姉さんがこんなことを説明し始めた。「弟が使っている魔法だが、もしかすると強化していくことができるかもしれない。三分間という時間制限についても、両腕を光らせるだけという魔法の強さについてもだ」

「ええ？ それ本当なの？」

「もちろん確証はない。何しろこの世界の人間と魔法を使うのはおそらく弟が初めてだろうからな。とはいえ、最近の弟を観察しているとその兆候がわずかながあるようだぞ」

「へ、へえ……」

そっか、僕の使う魔法も成長していく可能性があるのか。具体的にどれほど強くなるのかまだわからないことばかりだけど、希望があるっていいことだよ。

もし魔法が強化されればこれからのシェード討伐についても、今よりもっと安全にこなすことができるようになるのだから。

よし、今度会ったときに詠美さんや真美さんにも相談してみることにしよう。僕との魔法を育もうぜ！ って。

「うむ、弟に言うべきことはそれだけだ。弟のほうも特に言うべき

ことなど残っていないだろう？ ほら、帰れ」

「うん、もちろん帰るつもりだけど。だけど、なんか冷たいね……」
僕ってやっぱり姉さんに嫌われているんだろうか？

ちよつと僕に対する反応が冷たい気がしてならない。まあ、姉さんは誰に対しても素っ気ないんだけどね。

「……つと、そういうえば最後に改めて確認するけど、やっぱり姉さんにも結婚記念日用のプレゼントって思いつかない？」

「……む。やっぱりだと？ もちろん思いつかないが、弟にそう思われてしまうのは不愉快だな。よし、ここは私が名案を絞り出してやろう」

「名案って絞り出せるものかな？ ……まあ、姉さんがそう言うなら期待せざるを得ないけどね」

なぜか僕に対抗意識を燃やしたらしい姉さんは、やはり腕を組んで考え込んでしまう。果たして、いかなる名案を披露してくれるのだろう。

僕は期待のまなざしで姉さんを見守った。

「……ふむ、来たぞ。これだな、弟よ」

やがて姉さんは目を開けて手を打つと、不敵な笑顔を浮かべながらそう言った。

どうやら名案が降りてきたらしい。自信ありそうだし、僕も期待だ。

「うん、聞かせて」

そして姉さんが得意げに答える。

それはもう、これしかありえないだろうくらい自信満々に。

「キスだ」

「え？ なに？」

「だから、キスだ」

「キス？」

「そう、キスだ。いいだろ？」

「えっと……うん、いいかも。いいよ、キス」

何がどうなつてどうするつもりでキスなのかまるでわからないけれど、姉さんの勢いに負けて僕は真っ直ぐうなずくしかなかった。

プレゼントにキス？

姉さんも大概どうかしちやったんじゃなかるうか。

——ガタツ！

と、僕が困惑した表情のまま嬉しそうに笑う姉さんと向き合っていると、部屋の入り口からものすごい物音が響いた。

驚いて振り返ってみると、そこにいたのは腰を抜かした詠美さんだった。

うん、なんかちょっとデジャブ。

「な、な、な……。まさかサトゥーさんのお姉さんが私の恋のライバルになつてしまうとは、さすがに予想外といえますか、複雑な気分といえますか……」

「恋のライバル？」

一体なんのことだろう？ 僕には何かなにやらさっぱりだ。さっぱりすぎて濃い味のラーメンが食べたい。

「私には何を言っているのかわからないが、何を言っているんだ？」

僕と同じく首をかしげていた姉さんが真相を問いただそうと近づいて行くと、詠美さんは慌てふためいて口を開く。

「いえ、だって今、二人でキスをするって……」

ポツと顔を赤くしてしまう詠美さん。湯上りなのか、顔が上気している。まだ髪も湿っているようで、恥じらう様子がなんだか色っぽい。

それにしても、二人でキス？ 二人つて、まさか僕と姉さんのこと？

「あのさ、詠美さん。たぶん詠美さんは勘違いしていると思うんだ」

「え？ 勘違い？」

「うん。それもとんでもない勘違い」

そう言つた僕の言葉を受けて、姉さんが続けて説明する。

「……とんでもない勘違いかどうかはさておき、キスするのは私

と弟ではない。お前の両親だ」

「え？ 私の両親って、え？」

「そうだ。結婚記念日のプレゼントで離婚を阻止したいのだろう？
弟から聞いたぞ。だったらそれこそキスだろう。こう、二人にキスさせるんだ」

「お母さんとお父さんにキスをさせるって、ええっと、一体どうやってでしょう？」

詠美さんの疑問はもつともで、もちろん僕にもさっぱりわからない。けれどそこは姉さん、何か考えがあるらしく、そつと腕を組むと意味深に両目を閉じる。

僕と詠美さんが緊張して答えを待つ中、姉さんは何か思い立ったように目を開けると、そのまま背を向けて窓へ歩み寄り、カーテンを巻き上げると窓を開けた。

空には輝きを増した月。かすむ星たち。涼しげな夜風。

しばらく夜空を見上げていた姉さんは満足したのか、窓を閉めると僕らのもとへと戻ってくる。

そして口を開いた姉さんはこう言った。

「……うむ、見事に何も思いつかないな。弟よ、私にはきつとセンスがないらしい」

なんだったんだ、この時間は。

……などという言葉はもちろん口にはせず、僕は呆れて肩をすくめる。

「ま、まあ、ですがお姉さん、キスっていうのはある意味で素晴らしい意見だと思います。つまりですね、思い出をプレゼントするということですね、わかります」

「そ、そうだよ姉さん。つまり結婚記念日にはみんなで思い出を作ればいいんだよ！」

「……ふむ。その思い出にしろ、何を作るべきかなんて私にはわからない」

と、なにやら姉さんはネガティブで自虐的。すっかり自信をなく

してしまっている。

「ただど励まそうにも僕には何も思いつかないから、頼みの綱は詠美さんだ。」

そう思っ僕は詠美さんの顔を見つめる。目が合うと、詠美さんは照れた様子で頭をぽりぽりとかいてこう言った。

「すみません、私にも何を思い出としてプレゼントするべきかさっぱりなのです」

「どうやら、僕らにはとことんセンスってものがないらしい。とことん過ぎてとんこつラーメンが食べたい。」

結婚記念日のプレゼントは思い出を作ってもらうことにしよう、とまでは決まったものの、それ以上の意見はさっぱり出なかった。それから寝るまでの時間みんなで話し合ったけれど、ここには書けないほどひどいものばかりで、本当にどうしようもなかった。

「はあ、本当にどうすればいいんだろうね……」

などと、みんなで顔をつき合わせてため息を漏らすのだった。

3・さらに相談

思い出補正、という言葉を知っているだろうか。どうやら造語らしいけど。

間違っていたら申し訳ないけれど、思い出補正という言葉が簡単に説明するなら、時間が経てば経つほど昔の思い出が美化されていく現象のことであるといえるだろう。

たとえば「昔はよかったなあ」とか、「最近の何々は全然駄目だろう」とか言ってしまう背景には、この現象の影響があるとかないとか。ないとかあるとか。

まあ、つまり僕が何を言いたいのかというと、甘酸っぱいプロポーズの思い出なら十分に頭の中で美化されていて、それを二人に思い出してもらえれば離婚も考え直してしまうんじゃないかなっていう計画。

詠美さんの両親へのプレゼントの話だ。

具体的には二人の結婚記念日に当時のプロポーズのシチュエーションを再現させて、あのころの熱い気持ちを思い出させてしまおうと、そして再燃した二人はそのまま手と手を取り合い、離婚なんてどこ吹く風、あれよあれよと仲直りした果てには新しい家族が……って、さすがにそれは話がすぎている気がするならない。

そこまで上手く事が運ばないにしろ、二人にプロポーズの日の出来事を思い出してもらおう作戦は完成度が高いと思う。パーフェクトだと思う。

けれどこの計画を詠美さんに相談してみたら、「お母さんとお父さん、今現在における二人の状況を考えて、私たちにプロポーズのシチュエーションなんてまず教えてくれないでしょう、そうでしょう?」と優しく諭されてしまったので僕は悲しい。

名案だと思ったんだけど、確かに僕もあの陰悪ムード漂う二人からプロポーズの思い出話なんて聞けそうにないと諦めてしまった。

そもそも話してくれるくらいならこの計画が必要ないからね。

他の方法を考えよう、まだ時間はあるみたいだし。

「というわけで、何かいい方法ってないかな？ もう二人だけが頼りなんだよ」

そう言うのと、僕は二人に向かって深く頭を下げた。危うく両手を地面につけてしまいそうなほど深く下げてみた。それって前屈？ うん、まさにそれ。

ちなみに今僕がいるのは詠美さんたちが通っている高校の近くにある、人通りの少ない道の途中。そして僕の目の前にいる二人とは、真美さんと由紀さんの加藤姉妹だ。

どうして僕と加藤姉妹の二人が一緒にいるのかというと、単純に僕が高校の門前で二人を出待ちしていたからなんだよね。もちろん二人を訪ねた理由はただ一つ、プレゼントにふさわしい思い出作りについての相談である。

僕や姉さんや詠美さんや浩一さんはもう全然駄目。アイデアの枯渇状態だから。

とまあ、そういうわけで僕はこうして二人に路上で頭を下げているわけである。

「なるほど、つまりご両親の結婚記念日に何か思い出作りをしてあげたいと、そういうことなんですね？」

「うん、その通りだよ真美さん。さっすが」

「えへへ、物分りだけはいいつもりです！ つもです！」

真美さんは僕のそばまで笑顔を浮かべながら駆け寄ると、膝下のあたりでお互いの右手をパチンとぶつけ合い、ハイタッチならぬ一口タッチ。ちよっと気恥ずかしい。

ちよっとした風が巻き起こったせいで、真美さんの制服のスカートが少しだけふわりと舞い上が……。つと、僕を見る由紀さんの目が怖いので今のは忘れてしまおう。真美さんに対して少しでもいやらしい下心を持ってしまったら、妹を溺愛している由紀さんに何をされてしまうかわからないからね。

仕切りなおし、仕切りなおしと。

「この前から僕もずっと考えているんだけどね、全然いい案が思い浮かばないんだ。僕の姉さんなんかさ、キスをさせたらどうだろうとかさ、あはは、おっかしいよねえ？」

「キスですかあ……」

笑い所なのに、それを聞いた真美さんは遠い目をして空を見上げていた。

「キス、かあ……」

その隣の由紀さんかというと、自分の唇に人差し指を当てたままうつむいている。

二人そろって様子が変だよね。キスって言葉に過剰反応しているみたい。

そのまま黙って二人の様子を眺めていると、先に回復したのは由紀さんだった。

「キスといえばサトウーさ、最近シェードとかって出ていないの？ 真美が最近さ、サトウーさんとのキスが減っちゃって……って言うていたけど」

「あ、そういえばその話もするつもりだったんだっけ」
姉さんから聞いていたのを、すっかりすっかり忘れていた。

シェードの、ええと……なんだったっけ、こう、上手く説明できないのがもどかしい。

とにかく二人には簡単に説明しておこう。詳しくは姉さんから直々につてことで！

「えっとね、なんか異世界間の新しい移動ルート開拓の弊害としてこの町に出現するようになったシェードなんだけど、少しずつ異世界間のエネルギー流動現象が安定してきているみたいだから、出現する数が減っているみたいなんだって」

「え？ そうなの？ ってことは、いつかこの町にもシェードが全く出てこなくなる日があるの？」

「ええっと、そうだよって言えたらよかったんだけど、僕にはまだ

わからないとしか答えられないや、ごめん。そもそも出現数が減ってくれる代わりに、その分エネルギーが凝縮されて強力になったシールドが出てくるみたいなんだ、本当にごめん。あとこれも伝えておくけど、シールドについて予測や観測をするのってとても難しいんだ。この町に出るかもしれないことは予測できても、どんなシールドかまでは詳しくわからないし、いつまで出現し続けるのかもよくわからないってことなんだけど、重ね重ねごめん」

説明しながら何度も何度も頭を下げていたら、ゆっくりと近づいてきた由紀さんから強引に頭を持ち上げられた。頭を下げなくてもいいってことらしかった。

手を離された僕が頭を下げないことを確認すると、由紀さんはこう尋ねてきた。

「それってつまり、数が少なくなる代わりに敵が強くなったってこと？ サトウのせいってわけじゃないのはわかってるんだけど、なんか文句を言っちゃいたくないそうだなあ……。信頼も感謝もしていないってわけじゃないけど、ちゃんと真美や詠美のこと守ってよね？ それから真美、あんたもしっかり気をつけなさいよ。シールドはもちろん、このサトウにもね」

「ん？ 今さらりと僕の名前が出たけど、どうして僕が危険視されているんだろう？」

「このキス魔がよく言うよ……」

と、何故か由紀さんは呆れたように肩をすくめて笑った。

確かにキスをして使う魔法だからキス魔には間違いない。何がおかしいんだろう？

首をひねって考えていると、今度は真美さんが僕に歩み寄ってきた。

しかも僕以上に首をひねっていたからちょっと可愛い。

「ところで、もしもシールドが出てこなくなったら、サトウ先輩はどうするんですか？ もしかしてもこの世界に戻ってしまうんですか？ どうですか？」

「え？ うーん、どうだろう？ 全く考えてなかったけど」

「あの、サトウー先輩さえよかったら、その……」

真美さんが何か言いかけたその時、横から由紀さんが割って入ってきた。

その素早い動きたるや、ナイスディフェンスである。

「ちよつと真美、何を言うつもりなのかわかってしまったから先手を打つけど、それだけはやめておきなさい。これ以上この地球上に馬鹿が増えたら、温暖化の前に人類は滅んでしまいかねないから」

「お姉ちゃん、さすがにサトウー先輩もそこまで馬鹿じゃないよ……と否定したいけど、こればかりは私も擁護できない。断腸の思いで認めるよ、先輩が馬鹿だったこと」

「でしょ？」

と、二人は手を取り合つてうなずく。仲睦まじくてなにより。

話の内容はよくわからないけれど、僕が馬鹿だったことだけはわかった。

悲しいことだよ。

ほら、馬鹿は死んでも治らないっていうじゃない？

悲しいことだよ。

……仕切りなおそう、仕切りなおそう。

「でさ、話は戻るんだけど、思い出作りってどんなのがいいと思う？ 二人にもわからないもののかな？」

二人にもわからなければお手上げだけだ。

もはや嘘でも冗談でもいいから教えてほしいくらいだ。

「サトウー先輩、いいですか？」

「え、うん、もちろんいいよ」

真美さんは一歩前に出てくると、僕に言い聞かせるようにこう言った。

「思い出なんて、作りたいならズバーンと衝撃です！ ズキューンと魅了です！」

「ずばーん？ ずきゅーん？ なにそれ？」

だけど僕にはさっぱりだった。抽象的過ぎて空が飛べそうだ。

わけがわからないと僕が首をひねっていると、真美さんはムツと少しだけ不服そうな顔をして、胸の前で手を組みながらこう言った。「ズバーン、ズキューンと胸に来る思い出作りといったら、サトウ先輩、まさにあなたの……キ、キスじゃないですかあ」

が、途中で急に小声になってしまい、最後のほうはほとんど聞こえなかった。

けど、とにかく僕に対して言いたいことがあるのはわかった。

しかもちよつと恨みがましく上目遣いで見つめられてしまった。

なんだろう？ 気になったので聞き返そうと口を開いたその時、またしても由紀さんによるディフェンスで僕と真美さんは引き離された。

ナイスディフェンスなのはわかったから、僕の肩を手で押してくるのはやめて欲しい。

「いいから真美は黙っていなさい。そしてサトウ、あなたには私が教えてあげよう。思い出作りをしてほしいんですよ？ だったらまず、その詠美のご両親が楽しんでくれそうなものを考えればいいのよ。趣味とか、関心があるものとか」

「趣味とか、感心ごとか、なるほど」

そう言われれば、そうかもしれない。

自分が好きなものを楽しんでいれば、一緒にいる相手のことも好印象になるのかもしれない。根拠はないけど、そんな気がしてきた。よし、じゃあ早速その方向で計画を立てよう。

「……でもこれ、二人の趣味を知らないと駄目だね。僕は全然知らないや」

それに、二人の趣味がバラバラだったらどうしよう？

まさか結婚記念日に別行動をしてもらうわけにもいくまい。

かといって二人の趣味を交互に満喫してもらうのも、ギクシャクしそうでちよつと怖い。なんで俺がお前の趣味に付き合わされるんだーとか、余計に喧嘩しそうな気がする。

「んー、だったらさ、サトウー。誰でもある程度は楽しめそうなことを企画すればいいんじゃないの？ 旅行とか、食事とか、どこか出かけるとかさ」

「おお、さすが由紀さん。そういうのっていいよね。具体的に何がいいかって聞かれると返答に困るけど、なんかいいよね」

「……気のせいかもしれないけど、サトウーって私のこと馬鹿にしてる？」

「そんなことないよ。……逆に聞きたいけど、由紀さんって僕のと馬鹿にしてるよね？」

「……」

あれ、由紀さんが言葉に詰まってる。もはや誤魔化すつもりもないみたいだ。

わかつちやいたけど悲しいね。

……仕切りなおしだ、仕切りなおし。三度目の仕切りなおしという。

「まあ、とにかく。つまり結婚記念日には二人にどこか出かけてもらうのがいいのかな？ さすがに旅行はプランを立てるのが大変そうだけど」

出かけるといっても、候補はたくさんありそう。

折角二人の結婚記念日だから、できたらデートっぽい場所がいいよね。

まさかここで異世界旅行をお勧めするわけにはいかないだろう。

詠美さんたち以外には僕が異世界人だということは秘密にしているし。

「サトウーや詠美がどう思うかはわからないけれど、私はこの前の休日、遊園地遊びに行ってきたよ。遊園地って大人が楽しめるのが微妙だけど、詠美や浩一さんと一緒に家族で遊園地に出かけてみたら？ いい思い出になるんじゃない？ ほら、夫婦二人の絆より、子供を含めた家族の絆って強そうじゃなか、ね？」

「へえ、なるほど。家族で遊園地かあ。それなら詠美さんや浩一さ

んがフロアに入れられるから、夫婦二人で行ってもらうよりは思い出作りが成功しそうだね。……ところで、由紀さんは誰と遊園地に行ったの？」

「うぐ……」

痛いところをついてしまったのか、由紀さんは顔をゆがめてしまう。

まさか一人で……ってことはないだろう、さすがに。

言いよんでいる由紀さんが気恥ずかしそうにしていると、その様子に痺れを切らしたのか、背後に控えさせられていた真美さんが顔を覗かせて教えてくれた。

「お姉ちゃんは私と二人きりで行きましたよ、サトウーさん」

「ちよ、ちよつと真美、何を勝手に教えちゃってるのよ」

「えー？ いいじゃん、遊園地のペアチケットをもらったはいいものの誘えそうな彼氏がないことも、別に恥ずかしがることじゃないよ」

「く、う、う……。どうせ私のデートの相手は妹だけですよ」

「あはは、はは、あれ、そういえば私もそうだったよ……」

と、なにやら二人はそろって寂しそうにうなだれてしまう。

どうやら遊園地に誘う相手がお互いにいないことを嘆いているみたいだ。しかも何故か彼氏とかデートとか言っているから、男限定なのかもしれない。詠美さんは女性だし、浩一さんは……僕も誘わないほうがいいと思う。

うつむ、落ち込んでいる二人を元気付けてあげたいけれど、どうしよう。まあ、僕なんかじゃ二人の力にはなれないかもしれないけど、とりあえず伝えておこう。

「えーつと、もし次そんな機会があったら僕を誘ってよ。二人きりでも喜んでいくから」

「え？ 本当ですか？ えへへ、だったらそうさせてもらいますね」
「あーもう、くっそ」。少しか嬉しかった私が悔しい」

ちよつと程度の差はあれど、二人とも喜んでくれたみたいでよか

った。笑顔が戻ってきたので嬉しいな。やっぱり笑っている顔が一番だからね。

それにしても由紀さん、喜んだのが悔しいって、そんなに僕のと嫌いなのか。真美さんとは全然反応が違うぞ。僕のせいなんだろうけど、悲しいなあ。

まあ、僕の気持ちはどうだっていいか。

「それじゃ僕、詠美さん達に遊園地のこと提案してみるよ。両親の結婚記念日に家族で遊園地って、世間的にはどういう印象なのかわからないけれど、鈴木夫妻結婚記念日計画にはふさわしい計画だと思う。二人とも、ありがとう」

この作戦で離婚を回避することができたのなら、そのときにはもう一度改めて二人にお礼を言わなくちゃならないね。

よし、早速今夜にも詠美さんたちと相談して計画を練ることにしよう。

そう思った僕は、由紀さんと真美さんに大きく手を振って別れると、急ぎ家へと走るのだった。

4・鈴木夫妻

すっかりグループのリーダー気分になりきっている僕は、腰に両手を当てた仁王立ちの姿でベッドの上に陣取った。

時は夕食を終えた夜、場所は浩一さんの部屋である。

「つまりだねえ……」

僕はそうやって重々しく前置くと、ベッドの前に並んで座ってもしらっている面々の顔をじっくりと眺める。

向かって左側から浩一さん、詠美さん、姉さんの三名だ。

大事なことから本当はかしこまって正座をしながら聞き入ってほしいところだけど、実際にはみんな部屋着でくつろいでいる。おまけにポカンとした表情を見せているから、なんだか僕だけが真面目な顔をして馬鹿みたいに思えるけれど、ここは妥協しない。

そう、あえて胸を張って堂々と宣言させてもらおう。

「ずばり遊園地だよ！ 家族旅行でテーマパーク！」

これは名案とばかりに僕はベッドの上で飛び跳ねる。

ギシギシとベッドがきしんでしまうけど気にしない。ほこりが舞おうが気にしない。なぜなら家族で遊園地に行つて思い出作りをしてもらうなんて、よくよく考えたら楽しそうで仕方がないもの。

そりゃテンションだつて上がつてしまうというものだ。やっほい！

「あのサトウーさん、嬉しいのはわかりましたから、どうか落ち着いてください」

「そうだぞ、弟。馬鹿みたいだから今すぐ止まれ」

「はい」

そう言つた姉さんの目が少しも笑っていないのを見てしまうと、僕の体はほんの一瞬で硬直してしまった。

なんてバジリスクだろう。

「で、サトウー。頼むからもう一回言つてくれよ。俺たちがなんだつて？」

「もう、浩一さん聞いてなかったの？ 折角僕が真美さんと由紀さんの二人に相談して思いついた名案だったのに、それを聞き逃すとか馬鹿みたい」

あんなに大声ではつきり言ってあげたのに、どうしてちゃんと聞かないのかなあ？

まったく、そんなだから浩一さんは詠美さんから尊敬されないんだよ。もっと兄らしくしつかりしてほしいところだね。

「まあまあ、サトウーさん、私からもお願いします。もう一度おっしゃってくださいませんか？」

いつになく低姿勢で丁寧な詠美さんの口調に、僕も思わずかしこまってしまう。

まだ怒ってはいないようだけど、あんまりふざけていると詠美さんからも嫌われてしまいそうだ。そろそろ真面目にやり直そう、そうしよう。

「うん、それじゃもう一度言うね。結婚記念日の思い出作りプレゼントのことだけど、みんなで遊園地に出かけるのはどうだろうってそこで楽しい思い出作りとともに家族の絆を取り戻すことができれば、目的を達成することができるよね」

プレゼント作戦における真の目的は二人の離婚阻止である。

もちろん遊園地に遊びに行ったくらいで離婚を取り消すなんてことはないかもしれないけど、家族で楽しい思い出を作れば作るほど、離婚を思いとどまってくれる可能性は高まるはずだ。

「それは、まあ、確かにそうですが……」

ところがそれを聞いた詠美さんの歯切れは悪い。恋する乙女のごとく思い悩むような表情から察するに、何か気にかかることでもあるようだ。

この計画を完璧なものにするためにも、それがなんなのか今のうちに確認しておこう。

問題の芽は早めに摘んでおくに限るからね。

「詠美さん、どうしたの？ 何か問題でも？」

「あ、いえ、みんなで遊園地に出かけるのは面白そうですが、お父さんとお母さんの二人をどうやって誘えばいいのでしょうか？」

「……ふむ」

なるほど、それは全く考えていなかった。

どうやって二人を誘うか、か……。

僕はあごに手を添えてみんなに背を向けると、ベッドの上でふわふわと揺れながら方法を考えた。三人の視線が僕の背中に突き刺さっているようで痛い。

しかし、あの二人を遊園地に誘う方法かあ。夫婦なのに仲が悪そうだったから、「みんなで一緒に」なんて言ってしまったら断られてしまいそうだよ。そもそも僕らの言葉をちゃんと聞いてくれるのかどうかも怪しい。

でも、だからこそ僕がここにいるのだ。よし、みんなのために案を出そうじゃないか。

「おそらく普通に誘っても承諾してくれないだろうから、ここはお金で釣ろうか。遊園地のチケットの代わりに札束を渡せば来てくれるよ、二人とも」

「俺の両親を勝手に金の亡者にするなっつーの、却下だ」

「むむ……」

僕の提案は浩一さんにあっさりと却下されてしまい、なんか悔しい。

それがちよつと不服だったので、僕は久々にやる気を出した。

以下、僕と浩一さんのやり取り。

「だったら二人が自分たちから進んで遊園地に来てくれるように、結婚記念日までに仲良くなってもらおうよ」

「そんな簡単に仲良くなってくれるんなら、そもそも結婚記念日の計画はいらないっつーの、却下だ。っーかサトウー、お前馬鹿だろ」

「それじゃ二人が遊園地に行きたくなるように暗示をかけよう」

「そんな暗示をかけられるくらいならその暗示で離婚を止めさせるっつーの、却下だ」

「ならば二人が遊園地に行かざるを得ない状況にしよう。たとえば詠美さんを僕らが誘拐して、二人を遊園地に呼び出すとか」

「そして冷静に警察を呼ばれたらどうするつもりだお前は。そもそも色々と無理がありすぎだっつーの、却下だ」

「むしろ遊園地をここにしよう」

「意味がわからないっつーの。お前が言いたいこともなんとなくわからないこともないが、やっぱり意味がわからない。却下だ」

「こうなったら家の中で思い出を作ろうよ」

「はっはっは！それができていれば離婚の危機など訪れはしないというものだよ、サトウー君！もちろん大却下だ」

などなど、僕の提案はことごとく却下された。

まるで相手にされていないようで正直悲しくなった。

「そういう浩一さんには何か考えがあるの？」

「うぐ、そう言われると俺も弱いんだが……」

浩一さんは頭を抱えると、口を閉ざして言葉に詰まってしまう。

「ごめんなさい、サトウーさん。頼んでおきながら、私たちは何も役に立てなくて」

「あ、いや、詠美さんが謝る必要はないけど」

「でも……」

そして詠美さんが申し訳なさそうに顔をうつむかせると、その下がった肩に優しく手を乗せながら、まるで僕らを気遣うかのように姉さんが明るく提案した。

「なあ弟、とにかく一度普通に話してきたらどうだ。こうやってうじうじ悩んでいるだけでは何も進展しないだろう」

「うーん、そうだね、姉さんの言うとおりかもしれない。わかった。僕ね、一度正直に話してみよう」

もしかしたら、案外あっさり計画に乗ってきてくれるかもしれない。いいね。

案ずるより産むが易し、って言葉もあるみたいだし。

「あ、だったら私もサトウーさんに一緒にします」

「詠美さんも？　ありがとっ、よろしく」
とまあというわけで、僕と詠美さんの二人でご両親の元に向かうのだった。

父、栄一郎。一般的な会社員。

母、浩美。一般的な専業主婦。ともに今年で四十歳。

何を隠そう、その二人こそ詠美さんの両親、鈴木夫妻のことである。

「よく考えたらさ、僕って栄一郎さんや浩美さんと顔を合わせてすっかり話すのって初めてかもしれない」

この世界に来てから今日までずっとこの家に泊めてもらっていたのだけど、なんだか気まずくて全然会話とかできていなかった。そもそも顔を合わせることもあんまりない。

やっぱりこれって失礼なのだろうか？　浩一さんとかは気にしなくてもいいって言うてくれていたけど、いざ面と向かって話しに行くとなると気まずくてならない。

今更ながら胃が痛いね。緊張で穴が開きそう。

「サトウーさん、あんまり気を張らなくても大丈夫ですよ。お父さんもお母さんも、別々にいるときはとっても優しいんですから」

「うーん、そうなの？　二人が一緒にいるときは場の空気が一瞬で冷え切っちゃうから、優しいところなんて全然想像できないけど」

「二人は仲が悪いから一緒にいると不機嫌に見えますけど、普段はそんなことないんですよ。信じられないかもしれませんが、本当に本当ですよ？」

「うっむ……まあ、今から確かめようかな」

「ええ、そうしてください」

そう言っていたずらっぽく笑った詠美さんに少しだけドキツとしながら、僕は詠美さんと一緒に栄一郎さんと浩美さんを探して歩く。さて、二人はどこにいるのかなあと探して一階に降りてみると、浩美さんはリビングでテレビを見ていた。近くに栄一郎さんの姿は

なく、どうやら一人みたいだ。

「あら、どうしたの？」

リビングに入ってきた僕と詠美さんを見て、浩美さんは穏やかに小首をかしげた。

「あ、いえ……」

そんな浩美さんと目があってしまうと、僕は緊張して一步下がった。

今にも睨み殺されてしまうんじゃないかという恐怖に背筋が凍ってしまったのだ。

「何しているんですかサトウーさん、ほら行きますよ」

ところが固まっていた僕は詠美さんに背を押され歩き出さざるを得なくなる。

緊張で凝り固まったまま、ギクシャクと不自然な足取りで浩美さんの目の前へ。

「二人で来るなんて珍しいわね。何？ ご挨拶？」

「……ご挨拶？」

「あら、違うの？ てっきりあなた達はそんな関係なのかと思っていただけ」

「……そんな関係？」

「うふふ、それを私に聞いちゃうなんてあなた、意外に大胆ねえ」

「は、はあ……」

何故か浩美さんは色っぽく流し目をしながら妖艶な声で笑っている。僕はそんなに変なことを言っているのだろうか、よくわからない。

それにしても、こうして話してみると浩美さんは確かに怖い人じゃなさそう。別の意味でちょっと怖く感じているのは、たぶん気のせい。そうに違いない。

「お母さん、何を勘違いしているのか知らないけれど、私たちはお母さんに話があったきたの。ご挨拶なんかじゃないよ」

「あら、そーお？ だったら何よ？ あなたと、ええと、佐藤君だ

「たかしら？」

「実は僕もどうでもいいことですが、佐藤じゃなくてサトウです」
「ああ、サトウ君ね。……気になっていたけど、それって名前？
だしたら親の顔が見てみたいわ。子供にサトウなんて名前を
つけるなんて、馬鹿じゃないかしら。……ああ、別にあなたの名前
を馬鹿にしているわけじゃないから気にしないでね」

「あー、はい。この名前、気に入っていますから」
なにしろ自分でつけちゃったからね。勘違いからだっただけ。

「そんなことよりお母さん、頼みがあるの。聞いてくれる？」

「ふうん、言ってみなさい」

「あ、それは詠美さんの代わりに僕が言います。あのですね、えー
と、月末の日曜日なんですが、浩美さんは何か予定がありますか？」
「月末の日曜？ ううんと、どうだったかしらね……ああ、別に大
丈夫よ。暇」

「そうですか、よかったです。そこで提案なんですが、遊園地に出
かけませんか？」

「……遊園地？ 私が？」

遊園地という言葉聞いた途端、浩美さんは顔を曇らせてしまう。
「もう歳なのよねえ」という呟き声が聞こえてくる辺り、何かため
らう理由があるのかもしれない。

このままでは断られてしまいかねないと思ったのか、すかさず詠
美さんが後押し。

「そうだよ、お母さん。私とお兄ちゃんで行くつもりなんだけど、
お母さんにも一緒に来てほしいなあ。あ、あ、あ、日ごろのお礼を
かねてね、遊園地で楽しんでほしいの」

「それはお気遣いありがとう。でもそうね、私が遊園地ねえ……。
まあ、いいわ。たまには詠美や浩一とコミュニケーションを取らな
くちゃ駄目なのかもしれないものね」

「本当？ やった、ありがとう！」

喜んだ詠美さんは、ソファでくつろぐ浩美さんに駆け寄るとその

手をギュツと握り締めた。その喜びように驚いていた浩美さんも、次第に詠美さんと同じように顔をほころばせ、母娘そろって楽しそうだったから僕も幸せだ。

よかったね、詠美さん。よかったですね、浩美さん。
にやにや。

二人にはちゃんと親子の絆があるみたいだね、安心だ。

「で、サトウー君も来るのよね？」

「え、僕ですか？」

ほんわかと二人を見守って油断していたところに、浩美さんから不意に質問が飛んできた。おそらく僕も遊園地に行くのかどうか確認しているのだろう。

なんだか口ぶりからは僕も一緒に来るのが当然と思われていそうだけど、今回の作戦は家族の思い出作りなのだ。部外者である僕はいないほうがいいだろう。邪魔にしなければならないだろうし、なんとなく僕ってトラブルメーカーな気がしてならない。

みんなに迷惑はかけたくないからね。

「僕は留守番しようと思います。えへへ、留守中の家は任せてください」

これなら二人も安心して遊園地にいけるだろう。よかった、よかった。

「……あなたも来なさい」

ところが浩美さんはそう言った。

「ちよつと、お母さん？」

「詠美は黙っていなさい。サトウー君、あなたも私たちと一緒に遊園地に行くこと。いいかしら、それが私からの条件よ」

そう言っていたはずっぽく笑った浩美さんの顔には、どこか詠美さんの面影があった。

だからというわけではないけれど、僕はその提示された条件を前に、うなずかないわけにはいかなかった。

続いて向かうは詠美さんの父である栄一郎さんの部屋だ。

僕と詠美さんが二人で部屋に足を踏み入れると、開口一番に栄一郎さんはこう言った。

「やらんぞ」

「はい？」

「お前に娘はやらんぞ」

「えーっと……」

いきなり何を言い出したのか、僕には全然理解できなかった。

ところが詠美さんには栄一郎さんが僕に言いたいことを理解できたらしく、部屋に足を踏み入れるや否や顔を真っ赤にして叫ぶ。

「もう何言ってるのよ、お父さん！ サトウーさんはそんなんじゃないって！ ……今のところは、だけど」

言い終えると、詠美さんの頬は赤から薄紅色へと少しだけ色合いが変わっていた。

「サトウー君、だったかな？」

「あ、はい、なんでしょう？」

「消えてくれ」

「……いきなりひどいですね」

なんだかんだで優しかった浩美さんとは違い、栄一郎さんは最初から僕に最大級の敵対心を向けてきているようだ。

どうして嫌われているのかよくわからないけど。

「まあまあ、お父さん。そんなことより、ちよつと頼みごとがあるんだけど」

「そんなことよりってお前な、これは人生の大事な選択であつてだな、現に父さんはその選択のせいで今まさに……いや、これはお前たちに言うことじゃないが」

「だつたらなおさらお父さんには言われたくない。ちよつと黙つて私の頼みを聞いてよ。お願いだから」

「……まったく、わかったよ。言いなさい」

「うん、ありがと」

詠美さんはホツと胸をなでおろすと、少しだけ緊張した様子で口を開いた。

「あのね、お父さん。月末の日曜日なんだけど、何か予定ってある？ 仕事とか、会社の付き合いとか、その……」

「ちよつと待ちなさい、確認するから。……ふむ、特に予定はないな。でもなんだ、突然私の予定など聞いて……って、まさか私の誕生日か？ いや、まだ先だよな？」

「もう、お父さんの誕生日なんて祝うわけがないじゃない。そうじやなくてね、暇ならちよつと出かけない？ 私とお兄ちゃん、遊園地に行こうって話し合ってた」

「ほう、兄妹仲むつまじいじゃないか。そうだな、行きたいなら二人きりで気兼ねなく行つてきなさい。ほら、私がお金を出してあげよう」

と、栄一郎さんは財布を取り出してお金を確認する。

だけど、その姿を見て思わず詠美さんは叫んでしまう。

「違うよ、お父さん！ お父さんも一緒に遊園地に行こうって誘ってるんだよ！ もう、どうしてお父さんはいつもいつも私たちのことをちゃんと見てくれないのさ！」

「いや、別に私はそんなつもりで……。ほら、私が遊園地というのも似合わないだろう？」

「……う、まあ、確かにそれはそうなんだけど」

「うむ、そこはちゃんとそうじゃないって否定してほしかった」

そして二人はそろって落ち込んでしまう。

このままじゃ話が進展しなさそうだったので、栄一郎さんからは嫌われているみたいだけど、僕も詠美さんの助太刀させてもらおう。「あの、できれば栄一郎さんにも来てほしいんです。この世界の遊園地って僕も行つたことがないんですけど、きつと楽しいと思いますよ」

「……なんだって？」

「いや、だから楽しいと思いますよ、と」

「違う、そのことじゃない。お前も一緒に行くと、そう言ったのか？」

「あ、はい。そう言いました。僕も詠美さん達と一緒にいきます」
ちよつと急に雰囲気が変わって怒った様子で僕に迫ってきたんだけど、栄一郎さんはどうしちゃったんだろう？

「……よし、私も行く」

「え、本当ですか？」

「ああ、お前を詠美に近づけさせるわけには行かないからな。この私がお前たちのそばで見張らせてもらうことにしよう」

「わあ、ありがとうございます！」

「……うむ、君が喜ぶのは意外だが」

栄一郎さんが引き気味に笑ったのはこの際もう気にしないことにして、遊園地に一緒に来てくれるというのは嬉しい答えだ。

ただ一人、詠美さんが僕らから離れて「お父さん……」と、頭を抱えて悩んでいたことだけが僕には不思議だった。

まあ、でもこれで計画は一步前進したということだ。

あとは本番次第だね、がんばろう！

5・月末の日曜日

そして迎えた月末の日曜日。鈴木夫妻の結婚記念日。

外行きの少しだけ派手めな服に身を包んだ浩美さんがリビングに姿を現すと、僕はなんだか嬉しくなつて歓声を上げてしまった。だって、浩美さん……詠美さんのお母さんが今日の計画に乗り気でいてくれているんだということが伝わってきたから。

けれど、朝から騒がしいと怒られた。朝から悲しくなつた。

でも仕方ないね、僕が悪い。空気が読めない人間は嫌われてしまふらしいから、今後は気をつけることにしよう、そうしよう。

「あ、お母さんもう来ていたんだ。ごめん、私のほうが遅くなつちやつて」

と、申し訳なさそうに謝りながらリビングに姿を現したのは詠美さんだ。

今日の計画を前に気合が入っているのかいないのか、全体的に淡いピンクの色合いであわせてきたらしい薄着だった。もう季節的には暖かいというより暑くなってくる六月下旬だからね、ちょうどいいのかもしれない。ぱつと見、一目で可愛いし。

じろじろと観察するように見ていたら詠美さんに引き気味でにらまれてしまった。ハツと気がつくと浩美さんも同じように白い目で僕を見ていた。どうやら二人には僕が変態か何かと勘違いされているらしい。別にそんなつもりじゃなかったのに、朝からもう一段と悲しくなつた。

でも仕方ないね、僕が悪い。これからは視線にも気をつけることとしよう。

「おつと、みんな早いなあ。それとも俺が遅いだけか？」

そう言つてのんびりとリビングにやつて来たのは浩一さんだ。

特に着飾る必要性を感じていないらしく、ジーパンにティーシャツ姿である。正直に言つてダサイ。全然おしゃれじゃない。はは、

でもそれが浩一さんらしくていいね。

かくいう僕はいつも着ている洗濯不要の高性能スーツ。人のことをとやかく言えた義理じゃないみたいだった。そろそろ僕も服を買おうかな？ たまに浩一さんの服を借りたりしてみただけど、サイズが合わなくてダボダボだったんだよね、悲しい。

落ち込んでいると、また一人リビングにやって来たらしい。

「おや、部屋にいないと思ったらもうここにいたのか、弟よ。どうせ寝ていると思って呼びに行って損をしたぞ、どうしてくれる」

「あのさ姉さん、それは僕に責任ないよね？」

「責任がないからって何でもしていいというわけではないのだぞ、弟。気をつけろ」

「う、うん、まあ」

ちよつと釈然としないけど、無意味に反論して姉さんの機嫌を損ねてしまうと怖いのでこの場合は静かにうなずいておこう。さすがに今回はかりは僕に責任なんてないと思うんだけどなあ。

「ところで弟、今日はちゃんと彼らのフォローをして来るんだぞ？ いつも私たちがお世話になっているんだ、こういうときぐらいちゃんと力になってやれ」

「そうだよ、僕もそのつもり。ふふ、全然自信がないけれど」

「笑いどころじゃないだろう、弟。その意見には私も同意だが」

そう言う姉さんは少しだけ口元をゆがめて笑った。いつも厳しい顔をしている姉さんだけど、たまに笑ってくれるときはちよつと可愛かったりする。ちよつとだけね。

「そんなことより姉さん、やっぱり姉さんは一緒に来てくれないの？」

「うむ、私は留守番させてもらうつもりだ。一緒に行っても盛り下げただけだということぐらい、なんとなくわかってるからな」

「そうかなあ？」

僕は姉さんの言うことに納得がいかなかった。姉さんも一緒に来てくれれば盛り上がるだろうと思ったからだ。明確な根拠はないけ

ど、僕一人が詠美さんたちについていくよりよっぽど現実的だと思う。

まあ、姉さんが遊園地でキャッキヤと楽しむ姿なんて想像できないけど。ジェットコースターっていうものに乗ったところで怖がったりはしないだろうし。

そう考えると姉さんが留守番を買って出るのも仕方がないのかもしれない。

「あの、サトウーのお姉さん、もしあれでしたら俺も一緒に留守番しましょうか？」

そう言っただ姉さんに近づいていく浩一さん。どうやら僕らの話を聞いていたのか、一人で残ることとなった姉さんに気を遣っているのかもしれない。

「お兄ちゃん、鼻の下伸びてる。気持ち悪い、最低、見損なった」

「う、マジか？」

「まったくもう……」

ところが、低姿勢で姉さんに近づいていく浩一さんの姿は詠美さんからすると変態そのものらしく、呆れた様子でジト目を向けられていた。兄の威厳というものは今の浩一さんには微塵たりとも残っていないようだ。

ちよつとだけ同情しておこう。

「安心するなよ？ その男と同様、たまに気持ち悪いのだからな、弟も」

……同情するつもりが僕も同一視されていた。あはは、悲しいね。姉さんから一蹴されてしまった僕がすっかり落ち込んでいると、今まで黙って話を聞いていた浩美さんがみんなに聞こえるようにこと言った。

「さてと、話もいいけれどそろそろ出発しましょうか。あんまり遅くなると時間がなくなっちゃうものね」

確かにそれはその通りだったのだけど、僕らはうなずくことができない。

少しだけ気まずかったので、恐る恐る浩美さんのもとへ。

「あの、まだ全員そろってはいないんですけれど……」

「え？」

君は一体何を言いたいのか？ とでも言いたげな浩美さんは怪訝な顔を僕に向けた。

「実はですね、浩美さんに言っておくのを忘れていたのですが——」
と、僕がその続きを説明しようとしたそのときだった。

「すまない、待たせてしまったようだな」

そう言って笑いながら最後にリビングへやって来たのは、浩一さんと詠美さんの父である栄一郎さんだった。

その姿を目にするや否や、浩美さんは僕のもとを離れ、驚いて栄一郎さんに尋ねる。

「まさかとは思っけれど、あなたも来るのか？」

「ああ、お前には言っておくのを忘れていたな。実は今日は私がこいつらを連れて遊園地に……って、も？ 今お前はあなたも、と言ったか？」

「……最悪ね」

「……あ、ああ」

浩美さんと栄一郎さんは深々とため息を漏らすと、二人そろって痛々しそうに頭を抱えて肩を落とした。

その顔には絶望が浮かんでいるようだ。そこまで落胆しなくても、と思うけど。

「いやまあ、お二人にもご一緒に遊園地を楽しんでいただきたくて……」

そんな僕の言葉も、どこかむなしく響くばかりだった。

結局、乗り気ではなかった浩美さんと栄一郎さんの二人も渋々納得してくれたので、留守番として姉さんを一人残して、僕らは町外れの遊園地に向かった。栄一郎さんが運転する車に乗って。助手席には浩一さん、後部座席には僕と詠美さん、そして浩美さんの三人

が座っている。

道中はずっと葬式のように静かだった。みんなが黙ったままあまりにしゃべってくれないので、車のエンジン音しか聞こえなかった。でもまあ、それでもなんとか無事に遊園地に到着した。

今日が日曜日ということもあり、人出はそこそこ、出入り口に近ところには車を止めることができず、やむなく駐車場の奥まったところまで入っていった。おかげで車を降りてから散々歩かせられ、それが気に食わないのか浩美さんは不機嫌そうなオーラを放出していた。はつきり言って怖かった。怒ったときの姉さんほどではないけど。

……あんまり浩美さんのことは怒らせないようにしよう、そうしよう。

「それじゃ早速入るぞ」

「お金はあなたが払いなさいよ？」

「……わかつている」

入り口のゲートで浩美さんと栄一郎さんが一触即発の不穏なやり取りを繰り返すもの、ここは栄一郎さんが引き下がることで問題には発展しなかった。

というより、今のやり取りだけを見ると栄一郎さんが尻に敷かれているだけのように思えてならない。少なくとも亭主関白というわけではないようだ。

ほんの少しだけ、僕には二人が仲直りする可能性が見えなくもなかった。

「うわあ、この遊園地に来るのも久しぶりだなあ」

遊園地に足を踏み入れると同時に感嘆の声を上げたのは詠美さんだった。

小さな子供のように無邪気な満面の笑みを浮かべて、二つの澄んだ瞳をキラキラと輝かせている。それはいつもの詠美さんからはちよつと想像できない、オーバーすぎる感情表現に思えた。

もしかすると、詠美さんは沈んだ様子の僕らを元気付けるために

わざと大げさに喜んでくれているのかもしれない。そう考えると、その詠美さんの思いやりというか健気さが、僕にはいたいけなものとして感じられてならない。

よし、僕も詠美さんにならってがんばってみよう。

「うはは！ この遊園地に来るのって初めてだなあ！」

最上級の喜びを表現するため、僕はその場で何度も繰り返し笑いながら飛び跳ねる。みんなを元氣付けるためにも、すぐ隣にいた浩一さんの手を取って一緒にピョンピョンと嬉しそうにはしゃぐこと――。

「うぜえ、離せよ」

――したけれど、駄目だった。

浩一さんは僕の過剰な演出に引いていた。綱引きだったら一人で三十人相手に勝てるくらいわかりやすく引いていた。振り返ってみると浩美さんと栄一郎さんもあきれ返って肩をすくめていた。

頼みの綱の詠美さんは……と思って顔を向けると、僕に同情してくれてはいたものの苦笑を浮かべるのみだった。

仕方ないので僕も苦笑を浮かべておくことにしよう。へへへ。

「タッタッター、タラッタッター！」

「うわあ、なんだ！」

馬鹿みたいに笑っていると、その不意を付くように僕らに陽気な音楽を流しながら接近する姿があった。驚いて振り向くと、そこにいたのは不可思議なモンスターだった。

ウサギを模しているのか知らないが、二足歩行する全身がピンク色の不気味な怪物だ。こんな化け物を見たことがない。

「もしかしてこれが新しいシェードか！」

なんてまがましい姿だろう。子供が見れば泣き出すに違いない。僕は魔法を使って対抗しようと、急いで詠美さんのそばに駆け寄ろうとした。

「待てサトウー、落ち着け。これはシェードじゃなくてこの遊園地のマスコットキャラクターのバニバニぴんちゃんだ」

「バ、バニバニぴょんちゃん？」

「そうだ、可愛いだろう？ ほら、特にこの垂れ下がった大きな耳！」

叫ぶや否や、浩一さんは明るい表情になってバニバニぴょんちゃん（以下、長いのでバニぴょん）に近づくとその垂れ下がった耳を右手で握り締める。

するとボロ雑巾のようにくしゃくしゃになるバニぴょんの耳。可愛いかどうかはこの際別問題として、その哀愁漂う姿は僕の憐憫を誘った。

「またお兄ちゃんつてば……。たまに本気で考えていることがわからなくなるよ」

「おいおいエイミィ、そんなに悲しいことを言わないでくれよ。ほら、お前だつてこのバニバニぴょんちゃんの飛び出した出っ歯が可愛く思えるだろ？」

「それにしたつてお兄ちゃん、そいつの出っ歯は上の前歯じゃなくて下の歯よ？ そもそも目の焦点が定まってないし、気持ち悪い。」

うん、私の中では暴走したときのお兄ちゃんくらい気持ち悪い」

「ははは」

「どうしてそこで嬉しそうに笑いますか……」

仲がいいのか悪いのか、詠美さんと浩一さんは二人で和気藹々と楽しんでいるようだ。

対する浩美さんと栄一郎さんといえば、迫り来るバニぴょんに二人そろって威圧するような鋭い視線を向け、これ以上近づいてくると念を押しているようだ。つた。

うつむ、あれはあれで仲がいいのかな？

判断に悩むところだけど、二人の反応が似ているからよしとしよう。

それからひととおりバニぴょんとの触れ合いを堪能して満足したらしい浩一さんは、先頭に立つとのそのそと歩く僕らを振り返って提案した。

「よし、じゃあ折角こうして遊園地にきたんだから、とりあえずジェットコースターに乗ろう」

「だ、だね」

それに詠美さんが追従する形で賛成した。

僕としてもジェットコースターには興味があるから乗ってみたい。反対する理由も特に見当たらなかった。

ところがこれに乗り気じゃないのが二人。

「私はいいわ、あなた達で行ってきなさい」

「ふむ、私もここで待っていよう」

そう言ってジェットコースターを拒むのは鈴木夫妻だった。

そんな二人の言葉を聞いた僕らは、少し離れた場所に集まって作戦会議。

「どうしようか、サトウーさん。私とお兄ちゃん、兄妹だけで楽しんでしまうと計画の意味が……」

「そうだが、サトウー。なんとかあの二人を乗り気にさせられないか？」

「うーん、そう言われてもなあ。むしろ逆に二人には僕らが戻ってくるまで一緒の場所で待ってもらって、会話でもしてもらうほうが効果的なんじゃない？」

「あの二人が二人きりになったからって話をするように見えるか？」

「うーん、僕には見えないけど」

「そうですよ。それにサトウーさん、これは俗に言う、つり橋効果です。ジェットコースターによってもたらされるドキドキを、恋による胸の高鳴りだと勘違いしてしまうという、素晴らしい作戦なんですよ？」

「へ、へえ。だったら二人には乗ってもらうしかないね」

「そうですよ！」

とはいえ、一体どうしたらいいんだろう？

結局僕ら三人の会議では結論が出ず、お互いに顔をそむけたまま会話もなく立ち尽くしていた二人のもとへ戻る。

ええい、こうなったら僕がたった今思いついた作戦でいこう、そうしよう。

「すみません、あまりにも突然のことながら僕らトイレに行きたくなつてしまったので、代わりに列に並んでもらつていてもいいですか？」

「は？ いや、三人もいるのだから誰か一人残ればいいだろう」

「無理です、誰一人として我慢できません」

「だったら先にトイレを済ませてから並べば……」

「無理です、ちよつと長くかかりますから」

「……三人ともかね？」

「はい。三人とも、しばらくトイレです」

「……はあ、わかった、私が並んでおくから早く行つてきなさい」

「あのう、できればお二人で並んでいてほしいのですが」

そう言つて僕は浩美さんにも声を掛ける。

「あら、私も？ どうしてよ？」

「ほら、一人しか並んでいないところに僕ら三人が入ると後ろの人たちから輦轡を買いそうなので……。二人が並んでいるなら、その代わりに三人が入つたとしても、ちよつとだけ許してくれそうじゃないですか」

「……よくわからないけれど、いいわ。立っているだけでいいんですよ？」

渋々ながらもうなずくと、浩美さんと栄一郎さんは夫婦そろつて列の最後尾へ。

そして僕は三人はトイレに行く振りをして列の様子がのぞきこめる場所にある物陰にそつと隠れた。

「大丈夫でしょうか？」

不安げに呟いたのは詠美さんだ。僕の言葉をずっと黙つて聞いていたのだが、やはり少し無理があることに気がついてしまったのかもしれない。

「そもそも俺たち三人がどうしてもそろってトイレに行かね

ばならんのだ。しかも長時間って……絶対に変だと思われただろ」

「まあまあ、僕らって普段からそういうところあるじゃない？」

「ねえよ！ あったとしても納得いかねえよ！」

浩一さんは腑に落ちないところがあるらしく、ブツブツと不平を漏らし続ける。対照的に詠美さんは両親の様子をじっと固唾を呑んで見守っていた。

それから数分後、姿を見せない僕たちに代わって、鈴木夫妻は段々列を進んでいく。そしてついにその順番が回ってきたところで、慌てて周囲を見渡し僕らの姿を探し求めている。ところが僕らは隠れたまま様子をうかがう。

と、そこで気を利かせたのが遊園地に勤める名も知らぬ係員さん。ここでは彼の活躍に敬意を表してイケメン係員と呼ぶことにしよう。イケメン係員はキョロキョロと挙動不審に顔をめぐらせる二人を発見すると、爽やかな笑顔で穏やかに語りかけているようだった。どうやら彼には二人がジェットコースターに乗る直前で足がすくんでしまったお客に見えたらしく、「大丈夫です、どうぞこちらへ」と二人の返事も聞かずにその手を引っ張ると座席に押し付けてシートベルトを締めてしまふのだった。

そうなると二人も覚悟を決めるしかなく、動き出すジェットコースターの中、仲良く隣り合って目を閉じると、やがて迫り来る絶叫に備えるのだった。

「——さて、そろそろ到着するころだな」

浩一さんがそう言っていると、ちょうどジェットコースターがスタート地点に戻ってきた。

そこから降りてくるのは、へとへとに憔悴しきっている浩美さんと栄一郎さんの二人だ。さぞ絶叫マシンに絶叫させられてしまったに違いない。

「……最悪ね、最悪だわ」

「うつうつうつうつ……」

というか、二人とも今にも吐き出しそうだった。

「ど、どうだった？」

詠美さんが二人に駆け寄って交互に背中をさすりながら尋ねる。

「一言で言えば最悪だったわ。ええ、それに尽きる」

と浩美さんが答えると、

「……同意する」

すかさず栄一郎さんもそう答えた。

どうやら二人とも全く持ってジェットコースターを楽しめなかったらしい。

これは……ふむ、面白そうだと思っていたけれど考え直したほうがいいのかもしれない。わざわざ自分から苦行に挑戦する必要性を僕は感じないぞ？

ここ、遊園地だね？ 遊園地獄じゃないよね？ そんなのあるのか知らないけど。

「まあ、でも——」

そこで一旦大きく深呼吸を繰り返した浩美さんは、やがて顔を上げてニヤリと微笑むとこう言った。

「ストレス発散にはなったわ」

そしてその台詞に、何故か栄一郎さんだけが萎縮した。

くたくたになった二人の姿を見ただけで満足した僕らは、ジェットコースターに乗るのは遠慮しておいた。そもそも今日は鈴木夫妻のための計画なのだから、僕らが無理に楽しむ必要はない。

じゃあ次は何に乗る？ という詠美さんの言葉に、すっかり体力を使い果たしてしまった浩美さんたちは、とりあえず早いけど昼食と同時に休憩しようと言い出した。ランチの時間には少しだけ早い気がしてならなかったけれど、二人には万全の状態で遊園地を満喫してほしかったので、僕らはその提案に賛成した。

というわけで、僕らは遊園地内部のレストランで早めの昼食を取ることもなった。

「……」

ところがそこに待っていたのは、普段の食卓の見事なまでの再現だった。

つまり無言、冷え冷えとした雰囲気。

とてもじゃないが団欒とは遠く離れた味気ない食事だ。

「ど、どうするの浩一さん？ このままじゃ味もわからないよ！」

たまらず僕は隣に座っていた浩一さんの耳元に口を寄せて小声で訴えかける。

そんな僕の心配とは裏腹に、浩一さんには余裕が見られた。

「安心しろ、サトウー。実は注文の際、俺はこっそり店員さん呼び止めて特別メニューを追加しておいたのさ」

なるほど、どうやら浩一さんはすでにこうなることを見越して先手を打っていたらしい。なんて抜け目ない人なんだろう、久しぶりに尊敬した。

でも特別メニューってなんだ？

「お待たせいたしました」

そんな僕の疑問を予期したかのように、タイミングよくウェイトレスさんがそのメニューを運んできてくれた。

浩一さん以外の全員の目が、慎重に運ばれてきたメニューに釘付けになった。

「こちらが特性ケーキと爽やかサイダーになります」

テーブルの中央に置かれたものは、まさしくケーキだった。ろうそくは一本も立っていないけれど、イチゴと生クリームで着飾ったホールケーキは、さながらバースデーケーキに見えた。

どうやら浩一さん、気を利かせて両親の結婚記念日を祝うケーキを注文していたらしい。ふむふむ、これはなにやら好印象の予感。きっとこの場也大いに盛り上がることだろう――。

「ええと、今日は誰かの誕生日だったかな？」

と思っただけ、この栄一郎さんの一言で台無しになった気がしてならない。

テーブルを挟んだ浩美さんの方向から、ブチッという不穏な音が

聞こえた。浩美さんの引きつった表情を盗み見る限りただの幻聴ではないはずだ、幻聴だとしてもそれはよくない雰囲気象徴しているに違いない。

僕らはあまりの緊張感にゴクリと音を立てて息を呑んだ。ただ一人この空気は無頓着なのは栄一郎さんただ一人である。

そんな彼に向かって、浩美さんは静かな怒りに声を震わせながらこう言った。

「ええ、大いなる間違いの誕生日よ、お馬鹿さん」

「へえ……。よくわからないが、ついでだし祝ってやるか」
「ほほほ」

浩美さんが口にした（結婚したことが間違いだったという）皮肉に気がつかなかったらしく、栄一郎さんはのんきに「ハッピーバースデー、ディア、まーちがあい」などと歌っている。

正直、空気が読めない僕でもハラハラした。

もちろん、ケーキの味なんてわからなかったよ、うん。

味もわからぬ昼食を終えた僕らが次に向かったのは、占いの館という相性診断をしてくれる場所だった。

実はこれ、ある意味今日の本題である。これで博美さんと栄一郎さんの相性が悪かったりすれば、もう僕らには救いようがないからね。

まあ、所詮は占いなんだけど。

「詠美さん、とりあえずどんなものなのか僕らで試してみようか」

「え？ ああ、そうですね、ぜひそうしましょう」

というわけで、最初に占うのは僕と詠美さんの相性だ。よくわからない装置に向かっていろいろと項目を打ち込んでいく。

すると、その結果に応じて相性を占ってくれるらしい。どんなものなのかかわからないけれど、ちょっと楽しみ。

そして出てきた紙を手にとると、そこにはこう書いてあった。

——大吉。なんだかねで上手くいくでしょう。

「わあ、やったね、詠美さん！ 僕らの相性は大吉で上手くいくんだって！」

「もちろん私も嬉しいんですが、この“なんだかんだで”っていう言葉が無視できませんね……。はあ、なんだかんだで苦労しそうだなあ」

折角相性診断としては最高の大吉が出てきたのに、詠美さんは物憂げにため息をついてしまう。

「なんだかんだで悩み多き年頃なのかもしれない、そっとしておこう。」

僕が関わったら余計に悩ませてしまいそうだからね。

さて、次はいよいよ問題の浩美さんと栄一郎さんの相性である。

僕らがなんとか言いこめるように誤魔化しながら二人を装置の前へ押し出すと、渋々といった様子で二人は相性診断を行ってくれた。そして出てきた結果は。

——吉。何事も努力次第です。

「当たり前だよ！」

「せめて指針を与えてほしかった！」

詠美さんと浩一さんは浩美さんたちの背後から結果を覗き込むと、うなだれて落胆してしまった。まあ、確かにちよつと抽象的過ぎて具体性がない。

浩美さんと栄一郎さんの二人も反応に困っているらしく、紙を見つめたまま黙り込んでしまっていた。

そんな二人の様子を遠めに見ながら、詠美さんは僕に向かって同意を求めるようにこう言ってきた。

「やっぱり駄目ですね、占いは。見るなら統計上のデータなんかじゃなくて実際の相手だよ、普通」

「うん、そうだよ。僕もそう思うよ、占いなんて気休めだもん」

「……だけど、その、今日の占いの結果は実現できるといいですよね？」

「んーと、大吉って結果のこと？ もちろんだよ、よろしく」

「こ、こちらこそ」

そう言ってしまうと、詠美さんは僕を待たずに先へ行ってしまうと歩き出した。心なしか、彼女は恥ずかしそうにうつむいていたようだ。

僕の勘違いでなければ、さっきの相性診断ってシールド討伐のためのパートナー具合に関するものだったはずだけど、なにやら詠美さんはそれ以上の関係性を見つめていたような気がしてならない。

よし、今度機会があったら直接聞いて見ることにしよう、そうしよう。誤解したままじゃ駄目だからね。

と、詠美さんを追いかけようと僕が歩き出すと、その動きを邪魔するように浩一さんが僕の腕を掴んで引き止めた。危つくバランスを崩して転ぶところだったじゃないか。

「ちよつと待ってくれよ、ついでだから俺も引いていきたい。これって占いの方法によつてはこの場にはない相手とも相性診断できるみたいだからな、ちよつと試してみる」

「ええつと、誰との相性？」

「……お前の姉さんだよ、言わせんな恥ずかしい」

「僕の姉さん？ ふうむ……」

確かに、僕の姉さんとの相性を確認することによつて、あらかじめ今後の危機に備えるのは必要なことなのかもしれない。それにしても、姉さんとの相性が気になるくらい浩一さんって僕の姉さんのことを怖がっているのかな？ そう言う僕もそうだけだね。

そして浩一さんが占いの結果を手にする。

——凶。しかし占いごときで凶が出たからといって諦めるのなら君に恋は向かない。

「……………」

「ま、まあ頑張つて！」

どう反応したものかと苦渋の表情で考え込んでしまった浩一さんの背を励ますように叩くと、僕は逃げ出すように次の場所へ向かうのだった。

その後も色々遊びまわった僕らは、本日の締めとして観覧車へとやって来た。

今日一日だけでも多くの苦楽をともにした僕らは、天高くそびえる雄大な観覧車を前にして、名状しがたい感慨にも近い感情を胸に抱いていた。

……ただの疲れかもしれないね、夢がないけど。

「さてと、それじゃ二組に分かれて乗ろうか」

事前の打ち合わせどおり、浩一さんが明るい声でそう提案した。

僕らはこの観覧車の前に、浩美さんと栄一郎さんの二人を一緒にカゴに乗せることを画策しあったのだ。

「いいね、お兄ちゃん。だけど、どうやって二組に分けようか？」

詠美さんも練習どおりつつがなく言い終える。そのタイミングで、僕が自然に提案するのだ。

「そうだ、ここは折角なので子供は子供同士、大人は大人同士、それぞれ仲良く乗ることにしましょうか」

そして僕は歯を見せながらニカツと微笑む。そうすれば浩美さんたちも反論できないだろうと踏んだのだ。

「それは……そうねえ」

浩美さんは僕らの思惑通り、ためらう様子は見せるもののうなずいてくれそうだ。これなら最後の最後に夫婦でロマンチックな思い出を作ることができるかもしれない。

「しかし、二人きりというのも気まずかろう」

けれど、そんな栄一郎さんの言葉でまたしても計画は台無しになってしまう。

まったく、どうしてこの人は空気読んでものを読んでもくれないのさ！……いや、ちゃんと空気を読むからこそ気まずくて二人きりが辛いつていうのもあるんだろうけどね、よく考えると断るのだって無理もないことも。

結局、計画とか言いながら最後の最後まで詰めが甘かったのは

僕らの……いいや、僕の責任だったんだろう。観覧車にしたって、二人を乗せるのなら他の誘い方だってあったかもしれないのに。

一人落ち込んでいると、そんな僕の情けない姿を見てくれていたのか、助け舟を出すように詠美さんが声を張り上げた。

「だったらお父さん、サトウーさんも入れて三人で乗ってきたら？」

「え？」「え？」「え？」

すると、僕と栄一郎さんと、そして浩美さんまでもが驚いて聞き返した。

三人つて、僕も？ この二人の間に、僕が？

助け舟かと思ったら、とんだ泥舟だったよ。

しかしながら、僕も男だ。詠美さんの提案に最も早く賛成したのは僕だった。

「……綺麗ですね」

「……ええ、景色はね」

「……ふむ」

……とまあ、見事に会話が続かない。

もう半周回って頂上にたどり着いたというのに、交わした言葉といえは一言か二言くらいなものだった。

僕らの後に乗った詠美さんと浩一さんはどうしているだろう、できれば僕と二人が交代して家族四人で乗ったほうが良かったんじゃないか？ などなど色々頭の中を考えだけは巡っていくけれど、気まずくて言葉にすることができなかった。

ちなみに、僕は男同士、栄一郎さんの隣に座っている。浩美さんは向かい側の端っこに、壁に体を預けるように寄りかかって眼下の景色を見下ろしていた。その横顔はどこか、物憂げだった詠美さんの表情に似ていて、やっぱり親子なんだなあと思っただ。

そして隣の栄一郎さんは浩一さんに似ているんだと思う。主に性格が。本人の前で言ったら怒られてしまいそうだからいわないけど。別にいやとかいうわけじゃなく、きつと恥ずかしいのだろう。

と、二人の顔を交互に見比べていると、偶然栄一郎さんと目があってしまった。隣だったのもものすごく近くて、かなりあせってしまふ。思わずここが観覧車の中だということを忘れて飛び上がるころだった。

「君は……二人の友達かね？」

ところが慌てふためいてしまった僕とは対照的に、口を開いた栄一郎さんは穏やかな表情でそう尋ねてきた。

「ええっと、そうです。そうですけど、友達以上の関係かもしれないません」

パートナーという、一緒に戦ってくれる仲間。それは友達という言葉だけじゃ物足りない気がした。

「ははは、そうか。普段の私なら、娘を持つ父親の前でそんなことを言ってしまう若造など、思い切り殴り飛ばしてしまったのかもしれないな」

口ではそう笑っているのだが、目が笑っていない気がする。

このときばかりは目の前の浩美さんも流し目で僕のことを睨みつけてきたような錯覚がして、背筋が凍った。

「……けれど、よろしく頼む。見たところ、君は悪人というわけではなさそうだからね」

そう言って笑った栄一郎さんは、今度こそ目も優しげに笑っていた。だから、僕は適当な返事で誤魔化したりせずに、きちんと口にしようと思った。

「はい」

たった短いその一言だけだったけれど、その短い僕の言葉を聞いた栄一郎さんはホッとしてくれた。それに、どうやら浩美さんも口元を優しげに緩め、微笑んでくれていたようである。

そして僕らは数分後には観覧車を降りる。

当初考えていたような思い出作りは全然できなかったけれど、不思議と僕には確かな手ごたえがあった。それを明確な言葉にするのは難しく、きっと詠美さんたちにも教えることなんてできないだ

ろうけど、僕は確かにこう思ったのだ。

ああ、今日はみんなで遊園地に来て本当によかったと。

——けれど、詠美さんたちと合流して遊園地を出ることにした僕らの前に、最後の最後で本当の障害が立ち現れてしまうのだった。

辺りはすっかり暗くなり始めた夕暮れの駐車場、周囲には他の人の姿も見えないようなその奥地で、油断していた僕らに一体の巨大なシェードが襲い掛かったのである。

6・巨大なシェード

夕暮れ時の赤みを増した薄明かりに照らされた駐車場の片隅には、僕ら五人を除いてほとんど人の姿は見当たらなかった。

帰ると決めたタイミングがよかったのか、それとも駐車場の奥地という場所がよかったのか、とにかく他の家族連れやカップルなどの人混みによって必要以上にゴミゴミと混雑していないようなので、ホッと一安心してもいいのだろう。

これなら特に渋滞を気にすることなくスイスイと車が動けるしね。きつと快適。

そのままこれといって他の人にもすれ違ふことなく、僕らは駐車していた車のもとへたどり着いた。

「ふう、さすがに今日は疲れたわね」

「ああ、私もだ。楽しかったのは子供達ばかりだろう」

「……そうね、そうだね」

車のドアに手をかけながら、浩美さんと栄一郎さんの二人がため息混じりにそっけない会話を交わす。折角の結婚記念日である今日一日が結局無駄に終わってしまったかのように、夫婦二人の仲はまるで進展していない。

ここで笑顔の一つでも見せ合ってくれば、僕らがこうして遊園地まで出向いてきた甲斐があるというのに、現実はなかなか上手くいかないものだ。

こうなったら夢でがんばろう、意味ないけど。

「あーあ、くそ、やっぱり駄目だったかあ」

「そんなに落ち込まないでよ、お兄ちゃん。確かに計画が上手くいなくて残念だったけど、とりあえず大きなハプニングもなく無事に終わってくれたからよかったよ」

「そうだな、実はサトウと一緒に来るってことになった時は不安に思ったが、変な騒動を引き起こさなかったからよかったぜ」

詠美さんと浩一さんかというと、車から少し離れたところで反省会をしていた。

なんだか僕の悪口を言っているような気がするけど、まあ、聞かないことにしよう。

そんなことより、僕も今日一日ですっかり心身ともに疲れちゃったから早く家に帰りたい。その前に車の中でぐっすり居眠りしたい。などと考えながら大きくあくびを漏らしつつ車のドアに手をかけた瞬間、僕の全身をビビッと駆け巡る確かな衝撃があった。

間違っても静電気じゃない、悪寒だ。

いやな予感がした。

「はっ？」

言葉通りにハッとして周囲を見渡すと、なんと驚いたことに光景が一変していた。

僕らを中心として駐車場をすっぽり取り囲むかのように、黒い影がドーム状に広がっていたのだ。内側から見上げると、周りはすっかり影に埋め尽くされている。

だけど、それでも視界が真っ暗な闇に包まれてしまわないのは、わずかながらに壁と化した影が不気味な暗い輝きを放っているからだろう。もともと時刻も夕暮れ時だったために、明るさにはさほど変化がなかったのは幸いなかもしれない。

とはいえ、これは一体何事だろう？

まさか遊園地の演出というわけではあるまい。もしそうなら僕は嬉しいけど。

「な、なんだあ？」

浩一さんたちも異変に気がついたのか、不思議そうにキョロキョロと周囲を見渡す。

「うーん、なんだらうね？」

僕もみんなと一緒になつてのんきに上下左右を見渡してみたけれど、何がなにやら全然わからない。いやあ、何か普通ではないことが起こっているんだらうなっていうことはわかるんだけどね。

「なんだ、これは？ 珍しいこともあるものだな」

一旦は車に乗り込もうとしていた栄一郎さんも、異変に興味津々な様子で車から離れると、すっかり影に覆われてしまった空を見上げる。

感嘆しているのか、当惑しているのか、よくわからない複雑な表情を浮かべているところを見ると、栄一郎さん達にもこの現象に關してはつきりしたことはわからないらしい。これはもうお手上げみたいだ。

僕にも理解できないし、ちょっと様子を見ることにしよう、そうしよう。

と、そのときである。

「グガアアア！」

大地を揺るがすほどのおぞましい叫び声とともに突然姿を現したのは、身の丈三メートルはあるつかという屈強な巨人だった。

人間離れたその怪物は、全身を黒々とした影に覆われている。

それはまさしくシェードだった。

……ということは、おそらく僕らの周囲を取り囲む結界のように広がった影も、このシェードが展開しているものなのだろう。

どうやら僕らはいつの間にかシェードによって退路をふさがれてしまったらしい。

けれど、こんなこと今まで一度もなかった。シェードが僕らを閉じ込めた？

「……え？」

「な……！」

浩美さんと栄一郎さんの二人は、おそらく生まれて初めて目にするであろうシェードを前にして、言葉を失って呆然と立ち竦んでいた。

今日の前に立ちはだかつている敵は、何度となくシェードと戦ってきた僕らでさえも、思わずたじろいでしまうほど巨大で獰猛そうなシェードなのだから、シェードのことを知らなかった二人が恐怖

してしまうのも無理はない。

むしろ普通の人なら、大声をあげてパニックになってしまってもおかしくはない状況だ。きっとそうならないのは、二人が常に冷静だからなのだろう。

「ギシヤアアア！」

とはいえ、いつまでも冷静沈着に立ち尽くされてしまっても困るので、僕はとつさに二人のもとに駆け寄った。

出現したばかりのシェードが一体何を狙っているのかなんてわからないけれど、このままだと真っ先に二人の身に危険が及ぶだろうと思ったからだ。

「と、とにかく逃げてください！ ええっと、ひとまず僕らの後ろに！」

きつとこの壁のように広がる影の向こう側には、車を使っても逃げられないのだろうと思った僕は、鈴木夫妻をシェードから守るように大声で背後へと誘導した。

「あ、ああ！ って、そう言う君は一体どうするんだね？」

「大丈夫です、こう見えても僕は異世界人ですから！」

「は？ い、異世界人だって？」

「そうですよ、だから僕にお任せください！」

僕はドンと大きく胸を張る。ここは無を言わず、勢いに任せ二人を説得するしかない。もたもたしていると、みんなが危険なのだから。

「サ、サトウーさん！ あれってシェードですよ、さあ早く私にキスを！」

魔法を使ってシェードに対抗するためだろう、詠美さんが僕のもとに駆け寄ってきて、決意に満ちた目を真っ直ぐに向けてくる。

だから僕は嬉しくなつて、詠美さんに顔を向けると笑顔でこう答えた。

「うん、そうしてくれると僕は助かる」

「いいえ、みんなを助けるんです！」

「あはは、うん、そうだね！」

そして半ば抱き合う格好となった僕と詠美さんは、実体化したばかりであらぶる巨大シェードを前にして、深く確かなキスを交わすのだった。

……と、そんな僕らの姿を目にしたらしい浩美さんと栄一郎さんが、なにやら後方でぶつぶつと呟く声が聞こえてきた。

「あ、あなた達ねえ、こんな非常事態になんてことを……」

「正体不明の敵を前にして熱いキスだなんて、映画のクライマックスじゃないんだからやめてくれ……」

「まあまあ、父さんと母さん、二人が言いたいことはわかるけど、ここはどうかあいつらを信賴してやってくれ！」

「しかしだな……」

浩一さんによる必死の説得もむなしく、二人は保護者という立場上なのかシェードの前でキスを交わしている僕らのことを心配して、安全のためにこの場から離れるにも素直に逃げ出すことができない様子でいた。

もちろん、それは責任感と優しさ、そして何よりも僕らを守りたいという気持ちの結果としてのことだろうから、嬉しくないわけでもなかった。けれど、やはりここはいち早く危険な場所から逃げ出していただきたい。

そうしないとシェードとの戦いに巻き込んでしまいかねないからね。

などと考えているうちに、僕の体は輝く無数の粒子となり、抱き合うようにキスをしていた詠美さんの体と一つになる。

詠美さんとの一体化に成功したのだ。

「な、な、な、な！」

「ちょ、ちよつと……」

こうして問題もなく無事にキスからの一体化が成功したのに、それを遠くから見守っていた浩美さんと栄一郎さんの二人は、口をパクパクと開閉させて驚愕している。すごく何か言いたそうなのは理

解できるけれど、聞いてあげたほうがいいのだろうか？

僕としては協力してもらっている詠美さんの体を借りている立場なので、そのご両親の前で魔法を使うのは緊張してしまう。間違ってもシェードとの戦いで怪我をさせてしまつわけにはいかないし。

うわあ、なんだか不安になってきた。

「ど、どうしたのかな？ あの人、様子がおかしくない？」

すると、その問いに心の中で詠美さんが答えてくれる。

『お父さんとお母さんは私たちの事情を知りませんから、私たちがキスをした後、そのままサトウさんの体が消えたように見えただですよ』

「ああ、そっか、そうだね。ちゃんと説明していないから、あの二人には僕が詠美さんの体を魔法で借りているようには見えないんだ」

『はい、だから私の体のままで変なことはしないでくださいね。私の精神を疑われてしまいますので』

なるほど、確かに詠美さんの言うとおりだ。ここは礼儀正しく振舞わなくちゃ。

「ええと、栄一郎さんと浩美さん、二人ともはじめまして。僕らはキスをして、サトウー詠美になりました！」

『ああもう、言ったそばからあん！』

なぜか心の内側で詠美さんが嘆いているけれど、僕はご両親にぺこりと頭を下げてご挨拶。すぐ近くにシェードが存在する今、そんな場合じゃないのかもしれないけど、こういうことは最初にちゃんと筋を通しておかないとね。

「え、詠美がおかしくなりおった……」

「ちよつとこの子、いきなり私たちに向かってサトウー詠美とか名乗り出すなんて、結婚する前から気の早いことを……。そんなことよりサトウーはどこに消えた？」

ところが僕の挨拶にも二人は気が気でない様子だ。

いろんなことがありすぎて頭の整理が追いつかないのかもしれないかもしれない

い、あとでもう一度ゆつくりと説明する必要があるだろう、そうだろう。

「ほらほら、父さんと母さんはサトウの邪魔にならないように急いで下がってくれ。すぐには信用できない気持ちも俺には十分すぎるほど理解できるんだが、意外にもあいつは頼れる奴だから！」

足を止めて固まってしまった浩美さんと栄一郎さんを前に、気をきかせた浩一さんが慌てて二人の手を取ると、シェードとは反対側のほうへと引っ張っていく。

そんな浩一さんに僕は心の中で感謝しながら、ようやくシェードに向き直る。

「グガガア！」

より強く実体化する時間を稼いでいたのか、それとも僕らの空気を読んでいたのか、浩一さん達がこの場を十分に離れたそのタイミングで、再びシェードが気を揺るがすほどの大声でほえた。

まるで詠美さんの体に憑依した僕の魔法にひきつけられるかのように、シェードのギンギンにきらめく二つの瞳が僕らに向けられていた。

「こ、こいつまさか僕たちのことをエサとでも思っているんじゃないかな？」

「ええ？」

「ほら、今にも僕らのことを食べてやろうって顔をしている気がする」

「ちょ、ちよつとサトウさん、シェードなんか絶対に食べられないでくださいよ！ あの歯に噛まれたら痛そうだから、もはやそういう問題じゃないですからね！」

「もちろんだよ、詠美さん。……よし、じゃあ行くよ！」

そして僕は気合を入れて精神を集中させる。すると詠美さんの体は両腕を中心として光り輝く。この美しく力強い輝きこそ、シェードを打ち倒す僕の魔法である。

僕は輝く両腕を体の前に出して構えると、詠美さんの身長のは

あろうかという巨大なシールドヘファイティングポーズを取った。少しだけ腰を落として、いつでも動き出せるように気をつける。

「ああもう、それにしたって今日に限ってこんなところでシールドに襲われちゃうなんて、本当に僕ってついてないなあ！ もう少しで無事に記念日が終わるところだったっていうのに……」

『まあ、こちらからシールドを探しに行く手間が省けたから良かったと考えましょうよ、ね？』

「むむむ、確かにそれもそうだね。どうやら僕ら以外の一般市民がこのシールドに襲われたりはしていないみたいだから、それは安心してもいいのかも」

『そうです、だからこのシールドはここでちゃんと退治しましょう、サトウーさん！』

「うん！」

詠美さんの言葉にうなずいた僕は、目の前にまで迫ってきたシールドが僕らに向かって大きく腕を振り下ろそうと動き始めたその瞬間を狙って、瞬間的に深く落とした腰を反動にしながら勢いよくシールドの懷に飛び込んだ。

そのままシールドの腕が振り下ろされる寸前、体当たりと同時に僕の繰り出した右腕がみぞおちに炸裂し、一段と輝きを増した魔法の右腕が火の粉のような光の粒子を放つ。

「よしっ！」

その確かな手ごたえを味わいつつも、油断することなく頭上から襲い掛かるシールドの攻撃を紙一重でかわし、続けざまに左腕で追撃を加える。

「たあっ！」

再び炸裂したまばゆい光の粒子を間近で見届けながら、ようやく僕は軽やかなステップでシールドから離れる。急所であると思われる場所に間髪をいれず二発の魔法を打ち込んだのだから、いくら巨大なシールドといえどひとたまりもないだろう。

そう思った僕は、しかしその予想をあっさりと裏切られてしまう。

「グレアアアア！」

魔法攻撃をその身に受けたはずのシールドは、わずかに体勢を崩したのみで、すぐさま最初の勢いを取り戻してしまっていたのだ。その雄たけびの勇ましさからは、魔法によるダメージを受けたのかさえ疑わしい。

「な……」

そしてシールドが己の頭上へと突き上げるように両腕を持ち上げると、その両腕が怪しげに黒い輝きを放ち始める。

それは僕らの光り輝く魔法の効果をほとんど打ち消してしまう、シールドが使用する対抗魔法だった。

『サ、サトウーさん、これって……』

「うむ、強敵だ」

どうやら今までのように一筋縄ではいかないらしい。

ひよっとすると、これが姉さんの言っていた、発生数が減少する代わりに固体値が強化されたシールドなのかもしれない。一体一体が以前とは比べ物にならないほど強くなっているというのも、このシールドを前にすると信じざるを得ない。

『強敵って、大丈夫なんですか？』

「わからない。けど、やるしかないよ。ここには僕らしかないんだから！」

『サトウーさん……。わかりました、こうなったら存分に私の体を使ってください！』

「うん、ありがとう！」

あまりに屈強なシールドにひるんでしまいそうだったけど、献身的な詠美さんのおかげで僕は戦う決意を新たにした。僕の力になってくれている詠美さんのためにも、ここで屈するわけにはいかない。敵が二発で倒れないのなら、それ以上の攻撃を試みるしかない。

「食らえ！」

どこか焦りにも似た感情を抱いた僕は、もはや相手の動きを必要以上に警戒する余裕もなく、ただひたすらに怒涛の攻撃を繰り返し

た。

けれど、黒い輝きを放つ両腕を振り回すシェードに、僕らの攻撃はことごとく防がれてしまう。効果的な一撃が敵の懐に入らず、無駄に時間だけが過ぎ去っていった。

『サトウーさん、そろそろ時間が……』

「え、もう？」

気がつけば、憑依可能な制限時間となる三分が目前まで迫っていた。姉さんの話では、僕の魔法の力も使用を繰り返すうちに上昇し、三分間という制限時間も徐々に延びていくことだろうと聞いていたけど、それにしたって今は五分くらいが関の山だろう。

これからあと一、二分というごくわずかな時間で、果たして目の前のシェードを倒すことなど可能なのだろうか？

……いや、このまま闇雲に戦い続けるだけじゃ不可能だ。

そう思った僕は、ここで一つの賭けに出てみることにした。

「詠美さん、こうなったらシェードの頭を狙おう。三メートルもある巨体を相手に頭を狙うのは危険かもしれないけれど、もう決定的な急所に一撃を加えてみるしかないよ」

『シェードの顔、ですか？ 確かにそこを狙えばさすがの巨体も倒れそうですけど、私たちでは精一杯ジャンプしたって届きそうにはありませんよ？』

「うーん、だからこれは賭けになっちゃうんだけど。もう時間もないし、いいかな？」

『……わかりました、お任せします。サトウーさんのこと、信じていますから』

「ありがとう」

僕は頭を下げて心の中の詠美さんにお礼を言うと、改めてシェードに目を向ける。

今から僕がやることは、シェードが見せるであろう一瞬の隙を付かなければならない。緊張からか、否応なく集中してしまう。

「ガララララア！」

「きた！」

そして、あえてガードを解いて無防備を装っていた僕をめがけてシェードが力強く右腕を振り下ろした。それを当たるというギリギリのところだからうじて横に避けると、シェードの右腕は勢いよく地面を叩きつける。

「今だ！」

その瞬間、僕は地面に衝突して動きの止まった大きな右腕へ飛び乗った。もちろんシェードとて易々と静観してくれるはずもなく、振り落とそうと僕がしがみついたままの右腕を肩より高く持ち上げてしまう。

だが、僕はその動作を逆に利用して、右腕が頂点に達した頃合を見計らって、そのままシェードの顔めがけて飛び掛った。高みから落ちる勢いを体重に乗せ、僕は振りかぶった右腕を思い切りシェードの顔にお見舞いする。

「グガアアア！」

見事眉間に命中した僕の右腕を受け、今度こそ巨大なシェードは地面に膝をつく。

そしてわずかな時間差で無事に着地した僕の目の前で、苦しみもかくシェードは前のめりに倒れこんだ。

ふむ、どうやら作戦が成功したらしい。

「……あ、本当にぎりぎりだったみたいだ」

「本当ですね」

同時に、ちょうど制限時間を迎えたのか僕の憑依も解け、僕と詠美さんはもとの体に戻ってお互いに顔を見合わせた。

「だけど、なんとか間に合ってよかったよ。詠美さん、大丈夫だった？」

「はい、どこも痛くありませんし、大丈夫みたいです」

お互いの無事を確認すると、やっと笑顔がこぼれる。

なんたって、これでみんな無事に帰ることができるのだから。

そう思って安心して胸をなでおろした僕が、詠美さんの手を引き

ながら浩一さんたちのところへ向かっていたときだった。

「アア、ガアアア……」

「え？」

背後から響いてきた唸り声に驚いて振り返ると、そこには苦しみながらも弱々しく立ち上がったシェードの姿があった。

どうやら、ギリギリのところで止めを刺すことができなかったらしい。

「サ、サトウーさん、まだ生きていますよ、あれ！ さあ、もう一度魔法を使って止めを刺しましょう！ 今なら弱っているみたいですよ、急ぎましょうか！」

「う、うん。もちろん僕もそうしたいけれど……」

でも、僕は力なく詠美さんに言った。

「同じ人を相手に続けて魔法を使うことはできないから、このままじゃ詠美さんとは、もう……」

「あ、そうでした……。え、じゃあ？」

「僕らには魔法が使えない、だからシェードを倒すことは……」

その先を言い終える前に、僕はうつむいてしまう。

いくらシェードが弱っているとはいえ、魔法を使わずに生身の状態でシェードに対して攻撃することは不可能である。したがって僕はシェードを倒すこともできず、時間経過とともに回復したシェードによってやられてしまうのを待つことしかできないのだ。

ああ、こんなところで終わってしまうなんて、僕は……。

と、言いようのない悔しさに唇を噛み締めようとしたその時、ふと優しさに満ちた穏やかな声が僕へとかけられた。

「どうということなのかかわからないけれど、ちゃんと私にも説明をして。もしかしたら力になれるかもしれないでしょう？」

それは、詠美さんの母である浩美さんの声だった。

そして僕はその声に、僕らを心配してくれているらしいその顔に、とあることを思い出して声を上げてしまう。

「そ、そうだ！ 浩美さん、お願いです。僕に力を貸してください

！」

「え？ ええ、私はそのつもりだけど、どうすればいいのかしら？」

「じゃあ、目を閉じて、真っ直ぐ僕に顔を向けてください。いいですか？」

「こう？」

「はい、では――」

浩美さんに軽く会釈すると、僕はゆっくりとその唇に向かって自分の唇を触れさせた。

もちろん、キスである。

僕の魔法は女性を相手にしか使えないが、浩美さんも女性だ。きつと僕の魔法を使うことができるに違いない。本当は詳しい説明も抜きに浩美さんをシェードとの戦いに巻き込んでしまいたくはないけれど、ここで無意味に悩んでしまうとみんながシェードに傷つけられてしまうだけだ。

だから僕は心の中では申し訳なく思いながら、そつと控えめに触れるか触れないかという浅いキスをするのだった。

その瞬間、突然のことに驚いたのかビクツと肩を震わせた浩美さんの体の中へ、光り輝く粒子となった僕が入り込んでいく。

どうやら、無事に浩美さんの体に憑依することに成功したらしい。「あ、あれ？ 詠美さんと比べると、ちょっと体が重いかな？ それになんだか体の節々が痛い気がするし……ひよつとして年齢のせいかな？」

『ああん？』

「い、いえ、僕の気のせいでした！ うわ、体がかかるーい！」

こうして体を共有している相手から凄まじれると、想像を絶する恐怖があるね。

怖さでいえば姉さんほどじゃないけど、僕は心臓が止まるかと思っただ。

『それより、なんなの、これは？ 私の体が君に乗っ取られた気がするのだけど』

「あ、理解が早いですね、その通りです。さすがお母さん」

『……ねえ、突然私のことをお母さんと呼び始めたのはあれかな、私の年齢を意識したことなのかな？』

「そ、そんなことより浩美さん、詳しい説明は後回しにしてまずはあのシェードをどうにかしないといけないのですが！」

『……いいわよ、私のことはもうお母さんで。それからシェードっていったかしら？ それはあなたに任せるわ。私にはわからないものの』

「そうですね、ありがとうございます。……お母さん」

まだ緊張は解けないけれど、ひとまず浩美さんのことは後で考えるとして、まずはシェードのことに集中しよう。

詠美さんのときと同じように僕が気合をこめると、浩美さんの両手も光り輝き魔法の力をまとう。それを確認した僕は浩美さんの体を使って、シェードのもとへと駆け出した。

うん、率直に言うとなり体力的な問題なのか、浩美さんの体だと走るのが辛かった。けどまだまだ詠美さんに負けず劣らず体の反応はいい。安心した。ついでだから今度しつかり浩美さんに伝えておう、いい体ですねって。

その後シェードに接近した僕は、どうやら傷の回復が間に合わなかったらしいシェードに向かってとどめの一発をお見舞いした。すると今度こそシェードは黒い霧となって消滅してしまう。それに連動してなのか、周囲を取り囲んでいたドーム状に広がる影の壁もその姿を消してしまうのだった。

そして三分後。浩美さんへの憑依が解ける。

「ありがとうございます」

もとの姿に戻ると、僕は浩美さんに向かって深々と頭を下げる。

「え、ええ。まあ、久しぶりにいい刺激になったわ。その、色々だね」

浩美さんはなにやら齒切れ悪く、気まずそうに僕から視線をそらして答えた。ちょっとだけ恥ずかしがっているように見えるような

気がしないでもないけど、僕の勘違いだったら怖いから指摘しないほうがいいだろう、そうだろう。

「だ、大丈夫？」

そこへ、心配そうな表情を浮かべながら詠美さんたちが駆け寄ってくる。

「うん、僕は大丈夫」

「私も平気よ、気にしないで」

「そうか、それはよかった。しかし、まさかサトウが俺の母さんに対して魔法を使うとは思わなかったぜ。まあ、あの状況じゃ仕方ないんだろうけど、息子としてはすごく複雑なものだな」

そう言って浩一さんは苦笑しながら肩をすくめてしまうけど、別に怒ってはいないようだ。言葉通りに複雑そうな心境みただけだ。

「それはそうだね、でもみんな無事で本当によかった。……お母さん、色々と聞きたいことはあるのかもしれないけれど、それは全部家に帰ってからでいい？ そこにはサトウさんのお姉さんも待っているから、より詳しく説明してくれると思う」

「そうね、そうするわ。なんだかちよつと疲れちゃったし、私も今すぐには落ち着いて説明を聞くことなんてできないでしょうから」

詠美さんたちは納得した様子でうなずきあうと、ずいぶん疲れた様子で車に乗り込んでいく。もちろん僕も疲れていることは否定できないから、みんなに続いて車に乗り込むことにしよう、そうしよう。

ところが、僕が車に乗り込もうとして動き出そうとしたその時、いきなり背後から力強く肩をつかまれてしまった。

何事かと思つて振り向くと、そこには栄一郎さんの姿が。

「おいサトウ君、もちろん君は覚悟ができているのだろうね？ ははは、なにしろ、私の妻子の唇を目の前で奪い去ってしまったのだから……」

そう言い終えた栄一郎さんの顔は、全然笑っちゃいなかった。

……
なんだろうね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9895t/>

君の体を貸してくれ！

2011年11月5日16時22分発行